
ミニマムビターハート

みみつくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミニマムビターハート

【Nコード】

N2273U

【作者名】

みみつくす

【あらすじ】

優等生の弟、数真。

もちろん腹の立つ美形。

私は、平凡地味な自称癒し系の姉ですがね。

仲良し姉弟なんですよ私たち。

ブローグ

私の弟は数真という。

1つ違いのこの弟はなんでもそつなくこなす優等生だ。

テスト前でも勉強しないで毎日たーっぷり寝ているくせに、進学校のウチの高校でいつも成績は上の下ぐらいにつけているし、部活では昔から剣道を続けていてそこそこには強いらしい。いつも何かの大会では団体戦メンバーに選ばれていた。

それよりもなによりも、数真は爽やかな笑顔をいつも周囲へ垂れ流している。

面倒見がよくて頼まれれば体育祭の実行委員になったりめんどくさそうな役回りをほいほい引き受けている。

ヤツのバカなところだ。

しかし『倉橋姉弟』とウチの高校で言えばピンと来ない二年生はいないと…これは友達のミヤが教えてくれたしょうもない話だ。

なんのことか？

よくある話だ。

出来のいい社交的な優等生の目立つ容姿の弟に、真面目な割に成績もぱつとせず平凡なアタマと容姿の大人しい地味な姉がいる。

ミヤの社会人の姉はウチの数学教師と付き合っているんだとかで他学年事情にも変に詳しくてめんどくさい。まあ余談だけど。

ミヤはたった一人の親友というか幼なじみだ。

数真と私が小さな頃からの付き合いで昔はよく三人で遊んだ。

数真は小さな頃から優秀でそれに比べていたって昔からやはりフツ
ーの私。

それは能力や性格だけには限らなかった…

例えば、たまに親の知り合いとか親戚の、見知らぬ大人から可愛い
とか綺麗とお世辞を言われる機会があってもね…

彼らは必ず私の側にいる眉目秀麗な数真に目を奪われるのだ。『将
来楽しみな息子さんね！』

そして慌てて付け加える。

『…お嬢さんも、可愛いしね』

ありがとうございます。

……でもね…

数真を見つめたままでほめられてもうれしくもなるとも。

しかしここでお礼を言わないと私が失礼なヤツになってしまうから、
いつも私は彼らにきちんと笑顔を向けていた。

どっちが失礼なんだよ！？

と内心フツフツと怒りながら。

今なら呆れて済ませられるが、当時はまだ幼稚園児だったので本気
で傷ついていた。

親戚も親も数真にばかり目がいく日常。

月日がたち中学生になると、今度は数真狙いの女に『将を得んとす

れば』とばかりに近付かれた。

ミヤは唯一の例外で数真に興味を示さなかったからこんなに長い付き合いになったのかもしれない。幼稚園の時からだからね。

とまあ、私にとって倉橋数真はアイデンティティを脅かす存在であり天敵でありお邪魔ムシな目の上のタンコブ的存在なのである。

1 大好きなのは炭酸水

学校から真っ直ぐ帰ると自室へ直行して勉強：

それは理想なのだけどね。

進学校の濃い授業をびっちり受け、私はエネルギーを使い果たしてしまうのだ。だから、部屋に入ると絶対寝てしまうのでとりあえずリビングで休憩することになっていた。

冷蔵庫から炭酸水を出してぐいっとあおる。

これよ。生き返るわー。

制服のまま寝転んでソファーでぼんやりしていたら数真が帰ってきた。

両親は二人とも旅行関連の雑誌の仕事をしていたり撮影や取材やらで出張が多い。会社を変わったここ数年は一年で数えるほどしか家にいない。

もう親がいないのが淋しい歳ではないからあまり気にならないけど、大変な仕事だと思う。

仕事って大変だ。実は高三のくせに私はまだ進路をきっちり決めていない。

なんとなく親みたい旅行関係の仕事もいいなと思うけど、大変そうだし私に出来るかどうかわからない。

とりあえずお金のかからない公立の大学に行ってから進路はそれから考えよう…それ自体が先伸ばしに過ぎないのはわかるけど。

正直、いまは受験勉強についていくのが精一杯で何がしたいのかなんてことまで考える余裕がなかった。

私の日常は、勉強してるか、こうやってごろごろして…気力体力回復を図っているか、毎日そんなのばかりだ。

ちつとも青春してないとミヤの姉に言われるがほっという欲しい。

「和音ちゃん？」
かずね

肩を叩かれ、それが軽い感触だったのにもかかわらず私はひゃっ！
？と悲鳴をあげて炭酸水をこぼしそうになった。

忘れてたすっかり。

そうだ、帰ってたんだよ。

「お帰り、数真」

につこり笑うと数真も輝くような爽やかな微笑で答えてくる。

「ただいま、姉さん」

少し長めの前髪からのぞく端正な顔立ちが溢れるばかりの爽やかさを主張している。

ホントに無駄な美貌だよ。

目と鼻から生まれたみたいになきちつと整った表情の読めない…どんなときも変わらない、寝起きですら非のうちどころのない顔。

別に外人みたいではない、すんなりとした肉づきの薄い小さな顔。数真のモデルなみの背の高さ、肩幅の広さ、脚の長さというパーツ

にはむしろ色気がヘンにあるくせに、淡泊な爽やかな容貌が年相応でアンバランスな感じがする。

ミヤは数真の人気の秘密はそこだというが。

どこよ。どのへん？

爽やかお天気お兄さんにしか私には見えない。
つまり。

にこやかにお天気情報を喋ってるのをただ見ているぶんにはいい。
でもだからといってそれだけだ。チャンネルを変えなくても天気予報はすぐに終わる。

こんな誰にでも優しいヤツは実^{じつ}がない気がするのだ。ホントうさんくさい。夢中になる連中の気がしれない。

「和音ちゃん？どうしたのぼーっとして」

和真は私を不思議そうに見下ろしたまま澄んだ瞳で瞬きした。手には学校指定のカバンを持っている。

部活は今日は休みなのか。

ずいぶん早い…まだ夕御飯作ってないぞ当然…

まあ二人分だから時間そんなにかからないけどな。それとも今日は数真が作る日だっけ？ならいいが。

「ちょっと休んでいただけたよ。数真くんが帰ってきたの気がつか

なかった。ごめんね」

考えを一滴もこぼさずほんわか微笑を繰り返す私。

タヌキだよ…もうね。

なんせ10年モノですからね、板についてるってもんです。

優秀な弟の姉は…平凡人畜無害な癒し系。数真を狙うファンに許され親や周囲も納得するのは、そんな私だからだ。数真はもちろんこちらの思惑なぞ気づくはずもなくうれしそうにコンビニの袋を掲げて見せてきた。

「いいよ。俺こそ驚かしてごめんね。それよりさ、新製品のプリンが出てたんだ」

プリン！？

私はソファーから素早く身体を起こし弟に向き直った。

プリンときいてはいつまでもダラけてても仕方ない。大好物のプリンに私は弱いのだ。

「えー嬉しい！ありがとー数真！」

確かに見たことないパッケージ。美味しそうだ。

とりあえずプリンを受け取りひとさじ掬い上げ口に落とす。

「おいしいっ…」

甘く広がる至福のひと時。

はあっと溜息をつく、ふと数真と目があつた。

正しくは、こちらを凝視している弟に気付いた。なぜか切なげに、

顔を美麗にしかめている。

見ているのだ、数真は。
でも何を？

「数真…？」

私は気付いてしまった。

「姉さん…」

掠れた数真の低い声。

数真の気持ちがあった。欲しいのだ、彼は私が…

私の持っているこのプリンが。

そうか。たぶん、プリンを数真は一つしか買って来なかった。だからさっきから私に何か言いたげなんだろう。

ひとくちよこせ、と。

人が食べてるの見てると欲しくなるといふものだし…確かに。

「わかったよ、数真」

数真に優しく言った。本意じゃないが仕方ない。

「ね…半分こしよう」

「は？」

間抜けな声を数真があげる。

「そんな物欲しげにみなくてもあげるから」

「え…えつと？」

半分では不満か？

数真はこちらに伸ばしかけていた綺麗な手をぴたりと制止させた。

…ちっ、やっぱり不満なのか。

たぶん食パンと牛乳も買ったからお金足りなかったんだな。朝、買い物頼んだ時忘れてて数真にお金渡さなかったし。半分わざとだけだ。

つらつらと考えていると数真は固まった微笑をぎくしゃく繰り返してきた。

「あープリンのことか」

「そうだけど？どうしたの」

まさかいまさら牛乳と食パン代払えとかはなしね。

だって、おろして来ないとお金もない。300円しかない。あー数真がコンビ二行ったなら、キャッシュコーナーでいくらかお金おろすの頼めばよかったか？

「いや…あの和音ちゃん」

プリンを断った数真を尻目にぱくぱく食べる私を見下ろす秀麗な顔は、困惑と焦燥が混ざった複雑な表情を浮かべていた。

普段穏やかな微笑ばかりなくせに、ここまではつきりした感情を躊躇なくみせるとは。何かあったのだろうか？

プリンをすっかり最後まで食べ終わってから私は数真に声をかけた。

「どうしたの？」

まあプリンごときでぐちゃぐちゃいうヤツではないだろうし。

仮にそうでももう遅いから。私の胃袋に聞くがいい。数真はまたまたじいっと私を凝視してきた。

なにか？

静かにただクエスチョンマークで答えると、なんだか暗い顔をされてしまった。

なんなのだ？ホントに。

「あのさ…くだらない話なんだけど」

「うん」

数真はどこか疲れたように目を伏せて言ってきた。

「姉さんさ…ニブイとかって言われたことある？」

「は？」

今度は私が間抜けな声をあげる番だった。

「姉さん…いや和音」

私が握っていた空になったプリンのカップをそっと取り上げ、いつの間にか隣に数真が座っていた。

確かカバンやらコンビニの袋やら持っていたはずなのに数真は身体ひとつで私に擦り寄るようにもたれ掛かってくる。

「ちょっと…地味に重いよ、数真くん？」

「姉さんはさ、これでもなんとも感じない？」

「重いわよ」

「だからそうじゃなくて！」

なんなのー！もー！

怖い顔して睨む必要はないでしょうが。

それにさっきさりげなく名前で呼びやがった！？弟のクセに生意気、数真のクセに生意気な…

私はまたイラッとしてきた。

まあ顔にはだしませんかね。

「やっぱり激ニブだよ、姉さんは」

突然、隣の数真の身体がふわりと広がったような気がした。

「ちよっ、苦しいよ、数真」

「抱きしめてるからね、姉さんを」

「いい歳してまだプロレスごっこ？もーやめなさいよ…」

「違う！」

「違わないでしょーあんたはいつもプロレスごっこしてきたじゃないの私に…特に中学の頃は毎日毎日…」

痛いし苦しい…がきっちり言ってやった。昔の繰り言なら無尽蔵に沸いて来るぞ。プロレスなんて今の中学生は見ないのだろうがウチの父が昔大ファンで家には録画がごろごろあったのだ。

それにしても顔を数真の胸辺りに押し付けられているので、息がしにくい。

「話をそらすな！」

「だからなんなのってさっきから…うつ、言ってるじゃないの」

なんの技か知らないがこれはけっこう効果がある。

息が十分に出来ないせいでぼーっとしてきた。

「……あの頃はわからなかったんだ。女なら誰でもいいと思っていたのかどうか、自分でも自信なかったんだ」

ぼんやりと聞こえてくる。

力を緩めずに訳のわからない喋りを始めた弟の声。

数真の胸は固くて温かくていい匂いにする。数真のくせにメロンか何か…スイカみたいな夏のフルーツが入ったマリン系の香水か何かをつけている。

悔しいが私の好きな香りだ。

「でもね、やっぱり俺はあの頃から姉さんに触れたかったんだ…いつも理由をつけてね。だからこの間はあるなことでして…ごめん」

「数真」

数真の腕の力が緩んだ隙に私は彼の頭を撫でてやった。

「姉さん…」

情けないほど瞳を潤ませている、数真。

ま…可愛いところもあるのだ。
所詮、１７の少年か。

こないだのことは…ちょっとだけビックリはしたがアレで数真が私にさらに頭が上がりなくなるのならなんてことはない。

うん…なんてことない。

むしろチャンスと言えなくもない。

数真の、年相応の衝動を、彼の恥ずかしい過去として押さえとくのも悪くないだろう。今のところ数真は私の言うことをよく聞くしお互い仲良し姉弟な訳だけど……

後々なにかに使えるかもしれん。

ここはひとつ、なんだかおかしな歪みを生じたこの空気をこの姉が制圧せねば。

「反省してるならもういいよ」

「和音…」

「よしよし。許したげる」

もとより怒ってないし。

「でも。和音、じゃなくて。姉さん、でしょ」

「うん…ねえ和音ちゃん」

わかったのかわからないのか弟はきゅっと今度は優しく抱擁してた。

なに？と聞き返そうと口を微かに開いたら。

数真の端正な顔がなぜか近づいてきていた。

…？

戸惑う間もなく、頭を撫でていた右手を掴まれて身体ごとさらに引き寄せられている。

「…え？」

「許してくれてありがとう」

耳元で呟かれた。

くすぐつたい甘い囁きが忍び込んで…背中の奥がぞくりと震えた。
と思ったら。

すぐに、生暖かい唇の感触に私は閉じ込められていた

——…これはアレ？

……キスカよ!?

「ん…む…んっ!？」

ちよつとさつき反省してるとか言いませんでしたあなた!?

しかも舌まで…この動めいているナマコみたいな熱いのは舌だよね!?

くう…息が出来ない。

数真に抱きしめられ、キスされてる!?

混乱した感情。心臓がなぜ逆回転しているのか?

…私は頭の稼動をキリキリとあげた。

吞まれちゃダメだ!

そう。

数真の魂胆を考えろ!

コイツは…私を自分に陥落させるつもりなんだ。

こないだの件では飽きたらず…そういうことか。

姉が自分にめろめろにならないから自尊心が傷ついているとか何とか
そういうわけかね。

負けるもんか。ちょっとばかし顔とかスタイルとか頭とか…くそう
なにもかもいいからって…

女がみんなあんたに惚れるなんて考えるのは大間違いだからね！

だいたい、血の繋がった姉弟に恋愛感情が挟まる余地はいちミクロ
ンもないだろうが。

なのに私にこだわる数真はホントおかしい。ナルシストにも限度が
ある。

ますます激しさを増す数真のキスを受けながら私は必死に頭を巡ら
す。

今両親が帰ってきたらマズイだろう。

誤解される！絶対私が悪者になるに決まってる！

そう。

数真はただただ自分激ラブなナルヤローなだけで私を屈服させたい
だけ。

私は姉として数真に対する優位性を守りたいだけ。

だから、はつきり嫌だと拒絶できない。周囲から一目置かれる数真
を手なずけて従わせて言いなりにさせて、昔、私を見ようとしなか
った連中を見返してやりたい。

あくまで私の心理的に…の話だけどね。バカらしいこだわり、現実
的でない、ねじまがった形を変えたある意味ブラコンなのかもしれ
ない。

ミヤはいつも私達を『シスコンブラコン姉弟』とからかう。

わかってる、わかってるのに。

数真はいけ好かないが可愛い弟ではあるし嫌いではないし嫌われてはダメなのだ、絶対。

頭をぐるぐると思惑が巡る…巡り過ぎて訳わからなくなってきたよ。ぐったりした私をどうとったのか数真は…さらに大胆な行動に出た。つまり。あろうことに…

数真の手が私の制服のブラウスの中に滑り込み、胸のその…先っぽを怪しい手つきで撫でてくるのだ！

「和音ちゃん…気持ちいい？」

私の顔を覗いてくる数真に見られないように顔を背ける。

な、なんてことすんだよ！？
さらに怪しい手つきは下へも伸びてきた。またまた数真に濃厚なキスをされながら胸やら…もう片手はお腹から下へ下へと浸蝕していく。

指の動きにぼうつとしてしまったのはいかんともしがたい…でもでも言い訳をさせて欲しい。

『1つの間』のことだ。

数真はこの間、私が寝ている部屋に入ってきて似たようなことをし

てきた。

最初は他愛ない学校の話だったのがいつしか恋バナになり、姉さんはどのくらい経験があるのかとなぜか数真に真剣に詰め寄られていたのだ。

真面目に聞かれては正直には言えない。恋愛の話題なんて数真にしては珍しいことだったし。

まさかキスもまだなんて…言えなかった。

勉強でも見た目でも弟と比べて惨敗な姉として…せめて人生経験ぐらいは上を行っていると思われなくては、立場ないじゃない。姉として。

だから嘘をついたのだ。キスも初体験もとくに済ませているのだと。

そしたら数真は豹変した。

いきなりベッドに押し倒し濃厚なキスをかまし、体をまさぐってきやがった。まあその時はたまたま両親が家にいた日だったからそれだけで終わったけど。

いや、ファーストキス奪われているんなトコ触られてそれだけでもないんだけど。

とにかくあれはかなりビックリした。数真が数真でないみたいだった。

本気でヤラれるかと…びびった。

あれからけっこう時間がたった。

明くる日から一切その話題が数真から出ないので、私もすっかり記憶から消して、無かったことにして安心していたのだ。

毎日同じ家に暮らす弟がいままで通りの『弟』じゃなくなるなんてそれは絶対有り得ないから。

両親はアフリカかどこかに行っていて、こんな真昼間に急に帰ってくることはないだろうことは私にも想像がついた。
小賢しい数真のことだ。

どうせ親にはメールで所在確認くらいやっているに違いない。

て…つまり。

この家には姉を襲う気マンマンな弟とふたりつきり！？いやもう襲われてるし。

なんてこった…

まさかまさか優等生の数真が再びこんな暴挙にでるとは！
そんなに姉に初体験先を越されたことに腹がたったのか？

…しかしなんで今日なのか。

その疑問にはナイスタイミングで数真が質問で解決してくれた。

「和音ちゃん…今日は安全日だね？」

狙いすましたように言ってくる数真。

そっということ！？

なんで人の…を把握してるの!?

リビングの壁面に置かれた鏡に私と数真が映っている。なんていうかなんていうかも…むちゃくちゃやらしい。下手に数真が夏服をきっちり着ているぶん、ほとんどいろんなトコが隠しきれてない格好の私は、どこの女子高生モノかというほど、エロい。エロすぎる。

おまけに。

さつきから執拗に数真に胸と股間をやらしく刺激されてヘンな気分になってきてしまった。

「姉さんの、グシヨグシヨだ。ぴちゃぴちゃ音たててるね」

恥ずかしいこと言うなー!

「それに、すごい締め付けてきてる」

…っう。

「勝手に腰が動いてるし…まだ動かすなよ」

あーもう言わないでよ!

泣きそうマジで…

「そろそろか」

ちよつとちよつと!?

何が『そろそろ』なの!?

いいかげん冗談じゃなくヤバイと抵抗しようにも、私の口から出るのは訳のわからない声だけ…

喘ぎ声ってヤツ…。

ああもう白状するけど。

この時私は何も考えられなくなっていました！

ええ。たぶんもう数真のヤツに言われれば『お願い』でもなんでもしてねだったに違いありません！

数真はクスッと笑うとそういえば姉さん、と話しかけてきた。

「姉さんさ、プリンも好きだけどアイスも好きだよね？」

もちろん、唸っていた私に返事は期待していない。

「イチゴアイスバー」

クスクスッと楽しげに囁く数真。

「意味わかるかな…今からあげるからゆっくり味わってよ。仕上げは練乳がけ…姉さんと俺のでね」

数真のクセに数真のクセに…！

オヤジくさい台詞に怒りを震わせながら、私はとうとう数真によってムリヤリ『オトナ』にならされてしまったのでした…

2 闘いすんで

終わった。

マジでもう…いろんな意味で終わった。

ベッドから身体を起こすとそこにはもう数真はいなくて代わりにメルが着てた。剣道の稽古日？ああ学校の部活じゃなく道場のほうねふーん。

9時には帰るってなにそれいちいち教えなくていいし。いつもこんなにメールしてきたっけ、あいつ。

なんかダルい。

そのせいかやさぐれた感じでしか頭も心も回らない。

フツー、弟に無理矢理ヤれたら、もっとテンション高くコメントしなきゃダメですかね。

本当ーにダルい。

そりゃそうか。

リビングで三回続けざま、お風呂場で身体を洗われてたときにまた一回、で、また身体洗って今度は2階につれてかれて、私の部屋で二回、ベッドが汚れたのとベッドが狭いという理由で、数真の部屋で三回。

何処の種馬なんだあいつは。しかも全部中だ…いや、避妊はしてるといってたけどアレを装着してはいなかったような。どういうことなんだか。もう考えたくない…

腰がどーんと痛いです。

そして股の違和感が凄い。こっちは痛いというよりなんていうかスーッとします。じんじん痺れたようなダルさがいつもと違う異常な感覚。

数真なら開通したからだよとか言いそう。

くそう…

最初からむちゃくちゃ腰振ってばんばんねじ込みやがって！

痛いって言うてるのに、ヤツは笑って『和音ちゃん可愛い』と手…いや腰をゆるめなかった。

二回目まではただ痛いのと異物感と激しさに訳がわからなかった私。

それ以降は…

アレですかね？弟に調教されちゃうみたいなお展開。

バカか私…。

実の弟にヤラれてアンアンよがって…確かに後半からは気持ち良くなって恥ずかしいことも言っちゃったしいろいろ受け入れちゃってた気がするが思い返したくないよ。

ふと、メロンとスイカの香りがした。

数真の香りか。男っぽい匂いに香水が合わさって…

私はぎゅっと目をつぶった。

数真の部屋で数真の匂いに包まれながら考えても上手くまとまらないのに。

これからどうなるんだろう。

……え？

ドキン、と心臓が跳ね上がる。

これからって…？

年頃の弟の暴走に巻き込まれただけなんだから、私と数真の関係が変わるわけない。何も変わるわけがない。

うん、なに血迷ってるのか。

はあ…気が重いし疲れた。

もう…なかったことに出来ないかなあ…

『和音』

脳裏に響く、掠れて甘い数真の囁き。

『ずっと好きだった。他のヤローになんて絶対ヤラせない。この身体も心も全部俺のものだからな』

数真の凄みのある強烈な微笑。

『和音ちゃん。俺から逃げられるなんて考えるなよ。』

…毎日エッチしてたら俺たち、離れられなくなるだろうな。

覚悟してなよ』

無かったこと、なんて…

たぶん無理、だよな…。

…はははー…

………はあ。

3 休戦にはならないかな？

数真はぴったり9時に帰ってきたらしい。

なぜ、らしい、なのかというと2階の自室に籠っていた私はヤツと顔を合わせていない…数真の部屋のドアが閉まる微かな音をその頃聞いたただだからだ。

あれだけヤツといて剣道しに道場行くなってどんだけ体力余ってるんだ。

こっちは全身ダルくて仕方ないっていうのに、ヘンタイめ…いや、エロガキめ…

「和音ちゃん？」

シャワーを済ませた数真が部屋をノックしてきた。

「寝てる？入るよ」

丸まって布団に潜っている私の側へ、数真は座った。

ギシリ、とベッドが軋む。私は、思わずビクリと身体を震わせてしまった。

それをどうとったのか、数真の声は少し…微かに悲しそうに聞こえてきた。

「ゴメン」

数真も疲れてはいるのだろうか。顔が見えないからわからない…今

は見たくないから別にいいけど。

黙ってじっとしていると。

「まさか初めてとは思わなかったから…ゴメン」

数真はぽつぽつと話しかけてくる。

「俺、ずっと和音ちゃんが好きだ。

決めてたんだ。

和音ちゃんは姉だけど、俺はそんなの構わない。

和音は俺のモノだから」

私はブルブル震えてきた。

「和音ちゃん」

「アンタにとってのはただのエッチなんだろうけど！私はアンタのモノじゃないから！」

とうとう我慢しきれず私は布団を跳ね上げ数真に向き合った。

「怒ってるの？」

「当たり前でしょ！？」

何処に弟にヤラれて喜ぶ姉がいるか。少なくとも私は違う。

私は、数真に屈しない。

「俺のこと…嫌い？」

「そんな切なそうなフリしても無駄。アンタの本性は知ってるんだから」

「へえ…面白いね」

数真はサツと表情を変えてきた。

今までの優等生ヅラは消え代わりに底の知れない妖しい微笑を浮かべている。

「俺の何を知ってるって？」

楽しげに言ってくる。

私は、思わず着ていたパジャマの胸元を握りしめた。

ごくり、と唾を呑む。

まさかこんなタイミングで全面对決するとはおもわなかったけど仕方ない。

「聞くよ。言いなよ」

「あ…アンタは」

私は思いつくままにあげつらった。

「真面目なフリしていい人ぶってるけど、本当は他人なんかどうでもよくて、めんどくさいと思ってる。」

でも人からの評判の良い自分が好きだから、仕方なく周りに親切に
してる。

勉強も、真面目にやればトップを取れるくせに他人に嫉まれたくな
いからそこそこでセーブ。

大好きなのは自分だけ。

他人なんてどうでもいい。

私のことも姉なのにアンタは馬鹿にしてるんだ」

なんかむちゃくちゃ。

コドモっぽい…

後半なぜか上手く声がでなかったし。

数真は呆れた表情で私のアタマにポン、と触れてきた。

「よく知ってるじゃん。さすが姉」

「そ…その姉にあんなやらしいことしてアンタはっ…」

「だから泣きながらそんなコト言っなよ」

「え…」

フワリと抱きしめられる、数真に。羽のように。

また何かが、跳ねた。

心臓の音？

いや…気のせいだ。

ドキドキする場面じゃない。対決してる、んだから。数真は甘く優しい表情で私を捉えてくる。

わかってる。これはヤツの試み。

私を懐柔し手なずけようとする作戦…なんだ。

私は泣いてなんかいない。これは、興奮状態でつい出ちゃった汁だから別に意味のある涙じゃない。

私は冷静だ。

おかしいのは数真だ。

弟のクセに私を優しく抱きしめてどうなるんだ。

ただヤリたかったからと嘲えばいい。ちょうど側に転がっていたからヤッただけだ、と。

そうしたら私は…

「アンタなんか…」

キライ。

そう言えればいいのに。

でも。

私は数真を見上げた。

まるで愛しい者を見つめるかのような眼差しとぶつかる。

なんで？

私は心を背けた。

眼差しに縫い取められた私の瞳は数真から外せない。
見つめあう。

私の胸の奥に、熱いものが満たされてゆく。

これは何？

数真の想い？

私のじゃない。

私は、

私は。

……私、は？

「和音」

甘く囁くな、数真。

「だいすきだ」

優しく触れるな。弟のクセに。そんな目で見るな。

——重なり合う、唇と唇。

息遣いが、遠い。

何も考えられない。

ここは何処でもない世界だ。

キスしているのは知らない男。会ったこともない男だ。

気持ちいい。

ただただ気持ちいい。

深い眠りにつく前に訪れるまどろみ。

淡い感触に温もりが全身に纏いつく。

突き放せないのは数真の匂いに酔っているから？数真の熱が心地よいから？求められて嬉しかったから？

——違う。

私はそつと目を背けた。

何かが、暗闇のなかをはらはらと落ちてゆく…

堕ちてゆく。

綺麗な白い輝きを私はぼんやりと眺めていただけだった。

止めはしなかったんだから共犯、なんだろうか？

——いや。

今だけの現象なんだ。

すぐ終わる。

すぐ目が醒める。

数真は弟。

大事な、憎らしいけど愛しい弟だ。

——休戦も停戦も出来ない。結局。どこかで自分の溜息が聞こえたけどもう後の祭り。

この日また…今度は自然に私と数真は身体の関係を持ったのだった。

明日からいつたいどうなるんだろ？

考えたくない…。

4 電車にて

翌日。

私は痛む身体を引きずるようにして学校に向かった。

先に行ったかと思ったが、駅の改札口で私を見つけると微笑を浮かべて近付いてきたソレは遠目にも際立つ容姿だった。

色素薄めのサラサラとした髪、目を逸らしたくなるほど整い過ぎた顔、バランスの良すぎる体格。

やっぱりいたか…。

数真。

「出たな…」

思わず呟く。

改札を通り、背後に気配を感じながらいつものようにホームへ向かう私。

学校まで乗り換えありで40分。

はー…。

昨日のコトを考えると赤面してしまう…いや、うん、毅然としなくてはいけな。

しかし一緒に学校に行くのか…。いつもそうしてきたんだからまあ今日別々なのもかえっておかしいだろうけど。
なぜかわからないがヘンな胸騒ぎがする。

これって羞恥心なんだろう？それとも条件反射的な反応なのか？

まあ…だいじょうぶ。

うん。何処から見たってわからない。今朝も鏡で何度も確認してきたし。見た目に、私にはなんの変化も無かった。なんか拍子ぬけるぐらいちつとも変わらない。いやみかけ変わってても困るんだけど。

ただ…。

「和音」

うつ…コイツ、なんとかならないの…。

「ずいぶん疲れてる」

誰のせいだ誰の！

慣れ慣れしく、数真は私の肩に手を置いてきた。

それはいつもの、姉を気遣う優等生の仕種に変わりはない。

だけど。

「数真くん、喋りがヘンだ」

数真の手を肩からべりつと剥がして私はにこりと爽やかに笑ってみた。

ホームは混み合っている。入ってくる電車に乗って仕舞えば満員だからもう余計な話をする余裕もなくなるだろう。

「あのね、あなたはもうちょっと賢いのかと思ってたけど？」

「へえ……」

数真の瞳が興味深げに輝く。

「つまり？」

「言葉に気をつけてねってこと。いくら姉弟でもケジメは大切だよ」
にっこり押すように告げる。
言外に伝わったと思う。

「昨日の件は無かったことにしましょうね？ 私たちは姉弟、いいわね？」

「同意以外は否認とす。賢い数真は理解したはずだ。」

「……ふうん……まあ……面白いね」

鮮やかに流し目をくれると数真は車両からホームに溢れた人波をやり過ぎすと、電車に乗り込んだ。

「和音ちゃん」

数真に腕を掴まれてぎゅっぎゅっ詰め車両に乗る。

…私、バカ？

なんで女性専用に乗らなかったんだ…

5 電車にて 2

……。

隣の人に潰されそうになりそうでならない…

なんとも微妙な隙間がかるうじて残されている満員の車内。

揺れに合わせて踏ん張るのだけど嫌でも身体が時々触れてしまう…。

もう…いっそもっと身動きとれないぐらい混んでたら、こんなヒヤヒヤなくてすむのに。

いや、それはそれでマズイか。

このポジショニングは心臓に非常によろしくないから！呼吸障害とか絶対起こすから！

…うつ…。

まるで酸欠の水槽中の金魚みたいに頭上をちらつと見上げる私。

数真は大きな瞳で私を見下ろした。

くう…！

今、ニヤッて嘲ったよ！？表情、変わらなかったけど微かに唇が動いたから！

ヤツは…絶対楽しんでる。

くそう…。

今の私の状況を簡潔に説明すると。

私の左手は数真の右の腰辺り。

ドア付近に向かい合うカタチで立っているんだけど。

あの超絶美形の愚弟と。

この左手で突っ張っているだけで、ほぼ…

密着状態である。

なんなの…もお…やめてどんな恥ずかしい罰ゲームなんだよ…

という私の心象風景を察して頂きたい。

昨日、弟とさんざんシておいて密着ぐらい、と思われるかもしれないが、昨日のアレは事故みたいなものだから。

弟はまだ人生経験も少ないし、性欲と愛情をカン違いしているだけだ。

私はたまたまその衝動に巻き込まれただけ…うん。

お互い、日常に戻れば大丈夫。

数真は弟、私は姉。

おそらく真っ赤になっている私を数真は勘違いしてる。
カラダがこんなにくっついたら意識しちゃうのは…別に弟でも他人でもね。生理現象なんだから、深い意味はないのだ。

——！？

電車がカーブに差し掛かり大きく揺れた。

前から伸びてきた数真の腕が私を乗客から庇うように、私の身体をドアに押し付ける。

ぎゃあ！！

睨みつける。

が、ヤツは全く意に介さず甘やかに蕩けるような笑みを浮かべてきやがった。固まる姉、に数真はさらに身体を押し付けてくる。

「…や…」

電車の揺れに合わせて絡め取られるように抱きしめられてゆくのだ。

こ、公衆の面前で…

しかも手が、背中とかお尻の上を…微妙にエロい動きで撫でながら抱きしめてくるし。

…なによりゼロ距離の密着感圧迫感。

嫌でも昨日の…むにやむにや…を連想させるし！

数真の身体って、硬い…私こんなに、ぽによぽによしてた？さつきからお腹に当たってるのは何かなんてストップ！！考えるな私！

も、無理。

動揺するなっていうても…私の頬に数真が近すぎるんだから！息遣いが生々しいんだよ！

「ダラシナイ顔すんな」

チュツ。

「…ひゃっ…あ…」

「いい声」

しれつと数真は呟きやがった。

今の喘ぎ声じゃありませんからね！？

ビックリしただけだから！

…私の属性はいつからツンデレになったのかいや違う。

それよりちよつと待て…チュツて、首にいま…したよね！？

周りは気付いてないのか、それともかなり不本意ながらただのバカ
ツプルとか思われているのか…くっ。なにこの公開羞恥プレイ…

みなさん違うんです、これはエロい弟にムリヤリされてるだけです
——って余計に恥ずかしいわ！

なんでこんなにドキドキするのか自分でも納得がいかない…。

数真の呼吸が、体温が。首筋に寄せられる息、近すぎる数真の鼓動。

——ドキドキ、する——！？

いやいやいや。待って、弟、ですから。

弟相手にドキドキなんておかしいからね。

トキメキとビクビクは別物よ。

私はビクビクしてるだけ。

そこは間違わないようにしないと。うん。

…うう…数真め。

私のチキンハートを持て遊びやがって。

覚えてろ…

「あ」

でもなんというか首筋にまだ当たってる…唇？

時々、歯がさりげなくたてられる度に、

びくん！？

腰にくる…うう…

オマエは吸血鬼かとツツコミ入れる力もなくなるね。

と、吸血鬼…数真の囁きが髪の間から吹いてきた。

「もっとキス、しょうか…？」

はむっ。

は！！！？耳を噛んでるし！？

青くなる。キスってキス…く、唇にですか！？

「や…」

「ゴメン独り言」

「っ…」

遊ばれてるよ…

電車の中ってこんなに心臓に悪かったなんてね。

数真にハグされかつ時々首筋をはむはむされながらの40分（乗り換えあり）はまさに理性と本能のせめぎあい。

人畜無害平凡温厚な私には分不相応な体験ですな。

も…数真の発情期っていつ終わるんだろうか…？

6 学校にて

やっと、学校に、着いた。

自分の教室の、自分の机がこれほど愛しいと思ったことがかつてあっただろうか――

学校なんて授業なんてプレッシャー以外の何物でもないはずが、心底ホッとする。

数真にカバンを持たれて、憔悴しきって登校した今日のこの屈辱を私は忘れない――

登校中、電車の中以外では不埒な行為はなかった…手も繋がれなかった会話も自然だった何もおかしくはなかった。

ミヤにも玄関で会ったけど、私を見てとくに意味深な反応も見受けられなかった。

よかった…

まあミヤにバレてなければほかはだいじょうぶ。
ミヤは鋭いし幼なじみだから一番の難関なのだ。

午前中の授業はたった今、あと一つで終わりになったところだ。

「…はあ」

ぱたつと机に突っ伏す。

こそつと鏡でチェック…

うん、疲れた顔もそれほどわからない。朝よりクマも目立たないし。

ふう…。

窓からはもわつとした夏の大气が眺める。

青い空、白い入道雲。

私の目に映る梅雨明けのきつぱりと晴れた空。

乾いたグラウンドはここからだとは砂漠みたいにみえなくもない。

これから夏だ、って感じの天気だけど…

期末が終わったなら夏休み、か…

夏休みってさ、毎年、塾の講習とかで忙しいから…楽しみってテレビの再放送くらいだったし、とくに今年は受験生だから憂鬱だよ。うー…こないだの模試結果、たぶん悪いだろうし。ユウウツだ…。

——数真は…

今頃涼しいカオして教室にいるんだろうか？

何もなかったカオをして？

——む、ムカつく…

エロいくせに衝動のみのガキのクセに…！

「倉橋さん？」

内心で身もだえまくっている私の目の前に、同じクラスの佐々木くんがプリント片手に立っていた。

きよとん、と人懐こそうな柴犬みたいな瞳をぱちぱちさせている。

「教室移動ってタルいよね…」

「だいじょぶ？なんか体調よくないみたいだけど」

「へっ…あ、あ、次…って…生物だっけ？」

授業ではスライドとプリントしか使わない——のに、わざわざ生物教室でやる必要性がよくわからない。だから移動をすぐに忘れるんだよ。

「うん」

佐々木くんは、やんわりと笑った。

私と同じでそれほど目立つタイプではないけど、優しい雰囲気の本モノの癒し系で、彼のさりげない気遣いに思わず突っ伏していた身体がぴんと伸びた。

「行こうか、倉橋さん」

「うん」

癒されるなあ…この笑顔。

そういえば教室には人もまばらで、残っているみんなも教室を出て行っている。

「わざわざ声かけてくれたんだ。ありがとう」

「余計なお世話かなとも思ったよ。倉橋さんてさ、しっかりしてるんだけどなんかこう、時々ぼーっとしてるよね」

悪気ない笑顔で佐々木くんは呟くように喋ると、ハッとしたように慌てて言ってきた。

「ゴメン、別にけなしてる訳じゃないから！その…」

私はクスッと息を漏らした。

「いいよ、弟に比べたらボケボケだからねー」

佐々木くんはすまなさそうに顎の先を軽く擦っている。

「うーん…そう言うつもりはないんだけど…」

もによもによいよどむ佐々木くに明るく笑いかけて私は立ち上がった。

「とにかく、いこつか？」

「そ…そうだね」

これ以上話すとぼろが出そうだ。

佐々木くんみたいに優しい人にヘンな当てこすりなんかして、今日は本当に体調が悪いのかもしれない。いつもなら、数真のことなんて自分から話さないし周りだって別段なにもいいやしない。たまーに、一部の浮かれた一年女子に声かけられるけどそれも不快なほどしつこいわけでもない。

一応、昔の名門校…今は私立に押されてそれなりの中の上のギリギリ進学校だから。なんだかんだと数真についてうるさいのは、まだ受験まで少し時間がある二年生の一部女子くらいで、しかも面と向かって私に何か言われることはない。

うー…佐々木くに悪かったな…

イジケて八つ当たりしそうになってゴメンね、って言えたらな…

佐々木くんはさっきのやり取りを気にした感じもなく、廊下を一緒に歩きながら生物教師の出したプリント課題についてニコニコ喋っている。

いい人だな…

相槌をうちながらほんわかった気持ちになる。

彼氏いない歴イコール年齢の私にも、彼氏は無理めでも優しい男友達がいるのだ。

佐々木くんか…

中学まで部活に入れ込んでたせいか、意外に肩とかもがつちりしてるよね。程よい筋肉…ソフトマツチヨまではいけないけど、背も普通に私より高いし、顔も綺麗だし、絶対大学行ったらモテるだろうなあ…

なにより優しいしね。

彼なら、どんなふうにカノジョが出来たら…抱くん…

——！？

「倉橋さん？」

わわ——！？

「立ち止まってないで、タナカは出席とるから早くいかないと？」

う…ハレンチ以外の言葉を思い付かないが一瞬佐々木くんにものごい失礼な想像をしてしまったよ…

「早く早く」

腕、引つ張らないで下さい…佐々木さんよ…歩けます歩いてますから…恥ずかしいですってば…

なんか申し訳ない。ドキドキしてる…。

友達なのに…分不相応なのに、ヤラシイ上に図々しい女になってるのか、私。

さらに落ち込むわ…。

佐々木くんの相変わらずの親切がこんなにいたたまれないとは。

生物の授業はとりあえず根性でこなした。

人間、気力で乗り切ること大事。人は恋愛とか性欲ばかりアタマいっぱいお腹いっぱい生きていけるほど、ヌルくいられない存在だ。そんな自分は、想像できない。

もうちょっとアタマも顔もよかつたら多少ユルくても許されるのだろう。むしろそれが魅力になるかもしれない。

でも。

私みたいなスペックでは、真面目とか温厚とかだけが他者評価に値する代名詞なんだよ。

親だって周りだって、マジメだねって呆れながらもそれが私だと受

け入れてくれている。

——数真。

すべての元凶、血迷い工口愚弟。

…絶対無理なんだから。

カラダで教える？

カラダから好きにならせる？

ないない、ないから。私は理性を重んじる人間として認めないから。

弟を…

異性として、好きになるなんて、ない。

絶対に。

7 学校にて〳〵昼食タイム

生物が終わって昼休み。

まだ昼か…。

もう夕方くらいになっててもいいんじゃないの？

じきに夏だし、サマータイムが導入されても反対はしない。むしろ推奨したいとくに今日は。

ああ帰りたい…

あ、あの家はダメだな。

姉に欲情するヘンタイのいる魔窟だ。
出来たら帰らないでおきたい…

どこか遠くに帰りたい…

異世界トリップとか、ないだろうか？

今なら躊躇なく馴染む自信があるんだけど。

朝から興奮しっぱなしでいい加減アタマの放出ホルモンが枯れてき
そうな勢いである。

お腹が不思議と空かないのはそのせいか。

膝の上の、サンドイッチをみる。コンビニのよくあるハムチーズだ。

割と好きな具だといえる。

そしてゆつくりと。隣の愚弟を、これを渡してきた当人を、見る。

「これは？」

なんですか？

「昼メシ」

見ればわかるそれは。

「…聞きたいのはなんであんなに三年の教室に来て……佐々木くんや深沢さんと楽しくご飯を食べようとしていた私を…拉致ったかという点だけど」

連れて来られたのは裏庭の一角。

ちょうど校舎からは視覚になり、近くの武道場の出入口からは茂みの裏になり、こんなとこにいたら怪しいことこの上ない。

ああ！と目を軽く見開くと困ったようにテレ微笑を滲ませる弟。

…わざとらしすぎる。

数真は私の顎にそつと触れた。

「俺がどれだけ姉さんに会いたかったかわかる？」

いやわからんし興味もないから。

「数真。余計なゴタクはいいから用件は？」

私はすすつと軽く距離をとる。

近付いたら負けだよってことぐらい私も学習済みだ。
ホントはこうしてふたりきりなのも危険行為だ。

つくづくこのシュチエーションに陥ったことに脅威を感じる。

数真の戦略…なんて姑息な…狡猾な…

それは、昼休みが始まると同時だった。

数真がきた。

佐々木さんと深沢さんとなんとなく席をくつつけてご飯を食べよう

と、買い置きしてあったパンをカバンから出した時だった。

『ああ、いたいた姉さん、一緒に昼メシ買ったから、食べよう』

いきなり現れ勝手な発言——当然断ろうとすると——
ヤツは思い付いたように付け加えた。

『そういえば、昨日ずいぶん体調悪かったみたいだけど、病院行つたの結局？』

——…

麗しい微笑には、過剰なフェロモンたっぷり添えて。

深沢さんはもちろん、間近で数真の笑顔に当てられてしまった佐々木くんまでもが、ぱーっと頬を赤らめていた。

——なんて老練、老獪な…

数真の言葉だけ聞いたら、優しい優等生の吐くセリフだ。

しかしフェロモン笑みによって淫靡な場面を匂わせる——私にだけわかるやり方で。

そこがこの弟の卑劣かつ狡猾なところだ。今日ぐらいそつとこつとという思いやりはないのかこのエロ愚弟には…

いやそんな期待するほうがヘンか。

「素直じゃないな、姉さん」

「あんたみたいに本能だけで生きてないから」

静かに告げるが数真は涼しげににっこり笑った。

「俺は欲しいモノだけあれば満足なんだ。ある意味謙虚に出来てる。和音もそう思うだろ？」

…自分に自信がある人間特有の威圧的オーラ。

この弟は容赦がない。自分のしたいことやりたいことは必ず実行する。

だからイキナリ昨日姉を襲いやがったんだし。

第二対決、だな。

私は芝生の上で膝を抱えて数真からパンツがみえないように気をつけながら睨みつけた。もともとぼけた顔つきも少しはキリッと見えたら成功だけど。

数真は目を細めて微笑を浮かべているが、これは例の——皮肉な表情、なのだろう。

なんとも甘く、淫猥な視線に思わずまた腰の奥が勝手にモゾつくのが悔しい。

——だいじょうぶだろうか。

いやそんな弱気でどうする。

人はケダモノじゃないんだ数真を除いて。コイツのフェロモンに当てられない唯一の存在。

それが姉だ。私だ。

……。

長い沈黙も時間にすれば一、二分に過ぎない。

「数真。なんで昨日、あんなコト、したの」

「あんなコトって？」

ちつ、わかってて言ってるな。

私の羞恥心を煽ろうとして、か。

「あんたは……」

私は思わず周りを見た。

学校で喋るような問題じゃ——ない。

でもまた今日も夜は数真とふたりであの家にいなければならないのだ。

冷静に話せる中立の場は学校しかない——だろう。

数真はフェロモン濃度を下げずに見つめ続けてくる。

ああ、うう……

「昨日アンタがふざけてやったコト、について謝って欲しいの」

あえてボカシた表現で話を進めようと唇を舐めた。
緊張でずいぶん乾燥してる。

「ふざけて？……あー」

数真の……囁きが聞こえてきた。

「いきなりお尻も……は、やっぱり引いた？」

——！！？

「なっ！？」

なに、ななな何言い出すんだ——！！

「昨日はノーマルだけだったから回数でこなした感が、物足りない？んー…ケ。攻めも途中だったし、俺の。リ責めで和音ちゃんだけ勝手に何回もイッちゃうし。」

やっぱり同時にイクってのは現実無理かな…」

あうあうあうあう…！！

「ゴメン、で…すっごい顔真っ赤だけど大丈夫？」

も、もおいしい…やめてとめて。

「う…うう…っ…ヘンタイ…！」

せいっぱいの罵りに、なぜか朗らかにいとしげにウィンクが飛んでくる。

「なに言ってるのー男はみんなヘンタイだろ？」

「あんたは男じゃなく弟！違うからっ！」

「へえ…じゃ、その弟に跨がってよがってたのは誰だっけ。確か何

「回か自分だけイツちゃってたよなー？」

——馬のりだったよ？

…って、そんな指摘はっ…

「あ、あんた、ホント最低…！」

「んー最高の誉め言葉だね」

くすくすくす。

鮮やかに艶やかに、数真が笑う。

長い指に、つい、と私の顎がまた持ち上げられた。

瞳を、心を見透かすように覗き込まれる——

「いつもマジメな姉さんの恥ずかしい姿も恥ずかしがる力才もどっちもいいね。

…今日も夜は長くなりそう、だ…」

「っ！」

魔性の瞳だ。

ヤバイ、この男、ヤバイよ…！

数真からじりじりと撤退しながらなんとか立ち上がり膝から落ちた

サンドイッチを拾うと一目散に逃げ出した――。

「俺はオマエが好きすぎるんだよな。姉でもなんでも別に構わないよ。他の女はいらない」

――て、撤収……。これは戦略的撤退だ……！

立て直し……立て直さないとっ。

数真め――鬼畜めっ……

確かに弟に……ファーストキスもバージンもイッちゃう感覚も全部ぜんぶぜんぶ奪われ教えられましたとも！

昨日はなんとかおしりとお口の貞操は守ったけど……

ああー何言ってるんの私。

お天道様に顔向けできないこんな話題。

「……和音ちゃん」

私は聞こえていなかった。

「甘いねー。俺が遊びにしろ本気にしろ欲しいモノにはこだわって知ってるだろ？」

立ち上がり逃げ出す私に浴びせられる嘲笑。

「本気が気の迷いか」

私の背中に投げ付けられる言葉の刃。

「それは判断してもらうかな…オマエに」

8 逃走そして放課後 1

数真から逃げながら――

走っても走っても。

振り払っても振り払ってもこみあがってくる。

なにがって、もうなにがなんだかわからないよ。

自分のこの、ごちゃごちゃの感情は気に入らない。

恥ずかしいやら腹がたつやら情けないやら、もう、わけがわからない！

数真の好戦的な鮮烈な表情。

…私のカラダを這う視線――壮絶な色気を含んだ声色。

私を圧倒する劣情。

…かなわなかった。

まるで蛇に睨まれたカエルってヤツ？

悔しい。手玉に取られてあしらわれて。

ああ、でも。

焦る気持ちの反面、どこか冷静に自分を見つめる目も感じていたんだよね。

そこはホラ、いつも数真の陰でひっそり存在感のない姉ですから。

なんていうか、いつも数真と比べられてきましたから。判断されてきましたから。

なんだかんだといいながらもびくびくしてるんだよね。

批判や嘲りになら乾いた目線で流せるけど、そうでない感情にはうるたえてしまう。

うん、卑屈だよ。

数真に周りに、批判的なクセに冷ややかなクセに。

昔からここって時にいまひとつ集中出来ないんだよね。

ドキドキはらはらしながらも、『私いまドキドキじゃん絶対バカみ

たい…はは『なんて他人事みたいに考えてしまうのだ。

だからいまも、『数真のバカ！ドキドキ（はあと）』って思う自分と、それにのめり込めず『勘違いすんじゃねえよおまえさんよ』と冷たい目線で私を見る自分を感じるのだ。

「はあ、はあ…」

校舎に入り、私は自分が数真にもらったサンドイッチをグーで握りしめてることに気づいた。

もったいない…もう食べられないかな…？

何回か深呼吸して、もうひとりの、冷静な自分に意識を集中する。

——勘違いしちゃいけない。

これは、アイツにとっては遊びなんだ。

アイツは私を求めてなんかいない。

私が動揺してるのを楽しんでるんだ。

…あの美貌に色気が加われば天下無双だからな。

私、いわゆるモブだもん。

……あ、ちょっと落ち着いてきたかも。

見事だよ…数真。

反撃の機会も潰されちゃったし。数真の勢いに押されっぱなしで昨日からずっと流されてるし。

…うん。

情けないな。いくら美形で強引なS男でもたかが弟、しょせんサカリのついたガキだ。

姉として、きつぱりと禁断の関係を拒絶し本来の関係へ導かねばならないのに。

現実には。

——数真は…エッチなことを言えば私がうるたえるって、しっかり押さえてる。

さすが狡猾老獪優等生。もう、いや…さすがだよ。
なんなの言葉責めまでホントヘンタイだ。

そして。

午後の授業が終わり、人もまばらになった教室。私はぼつんと窓際の机にいた。

「倉橋さん、帰らないの？」

「う…ん、ちょっと…あ、午後の英語がわかんなくて…復習してから帰ろうかなーなんてね」

まさか弟に押し倒されるから家に帰りたくない…

なんて佐々木くんには絶対言えないので、私はごまかした。

午後の授業がみに入らなかったのは… 事実だけどさ。

「佐々木くんは？」

いつもすぐに教室からいなくなる彼にしては珍しく、手にカバンをもっていない。

「うん、俺も勉強してこうかなと」

「ふうん？」

佐々木くんの笑顔につられてなんとなく頬が綻ぶ。

佐々木くん。

癒しだよ君は。

あの色情劣情魔とは正反対の安らぎ効果。

心が洗われるよ…。

かたん、と前の席に座る佐々木くんを見ながらそんなコトをしみじみ噛み締めていると――

ガタン。

「ん？」

振り返る。誰もいない。

「どうしたの？倉橋さん」

「うつん…なんか音がしたから」

「そう？あ、俺ここの文わかんなくてさ」

教室には気づいたら誰もいなくなっていた。

佐々木くとふたりだけだ。

ふたりきり…

うーん心臓に悪い言葉。

でも佐々木くんは友達だし数真と違ってなんていうかホンモノの紳士？だし。

勝手に警戒するのはまさに自意識過剰すぎってもんだ。

真剣に電子辞書を引く佐々木くんは昔読んだ少女マンガのヒロインの相手役みたいに、カッコよくって爽やかだ。こういう時間っていいなあ…青春って感じ？ミヤの姉がみたらそう言っただろうな！。

数真とのどぎついめくるめく時間が続いた後だから、癒される。

「倉橋さん？」

ああごめん。

ちょっとぼんやり浸ってしまいました。

「……」

勉強始めて、まだ10分もたっていないのにすみません。

あれ？

えーと。佐々木くんよ、急に黙りこくるなよ？

なんか、見つめ合うことに自然なってますが？

あ、そうだ。さっき呼び掛けられたの私だから返事待ってるんですかね？

「佐々木くん？」

「……」

なにも返事がない。

このまま待てばいいのか？

無表情な佐々木くんと見つめ合う……。

見つめ合う……まだ。

見つめ合う…さらに。

見つめ合う…少々コワくなる。

佐々木くんはとうとう口を開いてくれた。

なぜか微妙に強張った真剣な眼差した。

「倉橋さん…今、好きなヤツとかいる？」

――？

急にそんなリサーチなぜ？

「いないよ？」

隠しても意味ないからとつさに正直に言うと、佐々木くんは怖い顔つきになった。

私をじっと見詰める…いやむしろガンつけてる？

「じゃあさ」

私はごくりと息をつめた。

気のせいかな子犬のような瞳が熱っぽい瞳に見える。

佐々木くん、こちらへ手を伸ばしてきたような…

あれ？

手、握られてる。

「俺さ、倉橋さんが好き」

…？

「…」

意味がはかりかねる。

私も好きだけど、それは嫌いじゃなくむしろ好き、ラブじゃなくライク的な…

しかしそんな発言はむしろ話がややこしくなりそうな、キケンな予感。

沈黙は金、だな。

黙っていると佐々木くんの手がぎゅっと強くなった。

頬がうつすら紅い佐々木くん。

せつなげな瞳の佐々木くん。

好きだと言った佐々木くん。

…これは、アレですか。

「えーと。念のため聞くけど…告白、なの？」

「うん、コクってる、倉橋さんに」

佐々木くんはようやくニコニコいつもの感じに戻ってくれた。

9 逃走そして放課後 2

…こついつ時ってどうしたらいいんだろう。

経験値ゼロの者としては――恥ずかしがるのも驚くのもなんていうか違うような…佐々木くんに失礼なような…

なんか言わなきゃいけないんだろうけど。

佐々木くんは私を見てホツとしたようにため息をついた。

「倉橋さんが俺のこと好きになってくれたらうれしいけど、自然でいいから。」

ただ、そういう気持ちがあるって知って欲しかったただけだからさ。

さすがに明日から避けられたらショックだけど？」

「う…ん、それはないよ。うれしかったし」

慌てて言う佐々木くんはホントにうれしそうに笑った。

「そっか」

「…うん」

うー…なにこの青春！ってカンジのやりとりは！

赤面してしまう。

甘酸っぱいんだよ！

モブには分不相応なんだよ！

こういうのはもっとこう…直情型ツンデヒロインか、天然型お人よしヒロインか、あとはもう思い付かないけどそんな腹白いタイプにお任せしたい！

私みたいな卑屈型腹黒気取りヘタレ根性ナシ…

いいところ、せいぜいヒロインの友人その3みたいなタイプにはね、荷が重いんだよ！

佐々木くんは、『やっとコケれたー』とか呑気なことをつぶやいてくれているが。

こんな出来過ぎなシュチエーション、コワイよ。

佐々木くんは私の手を離すと、

「じゃ、一緒に帰ろっか？」

促され——こくこくと頷く私の手を再び掴むと、教室を出ていく。

意外と強引な一面をみたが、なんとなく赤面していた彼をみると穏やかな気分になったのだった。

昨日から今日と…まあ、いろいろあったな。

いきなりなことが続いた。

禍福はあざなえる縄の如し…人生万事塞翁が馬。

佐々木くんとくつついちゃえば結果オーライ、ハッピーエンドになるんだろうか？

ドロドロの禁断のバッドエンドから抜け出せる？

——そんな安易に…上手いくか？

あの数真に知られたら？

佐々木くんと付き合うとかは置いて、告白されたなんて、ヤツが、知ったら…

ヤツに知られたら。

…

どうしよう。

10 やつと帰還しましたが

——ぼふん！

ベッドへ勢いよくダイブして私は天井を仰いだ。

自分の部屋だ。

女の子の部屋にしては殺風景…いいように言えばシンプルともいえる。

ファブリックもベージュが基調で、カーテン、ベッドカバー、フローリングマットも全て無地か淡い模様入りのベージュだ。

深いブルーずくめの数真の部屋とはまるで趣きが違う地味な雰囲気だ。

疲れてるけど、数真が帰ってくる前にシャワーを浴びて髪も洗って、明日のゴミ出しの用意をする——

いつもこまめにやってるから、そんなに大変じゃないけど慌ただしい。

掃除はリビングのフローリングをさっと拭いて終わり。

一応、今月はリビングの掃除当番だからね、毎日簡単にやってはいるんだよ。

夕飯はどちらか早く帰れるほうがつくことにしている。

朝ご飯の時にどちらが作るのか話し合うのだ。

——今日は…どうするのか話せなかったから。別に私がなくてはいけないわけじゃなかった。

気づいたら、ふたり分作ってたのだ。

習慣って、こわい。

数真は今日も部活で遅くなるんだと思ったたらいつの間にかレンジで冷凍コロッケを解凍し始めてるんだからね——

私はごろん、とベッドの上で転がった。

私の髪は短い。

肩先ギリギリのストレート。

手鏡で顔を見る。

…つままない普通の顔だ。それなりに整っているとミヤは言ってくれるが、特徴のない、地味な顔立ちだ。なんていうか、若さ？がない気がする…

鏡の中には——他人を伺うような取り繕った微笑ばかりが上手い私が、心許ない表情で揺れている。

今日だって。

佐々木くんに告白されてうれしいはずがため息ばかりついている。

私って、卑屈だなあ…

好きだって言われて、気が重いなんて、ぜいたく、なんだろうか？

そりゃ、嬉しかったよ？

だって、告白されたのなんて初めてだし、誰かに好意を持たれて厭なわけなんかない。

それも、『地味ながらけっこうカッコイイよね性格もいいし』と評判の佐々木くんだよ？

だから…わからないんだよ。なんで、私なんかが好きなんだろう？

まだ深沢さんとかミヤならわかる。

可愛くてほわほわした深沢さんや、ハッキリした性格で美人のアニメゴ肌のミヤなら、男の子ならたいして話したことなくてもすぐに好意ぐらい持つだろう。

彼女たちには魅力があるから。

見た目ばかりじゃない。

私みたいに人の顔色ばかり伺うつまらない女とは違う、本当に情の深い優しい人たちなのだから。

わかる人にはわかるんだろう。

彼女たちの持つ優しさが本物で、私のは…ニセモノの優しさだ。

あの告白の後、駅で別れた佐々木くんはいつも通りで、いやむしろいつもより少しテンション高めだったみたいだ。

私だけが戸惑っているようだった。

わからないよ。

数真はともかく、佐々木くん——君がわからない。

なんで、私が好きなの？

誠実そうな君に、私のどこが好ましく思えたのかな？

…聞けないな——。

しかし聞いてみたいよ…。

…うーん…なんか悩みがさらに増えたよな…

俺様数真の歪んだナルシズムによる、愛という名の偏執。

本当にいい人な、佐々木くんの理由不明な…ほんわかした好意。

これは、単純に佐々木くんとくつついたら万事オツケーみたいな話じゃないぞ。

もっと性格のかわいい女なら悩みはあっさり解決したかもだけどそれを言ってもしかたないだろう。

そんなことを考えているうちに…

私は眠って、そして時間は流れていったのだった。

11 やつと帰還しましたが、2

ぱちり。

そんな擬音が聞こえそうな勢いで、唐突に目が覚めた。

辺りは薄暗い。

私は目を開けてはいるものの、一瞬ここが何処だかわからなかった。

へんな時間に昼寝をするとこんな感じによくする。

いったい今が何時なのか、早朝なのか夕方なのかわからなくなるのだ。

クーラーをかけていたのに背中がうつすらと湿っぽい。身体が、やつぱり疲れているのかまだどこか重たい気がする。

ぼんやりしている…頭。

さっきまでもしかしたら夢をみていたのかもしれない。思い出せないけど。

中学の頃の夏休み。

あの時も暑い日だった。

朝から夕方まで毎日続いた夏期講習。家に帰ってリビングでまどろんでいたあの感覚がなぜかいま…胸の奥でたなびいている。

ホッとするような何か物足りないようなけだるい疲労感。

充実していたとはいいいがたい夏休みも、でもどこかで安心感があつたのかもしれない。

安心感、か…。

小学生の頃は。

夏休みは家族でご飯食べに行ったり、ミヤと数真と三人で近くの市民プールに行ったり、たまに図書館で夏休みの自由研究の調べ物をしたり、お祭りに行ったり。

健全なコドモの夏休みはこうだよ、っていう定番の過ごし方だったな。

友達や家族と過ごす夏休みはこんな感じだろう。

中学になると夏休みは塾通いに明け暮れて…それでもひと夏に二回くらいは家族や友達とプールやお祭りには行ってた気がする。

高校生になってからは遊びに行くこと自体がめんどくさくて。

夏期講習がない日は家で数真とゲームしたり借りてきたDVDみたり…夏休みだからって普段と別に変わりなかった。

…去年までは、何もかわらなかった。

佐々木くと、そして数真。

私の穏やかな夏に入り込み不協和音を奏でる…異分子たち。

ああ。

なんだろう。

なんで急にいろいろ起こるかなー？

このままいつまでも眠っていたい…

クーラーを効かせて布団に潜り込む私を現実へ引き戻す、暗闇から響く足音。

数真が帰ってきた。

12 やつと帰還しましたがゝ3

一階へ降りてみると数真はすでにリビングで寛いでいた――

どうやら夕飯もシャワーも済ませたらしい。

相変わらずテキパキとしてるよ、あんたは。

時計を確認すると、数真が帰宅してから40分…過ぎているだけ。こんな少しの時間で要領がいいことだ。

「ただいま」

ソファーから立ち上がり数真がにこりと微笑してくる。

「…おかえり」

思わず返してしまった。

何か違うだろ！

あたふたしていると数真は、温度を感じさせない微笑を浮かべたまま近付いてきた。

――逃げなきゃ。

「待ってたよ。なかなか降りてこなかったね」

「…別に2階で寝てただけだし…なんか用だった？」

「会いたかった、和音」

しまった——遅かった。

気付いた時にはすでに…

自然に穏やかに…右腕で引き寄せられてしまっていた。
お風呂あがりの香りと数真の匂いが混じって、脳髓にぞわりと刺激
してくる。

や、やばいよ…

美形にピッタリな退廃的な微笑が目の前。

しかも。

ゆるいシャツの上からでもよくわかる。
細身ながらも筋肉のついた、しなやかな身体。男性的なキレイなう
なじ。スポーツで鍛えたしっかりした肩と意外にたくましい感触の
腕。

これが実の弟でなかったら思わず道を自分から踏み外してしまいそうな…

確かに、男の佐々木くんですえも赤面してしまうほどの濃厚さだ。数真フェロモン…恐るべし。

そんな私におかまいなく、数真は微笑をさらに深めた。

「和音、ごちそうさま」

「え…っ」

「夕飯。美味かったよ」

「あ…ああうん」

なんで私、照れてるんだよ！
ご飯のことだから！

何と勘違いした今！？

…まあこんな至近距離ですし、なにされるのかわからないし、緊張するのはしかたない…

「そ、そんなに近づかないでよ」

「やだね」

「もう、いいから離してよ、腕！」

「…そんな口いつまできいてられるかな」

ぞわり。

無理矢理抱き寄せられ、背中に何かが、入ってくる。
これは…指か？

「数真っ…やめなさいっ…」

「そんな力才して…説得力ないな」

「ひゃっ!？」

どんな力才してるんだよ私…って、ボヤボヤしてる間に数真とまた密着状態で、背中に指が…

指が。

「ひ…あっ…」

「ホント、いい声で鳴く…そらせんなよ」

背骨を押すような撫でるような、緩く微かな指先の動き。

それが時たま、弾くように撫で上げてくると、妙な刺激がぞわりと広がる。

水溜まりに一滴で広がる波紋みたいに。

乾いた数真の声に比べて、その指の動きはしつとりと湿度があり妙になまめかしい。

「和音ちゃん、何か俺に言うことはない？」

と――

それまでどちらかというと淡々としていた数真の気配が…急に消えた。

「え…？」

なんだこの…じんわりとした…空気は。

まるで梅雨に咲いた濃紅の大輪の薔薇みたいな。

むせ返るほど香りのキツイ薔薇のように艶やかな。

くつきりとした、絵に描いたような…笑顔の表情なのに。

「あ…」

自分の喉がごくりと鳴る音を聞いた。

「俺、言ったよね？」

数真の低い声色には、子供に言い聞かせるのと同じ穏やかな調べが

ある。

それなのに数真は…

ぜんぜん笑っていないのだ。

怒ってもいない。

数真は。

ただ私をじつと観察している。

色素の薄い茶色の瞳は私をじつと見つめている。

「和音ちゃんはさ—自分が誰のモノか自覚ないよね」

なにいつてるんだ。

私はモノじゃない—なんて反駁も白々しい。

私の背中をなぞる数真の指。

「もう—立っているのもツライみたいだね」

13 やつと帰還しましたが 4

「ーちゃん」

「かーずね」

人は。

幼児の頃において誰しも自分は特別であるという思いを抱いて生きている、という。

いわゆる、万能感、というヤツだ。

たいして可愛くもないのに本気でアイドルになれるなりたいと思ったり。

将来はドラマでみたカッコイイ医者や刑事になりたいと言ってみたり。

それは自分の潜在能力やなるために必要な努力、なれなかった時のフォローなんておかまいなしに見事なくらいの…

自己肯定感。

足りないものは、誰かがなんとかしてくれる。

幼児ならば生活は親に庇護されるのは当然。
その延長線上に、輝かしい未来がある。

だから未来が輝いてみえている。

でも、大人になってゆくとわかってしまっただ。

自分でなんとかしなくてはいけない。

なりたいものがあれば。

そうなるように、努力しなくてはいけない。

魔法なんてないから。

ビックリする頭のよさもそれだけで世間に認められるほどの運動能力も、地道な努力があつてこそ。

なにもしなければなににもなれない。

なんの能力もないのなら人よりさらに努力しなくてはならない。

いつからそんなことを考えるようになったんだろう。

幼稚園のころ。

少なくともアイドルになりたいと七夕の短冊には書かなかったが。

… ケーキやさん？

将来の夢というより食い気だな。子供のころから私は何を考えていたんだろう。

自由になりたい。

もう比べられたくない。

つまらない存在であることを許して欲しい。

期待しないで。

多分裏切るから。

いいひとなんかじゃない。

怒らないのは優しいのは。臆病なだけだから。

数真がうらやましい。

二重人格のくせに、みんなわかってないよね。

あんな腹黒なのに。

なんでわからないの。

臆病な私を嘲笑う数真。

劣った姉を見下す周りのみんなと数真との違いはどこにあるというんだろう。

私は数真が怖い。

自分が絶対であるといまも信じているかのような、自信に溢れた数真。稀にみる優れた非の打ち所のない容姿と能力、如才のなさ。人

望の厚さ。

少年向けスポーツマンガに出てきそうな、熱血とは程遠い器用なタイプだ。

主人公の親友その１タイプか？それにしても出来過ぎか。

数真は夏の強すぎる陽射しみたいだ。

私はヒマワリじゃない。

ましてや薔薇でもカスミソウでもない。

いま、私の上で自分の欲望を私に打ち付けるのに夢中なこの美しい男は、いったいなんなのだろうか。

触れられるたびに、淫らな嬌声を漏らすこの女は、私だなんて。

いやだな。

何度もなんども交わって。

別に誰とでもやれるんじゃないこのふたり。

なんで実の姉弟でそんなコトしてるんだ？

妊娠、したらどうするつもりなんだ。ここは古代エジプトでもなければ飛鳥時代でもないんだぞ。ああでも日本では両親とも同じだとやっぱタブーだったかな。

『かずねちゃんー』

うるさいな。さっきからうるさい。

『かずねちゃんといっしょがいい』

うっとおしいなー。

あっちいつてよ。

『かずまとはいっしょにいかないから』

『なんで？ぼくはいやだよかずねちゃんとがいい』

『かずまなんてきらい』

みんながかずまをとるなっというんだから。
わたしはそんなつもりないのに。

『あっちいつてよ』

かずねちゃんはかずまくんにめいれい、してる、って。

『かずねちゃん…』

ないたってしらない。

『わたしはひとりがいいの』

みんながみてる。

かずまくんかわいそうっていいながらみんなうれしそうだ。

…よかった。

これでまたあそんでもらえるよね？

かずまはみんなにあげるから。

またはなしかけてもこんどはおへんじしてくれるよね……

……
……？

『もう——立っているのもツライみたいだね…

そういえばさ。

佐々木サンとずいぶん仲いいんだね、和音ちゃん』

背中から入り込んだ指に、乱されて、そして。

床の固い感触。

また、強引に服を剥ぎ取られたんだった。

裸の私を見る数真は。大切なモノを愛でるかのように穏やかに微笑している。

『でもさ…実の弟の前でこんな足を広げてるなんて知ったら、佐々木サンどうだろうな。恋も醒めるか』

『…そんなん、じゃ…』

『ないって…？そう』

ふっと瞳を細め、数真は愛しげに唇を這わせる。

まるで年下の恋人にでもするかのような繊細な優しい感触。
妖しい手つきで、見られたくないところをまさぐられ、吸い取られる。

『……………！！』

嬌声が、溢れる。

カラダが勝手に走り出して止まってくれない。

数真は…とても満足げだ。私のカラダはヤツの愛撫に従順すぎる。

『和音ちゃん、は誰のモノか教え込まないとダメだな。
もっともっと、カラダで…、ね』

——『かずねちゃん』

なんども髪を指先で撫でられる。

降ってくるのは甘いキス。触れるような優しい、でも…
自分自身の味がする淫らなキス。

『愛してる。和音』

数真は。

——『かずねちゃん、だいすきだよ』

まるで本当に私が好きみたいな優しい力オをしている。
小さな子供だったころみたいに。

14 やつと帰還しましたが5

…重い。マブタが。

起きなきゃ。

いまいつたい何時なんだ？

「ん…」

見覚えのある天井。

クローゼット。

勉強机。

…また自分の部屋だよ。

なんかすんごいエロい夢をみていた…と想いたいけど残念ながら。
自分を欺くにはすごい身体の疲労感だ。

これはー、アレだね。

またやつちゃったといいますがヤラれてしまったというか…

なんて展開だよ…

弟や同級生に告白？されても結局毎日やってばっかだし。

いつの間にかパジャマがわりにしてるＴシャツを着せられてるし…

ここに運んだのは数真か。時間を確認するとどうやら朝の４時みた
いだ。まだ外はうっすらとほのかに暗さがある。

もう朝なんだ。

つまり。昨日もろくに勉強できなかった…んだ。
期末、もう始まるのに…

どうせ推薦は無理だから別にいいんだけどね。
赤点だけは避けたいけどさ…

「ん？」

と、私はふとごみ箱に目がいった。

心持ち増えたティッシュの量、そのてっぺんにちょこんと置かれた
ピンク色の…

うっ、と声をあげた。

だってそれは…

「ばかつ…！」

埋める！

ティッシュの中につ。

「はー…」

なに考えてるんだ…数真。

そう、たった今、視界から消した半透明のピンク色の…お祭りで持ち帰った水風船が6日たったならこんなですみたいな…中味が入った…

…アレですが。

数真。

あんたは…私に避妊してくれてありがとつとでもいえというのか？

一瞬でも。

ヤツの中に私に対するアツい何か…をみたのはやっぱりまぼろしだったのか？

それとも。願望があると人は見たいように見てしまう…

つまり自分に都合のよいように相手を解釈しがちなんだけど。その典型的パターンなのだろうか？

——優しくされたい。

——誰かの特別でいたい。

信じられないと、私を信じさせてくれないと、相手を責めているんだらうか。

私は。

数真や佐々木くんに求めているんだらうか。

――オマエには価値がある。

――オマエが欲しい。

そう認められ求められたがつているんだらうか？

――キミはいてくれるだけでいいよ。

そう望んでいるんだらうか。

甘い自分を差し置いて。

相手に本気を期待して。

絶対的肯定の繭に包まれたがつている――んだらうか。

肯定される…絶対に。

それは蕩けるような甘美な響き。

あんたは。

和音…あんたはいつたいどうしたいの？

このまま流されるのも何もしないのも、それは非主体的ながらも選択をしたことになるんだよ？

数真とエツチさんまいしてる場合じゃない。

今年は受験だつてあるんだ。勉強もやらないと。

そう、佐々木くんは？

告白されたんだよね？

佐々木くん…何を考えているのかわからない、けど優しい人。暖かな春の空気みたいな人。

だからもつと本当の佐々木くんを知りたい興味はあるけれど…

数真は許さないだろう。

私は肺の奥底から息を吐く。
なぜか切ない。

息苦しい。

弟に弄ばれて嫌悪感どころか、数真を受け入れてしまった私のカラダ。

まだ私の心はアイツを弟以上に認めていないから大丈夫。

数真。

その名前はもはや呪縛みたいな響きを持つ。

優れた私の弟、私のすべてを奪った恐ろしい…でも憎めない、その腕に捕らえられると私はなにも考えられなくなる。

からっぽになってしまふ。愛とも恐怖とも憎しみとも違ふ。

それは…

一言でいえば。

呪い、だ。

数真は私を捉えて離さない。

数真に抱かれると私は私でいらなくなってしまう。

おとつよりも昨日。

実際に快樂を得る時間は確実に伸びている。

まるで、赤い靴の童話みたいだ。

いちど履いたら死ぬまで踊り続けさせられる、赤い靴。靴を履いた女の子はどうなったっけ？

ああ。

私の理性よ。

もつと根性みせなければあんたのヨリシロは呪いに焼き尽くされてしまうよ？

もつとしつかりしなくては。

でもどうしつかりしたらいいんだろう。

——あ。

ふと、弾かれた私の意識が何かをひろいあげた。

何処かの家の庭で、蝉が鳴いている。

カナカナ…カナカナカナ…

朝っぱらから哀しげな響きだ。

私の焦燥にピッタリの音色で迎えてくれるひぐらしの鳴く音。

それは私に思い出させてくれるのだった。

慰めでも宣告でもない単なる事実を。

焦りも苛立ちも恐れも。

期待も熱情も安らぎも。

まだ始まったばかり。

夏は。

まだ。

15 夏休みになりました

そう。

夏休み、始まってしまったのだ。

終業式の帰り道、『明日から学校ないんだあ』って思った瞬間に、毎年、いいようなない開放感が広がるんだけど。

今年は受験生なので。

地味に沈みます、気分。

夏休み中にレベルアップしないと、公立の4年制は難しいってこないだ進路指導という名の引導を渡されたばかりなので。

別に短大でもいいかな。公立の短大…は地方にたくさんある。就職に困りそうだから、それなら何か資格を取れるところがいいかなあ…

栄養士…

結構就職が厳しいみたいだし朝から晩までずっと大量の調理を毎日するってちょっと体力的に無理…だ。

保育士…

公立の保育園ならともかく、私立はお給料安くて自立するのは大変そう…

それに、ちいさな子供って親戚とかで身近にいなかったからあんまりピンとこない…

と、具体的に考えてみても難しい。

短大や専門学校って、かなり目的がクリアでないと決められないな。私みたいなヘタレには無理だよ。看護師とかね。

学校厳しくて辞める人も多いみたいだし。夜勤大変みたいだし。

そうばやく私の相談？をミヤは『呆れたわー』と一笑した。

「あんだね、そんなマイナス情報ばっか集めて、いったい何がしたいの？どうせネットで拾ってきた話でしょー」

「そうだけど…」

「ネットに自分の気持ちを詳しくカキコミする大人はね、現状に不満があるか暇があるか…どっちにしろ中庸な精神状態じゃないからみてるだけならいいけどね、自分を当てはめ過ぎないようにしないと。結局、他人の意見なんだからそれが全てじゃないよ」

と、購買で買った紙パックのジュースをじゅっと勢いよく飲む。

廊下で飲むと生活指導に見つかりと怒られるのだが、今日は会議で先生の姿はない。

わたしはミヤと並んでいる。

頭一つ背が高いミヤは脚が長くて細くて、流れる長い髪も艶やかな美人だ。すれ違う一年女子が、『だれ？』って小さく振り返っている。

「なんかね…進路悩んじゃって」

「夏休み、もう決めた道突き進む時期だよ？弱気になったらやる気もなくなるよ」

「うん…ホントにそう」

「下げるのはいつでも出来るんだから、今はとにかく上げてこ！」

弱気に…なってるよね。

もともと目標が曖昧な上に、最近ほとんど勉強に身が入らないから、考えがマイナス思考になっている。

黙り込む私の肩を軽く叩くとミヤは励ますように声を大きくした。

「今日は、家に泊まりなよ」

「ミヤんちに？」

「うん。予備校の講習も、学校の補習もまだ始まらないでしょ。うちで一緒に課題やろうよ。久しぶりじゃない？和音が家にくるの」

「え…いいの？」

「いいいい。お泊りおっけーだよ、ね、そうしなよ」

ぱんぱん肩を叩かれてちょっとふらつく…相変わらず怪力なんだよねー細いのに。

「うん…じゃあそうしよっかな…」

「やったあ、お泊りね？」

「う…うん」

——いいのかなあ…

私はちらつと数真を思い浮かべてしまった。

数真に、お伺いを立てる必要はない。

だけどさ…最初の二日間は、毎日数真とあんなコトしてて、でもそれから今日の終業式までは期末やら何やらでそういったことと無縁だったのだ。

相変わらず家の中で軽くキスされたり抱きしめられたりはしたけど、挨拶がわり、って感じのライトなもの。

——べつに…

物足りないわけじゃないよ。でもなんか…急に優しくなったような気がする。

強引じゃないからそう感じるだけかもしれないけど、『後の進捗についてはおあなたに任せます』

って雰囲気をするのは…

気のせい…じゃない気がする。

それにさ、佐々木くんのこと…数真がもしかしたら感づいてるかもって瞬間もあったし…

そんな微妙な時期？にお泊りですか…うーん…。

黙り込む私をどうとったかミヤは満面の笑顔だ。

「さあさあ、もう決まったんだからさ。はやいところあんたんちに行つて、用意しよっか」

「あ」

「またな」

佐々木くんがミヤと歩いてる私にニコツと笑つて手を挙げてくれた。なんだかやり残した感じが強いけどとりあえず、無事に夏休みに突入しました。

そしてそのままズルズルと連れて行かれました。ミヤんちに。

16 夏休みになりました〜2

駅からほど近い閑静な住宅街。

ミヤの家は庭付きのかなり大きな家だ。

本人から聞いた訳ではないけど、戦前…はこのへん一帯がミヤんちの敷地だったとか。今も少し離れたところでご夫婦でクリニックをやってる両親がいる。

「ただいまぁー」

「愛さん、お帰りなさい」

廊下の向こうから、すぐに声が返ってくる。40歳くらいの、長い髪を一つに纏めた笑顔が優しい雰囲気のお手伝いさん…弥生さんが顔を出す。

エプロン姿が、昭和の上品な婦人という感じ。

声も顔も優しい、この人も大人なんだけど癒し系なんだよね。

「もー、愛さんはやめて」

「どうして？かわいいお名前ですよ？」

ミヤは膨れっ面だ。

あ、ミヤの本名は宮岸愛。自分の名前が好きじゃないみたいで、昔から『ミヤ』って周りに呼ばせてるんだけど、弥生さんにご両親だけは例外みたいなんだよね。

「それより、和音が今日泊まるから夕飯よろしくね、弥生さん」

「あら、玄関先で申し訳ありません、さ、どうぞ」

スリッパを勧められ、

「ありがとうございます。お世話になります」

私はペコツとお辞儀をして、弥生さんと仲良く話すミヤに促され、部屋に上がらせてもらった。

ミヤの部屋に入るとすぐに男の人が麦茶を持って来てくれた。

「いらっしやい、和音ちゃん。久しぶりだね」

背が高い…

キラッキラツした笑顔が眩しい。

数真とは違う…大人って感じの人だ。顔立ちも俳優みたいに綺麗すぎるし、雰囲気というかオーラがただ者じゃない。

私は記憶の中から、一つの人物像を思い出した。

「え…雅也さん？」

「当たり前。…てさ、それ以外に何があるのかな。」

不思議そうに私を覗き込む雅也さんの前髪が、さらりと揺れた。

「だってあの、すごく」

「ん？」

首を傾げてニコツと微笑：普通なら似合わない仕種が板に着きすぎだ。

雅也さんってこんな人だったっけ？

しばらく会ってなかったので印象がしっくりこない。

「…な、なんでもありません」

「アニキ、カオ近付けすぎ」

「あつゴメン。和音ちゃんが相変わらず可愛いからつい、ね」

促されやっと少しだけ離れた雅也さんをじろりと睨むと、ミヤは私の肩を掴んで抱き寄せた。

「もー、オッサンみたい。可愛いからって馴れ馴れしいんだから」

「おい、まだ20代だからオッサンは勘弁しろよな」

「ふん。四捨五入したら30でしょうがー」

きやいきやい騒ぐミヤとそれに応じる雅也さん。

私はふたりのやりとりをぼやっと眺めていた。

雅也さんの変化には驚いたけど。

兄妹ってこんな感じだよね、いいなあ。

久しぶりにふたりがいるところをみたせいか、新鮮な感じがする。

こうして見ると、美男美女の兄妹だな。

「和音ちゃんどうかした？」

「い、いえ。雅也さん…あっそういえばいつ帰ってきたんですか？」

「シカゴから？おとついかなあ…知らなかったの？」

「はい…」

「アニキ。わたしら期末でそれどころじゃなかったの。だから今日は連れてきたげたでしょ？」

ミヤはなぜかニヤリと雅也さんをみた。

「…和音って結構モテるんだよ、アニキ」

「な…ミヤ！？」

「照れない照れない。あたし、知ってるんだからー
あんたこないだキスマーク首に付けてたでしょ！？」

「

——え？

いきなりまたミヤまで何言い出すんだ…

雅也さんの表情がすっと消えた。

「聞こうか？」

「え」

「キスマーク、誰につけられたのかな？まさかかず…」

「ち違いますよっ！！数真は弟ですよ有り得ません何言ってるんですか、ま、雅也さんてばやめてくださいよっ！？」

「この激しい否定っぷりが逆に怪しい感じよね？アニキ」

「…そうなの？」

つて、雅也さんになぜか詰問される私。

なんなのー！

まさか…キスマークがついててしかもチェックされてたなんて…不覚だ。

恥ずかしすぎる。

しかもふたりとも相手を見抜いてるし。

「あの…ええとですねコレは…そう、私こないだ男子に告白されまして」

「えっ！？誰よ」

苦しまぎれの話にミヤはあっさり食いついてきた。

「同じクラスの…」

「佐々木ね。うーん、あいつ、あんたにベツタリだったしね」

ちよ、はやっ…もう納得してるし。

そんなベツタリって…ちょっと親切だなあって程度なのに。

「ま、まあそんな訳です」

さっさと話を終わらせようとした私にミヤはまた、ニヤリと笑ってきた。

ミヤのこの力才はやばい。数真といいミヤといい、なんで私の恋愛話に絡みたがるんだ。

「告白は佐々木がした。けど、キスマークは彼じゃないでしょ？あの男にいきなりそんなことやる度胸はないし、あんたたちまだそんな雰囲気じゃないもん」

「そんな…雰囲気？」

「そうよ。エッチまでいった男女特有の、みんなの前ではあえてな

んでもないって感じの…実はラブラブなのに一見妙に落ち着いた雰囲気。

佐々木はまだ浮かれた感じだから、あんたたちはキスもまだだよ？
佐々木が告白しただけでまだ付き合うかもわからないんじゃないの？
今日は終業式だからカレカノなら約束ぐらいしてるでしょ、ふつう」

鋭い。

鋭すぎる。

「で、どうなの？あのシスコンはとうとう一線を越えてきた訳？姉さんは俺の女だとか言われちゃった？押し倒された？」

「…あ、あのねミヤ」

誰かに肩をまたやんわりと掴まれ振り返ると。

「…ミヤ。マンガの読みすぎだ」

雅也さんは、興奮状態のミヤから私を引き離してくれた。

それから小1時間、ミヤになんだかんだと言われたけれど私は決して数真のことは口を割らなかった。

偉いよ、私。

あれだけしつこかったらポロつと言っちゃいそうなのに。

ミヤの場合、数真のシスコンぶりを面白がってるんだろっけどなにも雅也さんの前で言わなくてもいいのに。気まずいじゃないか。

弥生さんに呼ばれて夕飯の支度に入った、主のいないミヤの部屋で私は、雅也さんに英語と数学をみてもらっていた。

雅也さんはお医者さんだから頭がいい。

シカゴには救急医療を勉強に行き、今度は市内の病院に勤めるんだって。凄い人気だろうね…

患者さんやナースにモテモテだろう。

でも雅也さんは次男だからやっぱりまたいずれはアメリカに行くんだとか。

そういえば…。

私は勉強に区切りがついたところで雅也さんに聞いてみた。

ずいぶん豪勢な夕飯なのかミヤたちはまだ呼びにこない。

「貴也さんはお元気ですか？」

「…貴也ね」

雅也さんは気だるげに顔をしかめ、眼鏡のフレームを外した。

「勉強はまたあとにしようか。眼が疲れた」

「すみません…帰国そうそう甘えてしまって」

「いや、実は昨日は久しぶりに友達に会って寝てないんだ。これく

らいで疲れはしないけど、ハタチ過ぎるとオールはくるね…うーん」
伸びをする雅也さん。

このへんは前とおんなじだ。雅也さんにはキラキラした王子様のイメージよりもダルそうな風情がよく似合うよ。

「どうしたの？」

「雅也さんが昔と変わらなくて安心しました」

「変わらない、ね…。そんなことないよ」

ずい、と雅也さんがテーブル越しに私に顔を寄せてきた。

「…？」

床に直に座り込んでいる。

だからか、あまり近付きすぎると…圧迫感が、ある。

「えっと…なんか私、マズイこといいました？」

「和音ちゃんの天然で無防備なところはそっくりでみているだけでマズイ」

は？

雅也さん？

私はじりつと下がった。

いい加減、この展開はマズイことぐらいわかる。わかるようになったらというべきか。

雅也さんは私を見つめてくる。

マズイよね…

「あの」

「和音ちゃんはさ、自分の好きな人の幸せを素直に喜べる？」

思わぬ台詞に私はきよとした。

台詞以上に…驚いたのは、雅也さんがなんだか疲れているみたいに見えるのだ。

…徹夜明けだから？

何故なのかわからないけど。違う気がする。

「雅也さん？」

「ゴメン。へんなこと言ったね…もう下に降りようか？そろそろ呼びにきそつだし」

雅也さんはどこか寂しいような哀しいような表情を一瞬滲ませた。

なぜそんな力才をするのか…理由はわからないけど。

私は雅也さんの言葉とその表情が夕食の間中、心に引っ掛かっていた。

17 夏休みになりましたゝ3

ミヤには10歳離れたお兄さんがいる。

雅也さんはその一人だ。

で、貴也さんは雅也さんの双子の弟。

確か東京の病院でお医者さんをしてるらしい。

「タカ兄は、ずっと東京でこっちは帰ってこないみたい。夏休みも仕事なのかもね…」

「忙しいんだね」

ミヤは、どうだかねー？と首を竦めている。

「和音には言うけどさ。タカ兄、今度結婚するんだよ」

ええ！？

「え！あっそうなの！？あ…おめでとう」

改めて聞くと驚く。

貴也さんとはあまり話したことはない。

小学生の頃。ミヤと遊んでいたら高校から帰ってきた貴也さんと挨拶したくらいだ。

黒髪で、背中が真っ直ぐで痩せて脚が長いのが子供心に印象的だった。

余計なものが一切ない、端正な無表情。笑ったところを見た記憶は、

ない。

貴也さんって厳しくてなんだか怖いイメージだったから…女嫌いだってミヤは言ってたし。結婚ってしなさそうだったけど。

むしろ雅也さんのほうがなんで結婚しないのか不思議なくらいだけど。

「多分、式はしないで、そのかわり新婚旅行に行くからその休み貰うために今は仕事一色なんだよねー。」

ま。ふたりもアニキが来たら暑苦しいから別にいいけどさ。マサ兄はこの夏は仕事ないみたいだしね」

食後のお茶を飲みながら、またミヤの部屋で勉強している。今度はミヤとふたりだ。

「…和音？」

私は慌ててケータイをカバンに入れた。

「気になるの？」

「…う」

「連絡したんでしょ？」

数真にはメールを入れた。電話する勇氣はなく、ただミヤんちに泊まりますとだけのメッセージだ。

まだ部活なのか返事は来ない。
いつもならすぐに返信があるのに…夕食前にメールをしたのに連絡がない。

「そんな力オしちゃって」

「え？」

「今、和音すごい切なそうな力オだった。まるで恋する乙女、だよ」

「…ミヤ。からかわないでよ」

「妬けるね。みんなラブラブでけっこうなことだよ。…なかよきことはうつくしきことかな、だよね」

何か一人で納得して勉強に戻ろうとするミヤ。

「ちょっと！私は数真なんて好きとかそついうのじゃないからね」

「ふふつ。じゃどういつのかって聞いていい？」

…

「姉弟愛って限りなくヤバイ香りだからね？」

言わなくてよかった…。

「く、腐れ縁？」

「それ兄弟姉妹間には使わない」

…そうなの？1番ピッタリくるんだが…んー。

「あたしさ、あんたと佐々木がふたりで喋ってるところを見たことあるんだ」

ミヤは私を真っ直ぐに見た。

「あんたたち、仲いい感じで話してたよ。」

ミヤは数真をみたのだと言った。私と佐々木くんがいるところを見ていた数真。

「すごい目付きだった。オスの目っていうの？俺のオンナに近付くんじゃねえ、って感じ。眼で人を殺すってあんなのかな？」どんな目付きなんだか…

「優等生のシスコン君のあんな力才、久しぶりだったからなんか萌えたわ」

「え…久しぶりって？」

「知らなかったのやっぱり」
何が？

ミヤは形のいい眉をぴくりと反らせて、ため息を大袈裟についた。

「うーん…和音のそういうニブいところは天然だからある意味残酷だよね…シスコン君に同情しちゃうかも。逆にシスコン君がああなったのは和音の天然さのせいかもね。粘着対天然の相乗効果？はー…萌え萌えするね…」

「どういう意味よ」

大人っぽい微笑で、ミヤは『さあね』と今度はあっさりとノートに向かつてしまった。

なんなの。

人を天然とかニブいとか…

私は思い出した。

『ニブい』

…このフレーズは。

最近聞かされた気がする。どこでだ？

思い出せない。

…ああもう。

数真から離れてホツとしてるはずなのに、なにやってんだろ、私。

さっきまで雅也さんの態度が気になってた、のに。

ちよつと数真から連絡がないからって…

雅也さんは大人だから。

私にわからないいろんな事情があるんだよ。

数真はまだ子供だから。だからこんなに落ち着かないんだ。

その夜。

何回ケータイをみても数真からの返信は無かった。

18 夏休みになりました〜4

よく朝。

世間的には楽しく自由なはずの夏休み第1日目を私は迎えた。

昨日までの開放感は消え、変わりにまたプレッシャーが気分を重くさせる。

とうとう夏休みかあ…

今年は頑張らないと。

ふかふかのベッドにいつもと違う肌触りのシーツから起き上がり、夏休みの予定を思い浮かべる。

学校の補習授業、予備校の夏期講座。模試。

相変わらず代わり映えないラインナップだなー。

しかし先生に言われるまでもなく夏に伸びないと本気でマズイんだよね…

昨日は久しぶりにかなり勉強した。これくらいのペースでいければ下がることはないだろう。出来たら飛躍的上昇を図りたいけど、みんなも頑張ってるから相対的には上がることはないかもしれない…偏差値とか判定とかね。

とりあえず成績は置いておくとして、それ以前にまず問題は、勉強に集中することなんだよね…

真面目だけが取り柄なのに、カラダはココロと裏腹で数真に翻弄されっぱなし。

そうして。

カラダに引きずられるように私は確かにヘンだった。

ついこの間まで、数真に強気だった自分が嘘みたいだ。

数真のことが気になってしょうがないのだから。

これは恋愛感情じゃあない…なんでメールに返事がないのか気になって仕方ない…それだけだ。

情けないな、私。

…とりあえず着替えを済ますことにしよう。

うまく働かない頭を動かしてゆく。

…そういえば昨日は、ミヤんちの客室に泊めてもらったんだっけ…

そうだった。

昨日は家に帰らなかったんだ。

——と。

数真の顔がふいに浮かんだ…それを頭の隅へ押し込む。

それにしても。

客室が二つもあるんだよ…ミヤんちは。

我が家もそんなに狭苦しさはないけど、家が広いんじゃないかと人口密度が低いだけだし。

いつもふたりだけだから。

……。

だめだ。

数真の顔がぐるぐる浮かんでくる。

胸の底がなんだか落ち着かない。

そわそわと。むずむずするような。

息をするたび何かを忘れているような気がする。

なんなの、これは。

とにかく今日は早めに家に帰ろう。

自分の気持ちに名前をつけたくなって、私は着替えを済ませベッドを整えるとキッチンへ降りていった。

「おはよう和音」

「おはようミヤ……ごめん手伝えなくて」

「弥生さんが全部してくれて、あたしは並べただけ。アニキはまだ寝てるしさ……もう食べちゃおうよ?」

すでにキッチンからダイニングテーブルへと朝食は並べられて、美

味しそうな湯気がたちのぼっている。

スクランブルエッグにサラダ、ヨーグルト。フルーツもある。

プレートにキレイに盛られた料理をみて、私は感嘆をもらした。

「すごい…朝から豪勢ですね」

「そんな…豪勢だなんて。お口に合えばと今日は洋食にしたんです。確か卵はスクランブルが和音さんのお好みでしたよね。

飲み物は何にしますか？

「コーヒー、紅茶？牛乳にオレンジジュースも用意できますよ」

弥生さんは私の為にトーストを焼く準備をしながら聞いてくれた。

なんか凄い…

久しぶりに宮岸家にお泊まりしたけど客室といい食事といいホテルみたい…

「じゃあ、オレンジジュースで」

「はい。今すぐお注ぎしますからテーブルへどうぞ」

「すみません…いただきます」

すでに身支度を完璧に整えたミヤはテーブルに座り、紅茶を飲み始めています。

「和音、お先に」

「ううん…あ」

「どうしたのよ？」

一足先に焼けたトーストをオレンジジュースと一緒に受け取り、私はバターを選んで塗る。

マーガリンよりも固く白いカタマリが、キツネ色のサクサクした表面にゆっくりと溶けてゆく。

「なんか…うん」

「何？」

ミヤも弥生さんからトーストを受け取り、ブルーベリージャムを選んで手早く塗っている。

髪は艶やかな茶髪のアートロング。

モデルみたいに細くて背が高い。大きくて華やかな目元、繊細な唇とほっそりと通った鼻筋。

今日は淡いピンクのふんわりしたミニワンピースを着て、流行りらしい変わったベストを重ねている。見た目がモデル出身の女優みたいだからか、こうして見ると、まさに『お嬢様』だなあ。

眼の保養だ。白薔薇の妖精みたいだ、なんて子供みたいに思っつまう。

じつくりと眺めていると、ミヤは怪訝そうに聞いてきた。

「なによ？どうしたのさっきから和音…ああこのカッコが気になる？」

「うん。どっか行くの？」

「まあね」

綺麗に化粧した顔を私に向けてミヤは顔をしかめた。

「実は今朝、シスコン君から頼まれたの。デートしてくれってさ」

え？

「でね？良かったら和音も一緒につて言っただけどそれじゃデートにならないって。だからまあ、ダブルデートならいっかなとその条件でオッケーしたの」

ええ？どういう？

「シスコン君にはブラコン姉がつきものでしょ？だから」

…は？

私は口の中のトーストをどうにか飲み込んだ。

ダブルデート？

いやいや、あの…その前に。

数真がミヤとデート？

そんなこと今まであつたっけ？

また動悸がしてきた。

なんだろう、もう。数真がらみで最近こつなることが多いよ。

ミヤと数真。

考えてもいなかった。

深紅の薔薇と白薔薇の組み合わせ。

動揺する私をよそに、ミヤは気だるそうに続けてきた。

「男子、今から調達するから誰か好みあったら言って？佐々木でもいいけど初デートがダブルデートではアレかなと思うし」

「…」

またいきなりな展開に。

私ひとりがついていけないのだった。

19 夏休みになりました 5

ミヤと数真の待ち合わせは10時だとかで、時間はあったはずだった。

な・の・に。

服を貸したげる、と半ば強引にミヤと弥生さんにああでもないこうでもないと着せ替えられ、ようやく決まった頃には予定時刻ギリギリになっていた。今すぐ家を出ないと待ち合わせに完璧に遅れる。そんな時間だ。

私はまだ二人がなぜデートするようになったのか知らない。

別に関係ないし。

そりゃあ驚きはしたけど、数真の考えてることなんて昔からよくわからない……わかってなかったんだから。

いきなり私を好きだと言い出した……それが突然始まったように突然気が変わることもあるのかもしれない。

そう私は考えていた。

冷たい考えなのだろうか？

もっと数真を信じていたら裏切られたと嘆いているのだろうか？それともショックを受けている？

でも正直戸惑いはするけど、数真のことを残念に思ったり悲しんだりする気持ちはなかった。

あの重苦しい…私の背中を、軀を這う指先。
肌の毛穴から入り込む何ともいえない感触。
執拗な愛撫。

数真がいくら愛を囁いても甘くキスをしてきても、そこには愛情とは違う感情しかなかった。ように思う。

そう、上手く言えないけど…支配欲、征服欲。

妖しい暗い笑みに閉じ込められた感触に今でも逃げ出したくなる。
まるで乳白色のどろどろの沼に絡めとられまいともがいている。甘い匂いに誘われた蟻の末路みたいに。

甘く囁いて欲しくせに、その代償は払いたくない。

だからこんなにホッとしている、私は。

ここは、ミヤの家だからこんなに淡々としていられるのだ。それはわかつている。

そして、数真はそんな簡単に、私を自由にはしないだろう。例えば数真の気が変わって、彼が私をそれほど好きではなくなったとしても…だ。

私はまた時計を見た。

…いいんだろうか、時間。

ミヤは数真とデート、なんだよね？

待たせるのか？あの数真を…腹黒俺様王子を待たせた日には何かとんでもないことが起こる気がするのは私だけなんだろうか？

私の視線に全く気付かないミヤ。

「お姉ちゃんがくれた服なんだけど、私よか似合ってるよ。清楚な女の子ってかんじだね」

女の子っぽい？

そうかな…？

いつまでも小中学生みたいでガキくさい、の間違いじゃないか…？

女らしいミヤに言われてもあんまり説得力ないけど、淡いダンガリのシャツワンピに、ざっくりした白のレース編みニット、サンダル。

あの…ミニ丈なんだけど？

しかもノースリーブだし。

ニット着ても腕とか肩とか肌がかなり透けてる…

これでもワードローブの中で一番地味そうところで勘弁してもらったんだけど…うつむ。

脚が、出てる。

ミニワンピなんて着たことないから…スカートって制服以外ではないんだよ。

しかも生足だし。

落ち着かないな…

借り物のコーディネートを着た私の周りをぐるりと回ってミヤはにっこりと満足感を浮かべた。

「おお、可愛い」

「何騒いでるんだ…って、おお!？」

雅也さんがフラリと表れ私に驚いている。

思わず真っ赤になってしまっ自分を感じた。
頬がカッとなる。

ああやっぱり、似合わないんだよね…脚が綺麗でも細い訳でもないし、生足はアウトでしたか。

しかし意外にも雅也さんは機嫌よく言ってきた。

「…若いなあ。うん、すごく似合ってるよ和音ちゃん」

へ？

にこにこ笑ってる雅也さんこそ、普段着のポロシャツにチノパン姿で大人の男性の余裕たっぷりに見えます。ルーズな格好が似合うなんてただ男前なんだ。

ミヤは女っぱさ全開だし、余計に私だけがキくさくしていたたまれません。

私は本心をこぼした。

「そ、そうですね？」

むしろ自分の色気のなさにがっかりなんですけど」

「いやいや。無造作に露出した肌が初々しい色気でまたいいねえ。男はこういう爽やかな色気に運命を感じるもんだよ。二人で出掛けるのかい？」

…運命？

ちょっと大げさな…でも誉めてくれてるんだよね？

「出掛けはしますけど…」

ミヤも怪訝な顔で雅也さんを見上げてボソツと呟く。

「…また始まったオヤジ発言。やらしい目で見ないでよ」

「ミヤ、お前なあ…可愛くないぞ。そんなに自分の兄を早くオヤジにしたいのか」

「やらしい目で和音の脚みてるからよ…ってそうだ！」

と、ミヤの大きな瞳がキラリと光った、ような気がした。

実際はミヤは実に華やかな笑顔を雅也さんと私に向けてきたのだが。

だが。

気のせいが一瞬…その笑顔に数真的な何かを感じたのはなぜだろう？

「アニキ今日も暇だよな？なら決定。よかったいいところにアニキが出てきて」

「は？」

「え？」

にんまり、細めた唇がきょとんとする雅也さんと私に告げてくる。

雅也さんも僅かに眉を潜めてミヤの様子を伺っている。

この流れは雅也さんには気の毒だけど…うん、たぶん…。

ミヤは意気揚々と言ってきた。

「決定。本日のダブルデート、アニキは和音とデートだよ。あたしは数真とデートすんだからアニキしっかりナイト役しなさいよ？」

20ダブルデートって初めてですが

そんな訳で。

とは言え、どんな訳でこうなったのかよくわからない…です。

わかりたくないというのが正直なところだがしかし、待ち合わせの駅前に到着した時、とつくに時計は10時を過ぎていた。それはさすがにマズイだろう。

私は数真を探そうとした。

「きゃっ」

「危ない和音ちゃん」

「あ、雅也さんすみません」

ふらふらと人混みへ歩み出した私を雅也さんが引き寄せてくれた。待ち合わせの時計台のモニメントから離れるとそこは行き交う人々で溢れている。歩き慣れないサンダルでは上手く人波に乗れないみたいで転ぶところだった。

「ここにいたら来るでしょ」

「そうでしょうけど…」

「なんだかさつきから落ち着かないみたいだね。どうかしたの？」

気遣ってくれる雅也さんかというと、ブランドっぽい黒のシャツに細身のカジュアルな麻のズボン…スラックス？とにかく大人の男性の色気がハンパない。

長めの前髪は相変わらずサラサラで、一般人の域を越えている。これでもいつもの出勤スタイルらしい。

はは…オシャレしているハズの私だけでも、完璧に雅也さんの被保護者にしか見えない。これでダブルデートとか、我ながら笑えるな。

…まあそれはべつに、ね。

私は雅也さんに曖昧に笑ってみせた。

「昨日勉強し過ぎたのかも」

「それだけならいいけど…体調悪いならいいなさい？ちょっと顔色が良くないよ」

「はい」

ミヤはさっきから携帯で何か話している。

また視線を余所へ向けた雅也さんに気付かれないように、私はこっそり溜め息をついた。

私…そんなにヘンかな。

どうかした…してはいない。いやむしろ気持ちはいたってクリアだ。

ミヤからデートの話を聞いた時。

今までの数真のとった不可解な行動を、危うく私への愛か何かかもしれないと勘違いをしかけていたのかも、しれない。

そんな自分に気がついた。

数真の支配欲、征服欲。

それを錯覚しそうになっていたんだ。

本当に愛されてるかもしれない…なんて。

触れられれば嫌でも快樂へ引きずり込まれ、愛を囁かれれば恐れおののく。

快樂と背徳は…紙一重。

戻れない恐怖。

戻れなくともいいとのまれてゆく恐怖。

怖いんだ、私は。

数真が怖い。

それ以上に、自分自身が。

…私。いったいどうしたんだ。

落ち着かない。気持ちは冴えているし、静かだ。悲しんだり落ち込んだりもしていない。

だけど、なんでこんなに…

唇をいつの間にか強く噛んでいた。

血の味がする。

自分の…

考えるな、もう。

私は絶対に数真を好きにならない…異性として。
ヤツの遊びに本気になんてなっていない。

でも。

この胸を占める空虚な感情は。
いつたいたんだろう？

ああもう考えるな！

私がぼんやりしている間に数真は現れ、集まった三人が私を呼んでいる。

21ダブルデートって初めてですが〜2

大事なことは、勘違いしちゃいけないってことだ。

数真の『好き』『愛してる』は支配欲と征服欲から来ている。

それは間違いない。

快楽に飲み込まれそうな私は、それを勘違いしそうになっていた。
勘違いしてもかまわないと心のどこかで…見てみぬふりをしていたんだ、たぶん。

絡めとられてゆく、快楽。

そう、きっとそんな自分が怖くて、堕ちてゆく自分が恐ろしくて、だからきつと。

だからこんなに…落ち着かない。そうだ。

そうだ。だからもう自己分析はやめないと。

頭は冷えているのに、足元がふわふわして。
どこを歩いてるんだろう？

「和音ちゃん？」

雅也さんの顔。

その向こうには駅前のモール一階にあるお高そうなカフェテリアって感じのオシャレな喫茶店。

「今からだと映画は少し早いからちょっと休んで行こうか」

「和音、気分悪いの？」

心配そうに私を見てくる兄妹。

そして。

淡いグレーのシャツにサンドカーキの涼しげなパンツをさらりと着こなした弟が立っていた。

数真。

私を眺めている。

そう、見ている、ではなく見つめているのでもなく、眺めている。

まるで景色が何かを眺めているように。

その口元には、微笑。

…でも。

「姉さんは、別に無理しなくてもいいのに？」

あの瞳、だ。

茶色の瞳はうつすらとグレーがかかっている。

たまに見るその色は、怒りや興奮の時に現れる。

数真…？

優しい笑みを漂わせている。あくまでも優しい、見る者をとろけさせるような…懐かしいいつもの優等生の表情なのに、柔らかいその言葉の中に刀の抜き身のような冷たさを感じて、私は口ごもる。

数真は。もしかして。

私が来て迷惑…だった？

いやそんなこと口にしたらうつとおしさ倍増だ。

それに、二人はともかく、雅也さんは巻き込まれただけなんだから、せつかくのお休みを楽しんでもらわないとダメだ。

「迷惑はかけないよ。私…私も雅也さんと一緒にいられるなんて、嬉しいし」

「嬉しいね。僕も和音ちゃんとデート出来て役得だな。数真、お姉ちゃんのことは心配いらない…僕がしっかりみてますからね。君はミヤと楽しめばいい。さて、さっさと中に入りましょうかね？」

私に調子を合わせて言うと、私の肩を抱いて雅也さんが歩き出した。

「…」

何か言いたげに目を細めた数真をミヤが促しているらしい、明るい声。

「そんな怖い顔しなくてもアニキはドクターだから、ね？入る入る！」

数真がそれに応えて返している。

そのやりとりはひどく遠い。

私… やっぱり来るべきじゃなかったのかもしれない。
数真の反応に自分でも思った以上にショックを受けていたらしい。

―… 穏やかなBGMがおずおずと耳に入り始める。

目の前にはレモンソーダが置かれている。

ぼんやりしていたみたいだ。

そのレモンイエローというにはやや薄い色の中に炭酸が踊っている。

弾ける泡の粒を見詰めるといつも思う。

海みたいだ。

青い炭酸水は南の海の中にいるみたいだけど、淡いイエローのソーダはそれはそれでフアンタジー。

夏の暑い日に飲む炭酸水は夢の中にいるみたいに私を心地よくしてくれる。

いつも。

炭酸を飲んでいると数真が側にいて。私はどうでもいい話を数真にして。数真はにこにこしていて。

レモンソーダから視線を外す。

今、目の前には雅也さんがいる。

隣のテーブルでは楽しそうに笑いながら会話する数真とミヤ。

雅也さんはゆったり寛いだ様子でアイスコーヒーを飲んでいる。

よくみたら、確かに昨日までであったはずの無精髭がキレイになくなっている。

確かにかなりうつすらとだったけど、今はぜんぜん…全くない。

じっと見ていたら、雅也さんは『ああ』、と 呟いて微笑した。

「さすがにナイトが口髭ボーボーではまずいでしょ」

「ワールドで似合っていましたよ?」

「へえ、和音ちゃん口髭の魅力わかるんだね。これは嬉しいなあ」

…につこりキラスマイル…うん、いつもの私ならドキドキしてマトモに会話も出来ないだろう雅也さんの微笑だ。

でも今はなんだか…こっ…

変に見えないように気持ちを張ってるせいか、かえって落ち着いて受け答え出来ている。

「可愛いお姫様に釣り合うようにこれでも磨いてきたつもりなんだけど…そうか、お姫様は無精髭がお好みなんだ？」

「ぷっ」

「あ、笑わなくていいとこだから、ここ」

「すみませんが…なんかおかしくて」

「今日は僕はオマケなんだから…そんなにしゃちほこばらなくても、楽しめばいいんだからね？」

「しゃち？」

「あゝ、わかんないか。ジェネレーションギャップだな」

「ジェネレーション…」

「知らない？」

「…めんなさい…」

雅也さんが難しい言葉を連発する。

私も時代劇とか好きだし小説をよく読むから、よく何ソレって言われるんだけど。言葉は難しい。

「まあとにかく、今日は気楽に、ね？」

「はい」

雅也さんでよかった。

もし佐々木くんだったらこんなにリラックスして話せてたかな。

22ダブルデートって初めてですが〜3

雅也さんは大人だ。

いろいろ社交辞令で持ち上げてはくれるけど、佐々木くんとは違って私にそういう好意を持っていないから、だから、安心。

きつとがっかりされたりしないから。

この笑顔がうわべだけで、中身は数真へのコンプレックスにどろどろの嫌なヤツの私を見ても、驚いたりはしないだろう。

だって昔の私を知ってるし。

にこにこしてる空っぽの私へ…どうしてだか好きだと言ってくれた佐々木くんとは違う。

女の子みんなに無視されて泣いてた子供の頃の私を知っているんだから。

ああ…なんか。

フラフラするな。頭に血が行ってない感じ。

レモンソーダを眺めたり雅也さんと楽しげに話したり。私は忙しい。数真たちの会話なんか耳に入らない。

知りたくない。

数真の顔。

今は笑ってるのにさっきは私を見て怒ってた。

あれは何。

邪魔なモノを見る目。

そうなのかな…私、邪魔なのか？

だめだ。

震える。

胸が上手く呼吸できない。

雅也さんが私をじっと見つめて黙り込んでしまった。
変に思われたのかな。

何を話せばいい？

雅也さんが喜びそうな話題。
話せ。

話さなきゃ。

…

その時、優しい手が伸びてきて、私は情けないことに…悔しいこと
にそれを嬉しいと思ってしまった。

「和音ちゃん」

数真。

「ちょっと御手洗いに行っておいで」

「…はい…」

雅也さんは私の頭から手をそつと下ろすと、また笑って促した。

しょうがないな、って感じの苦笑。

「ちょっと行つてきますね。映画、時間は…」

「大丈夫。数真たちは先に行かせとくから。ゆっくりしておいで」

「…すみません」

頭を下げる私。

「はいはい、待つのは好きだからね。ぼーっと待つてるからそのうち帰つといで？」

雅也さんの気遣いに甘えさせてもらおう。

生ぬるい水で満たされたみたいなのぼんやりした頭を抱えて私はトイレへ向かった。

雅也さんの気だるげな風情に救われる。

こういう時に騒がず知らん顔しながら、そつと気遣いしてくれる、大人の態度。

…あれ。

なんで。

目が…

胸が痛かったはずなのに、目が熱い。

あ…

なんで泣いてるなんで泣く？

ばかみたい。

洗面所の鏡に映る。

目を大きく見開いて。

涙だらけの私。

わけわからない。

23ダブルデートって初めてですが4

涙ってというのは。

悲しくなくても出る。

体験からそう学習したのはいくつの時だったか。

悔しい時、苦しい時、それと…たまらなく空っぽの自分を感じる時。

ああ、こないだ泣いたのはいつだったわけ？

確か、あれも数真がらみ。

なんで泣いてるのかわからない類いの涙。

意味がない。

こんな時に泣くなんて迷惑。

自分に酔ってるみたいで余計に自己嫌悪…1人の時に泣けって自分でも思うよ。

でも感情を押さえるほどに、出口を求めてなのか私の目から涙が溢れてきた。

そんな自分を叱ってなだめて、ようやく落ち着いた頃、テーブルに戻る。雅也さんは気楽に『お帰り〜』と手を振ってくれた。

「ミヤたちは？」

「先に行ったよ」

うつ、ごめんなさい…

映画は指定席だから、ギリギリでも間に合えば座れるだろう…けど。いつの間にか曲調は変わっていて、ゆるいボサノバのBGMが流れていた。

私は雅也さんに頭を下げた。

「雅也さん、ごめんなさい…映画、観られなくなってしまった」

「ん？別に？それほど観たい訳でもなし、こうしてゆっくりのんびりしてるほうがいいよ。」

可愛い女の子と一緒にならなおさら、ね」

「本当にごめんなさい」

「いっていいって」

茶目つ気たつぷりに片方の目をばしばしさせている。

「…どうしたんですか？」

「ウインク。難しいよね〜昔からなかなか上手くできないんだよ。目薬点すときも口開けちゃう派だしさ」

他人事みたいにつぶやいてしているとイマドキの？大人の男というよりはなんか近所のお兄さんみたい…まあ実際そうなんだけど。

雅也さんてカッコいいのに、やっぱり飄々してる。

昔とおんなじ。

「ふふっ」

「あ、笑ったね？笑った罰として何か食べる？」

「もう、ワケわかりません…何ですかソレ」

たまらずクスクス笑ってしまう。

昔みたいにどこか人を喰った態度なのに、とぼけていて憎めない。

ホッとする。

雅也さんは変わっていない。凄くカッコいいオーラを出しまくっているけど、変わっていない。雅也さんはニヤリとイタズラっぽく私を見てきた。

「和音ちゃん」

「へ？」

「やっぱり笑顔がいいね」

…

「何があったか聞かないけどさ、迷った時にどっちにしようかなって時。和音ちゃんは難しく考えてやたらしんどい方へ行っちゃうタ

「イブかな？」

流し目を送ってくる雅也さんの吐いた言葉に、背筋が一瞬でビッシリと凍りついた。

「…」

「今さっき、ちょっと僕のこといいなと思ったでしょ」

「…」

「でも和音ちゃんは自分の気持ちを伝えてくれないよね。それって男からしたら、脈がないって判断しちゃうかもよ？せっかくアピールしても無反応なら脈ナシって思うだろうね」

雅也さんは口調も相変わらずのんびりしてる。

数真といい美形は表情が読みづらい。

何が言いたいのだろう。

私の戸惑いに気づかないフリで雅也さんは喋り続けている。

「つまり。俺は和音ちゃんをいいなって思ってるよ？ってこと」

「は？」

「付き合ってみない？」

ニッコリ。

…そんな顎を手に乗せて、甘く微笑まないでください…たぶん素敵すぎています、よ。

「え…あの？」

「俺はさ、アツい情熱って、恋愛には鬼門だと思ってるから…いつ冷めるかわからない…そんな恋愛では幸せにはなれないと思うんだよね。情熱って、執着と同意義語だと解釈してるから」

まだ三分の1残っているすっかり氷がとけて薄くなったアイスコーヒー。雅也さんは直接飲むと、あぜんとしたままの私をじっと見つめて、優しく笑った。

「誠実なのは保証するよ、あっそれとも危険な男がいいのかな？」

…数真みたいに」

雅也さんは優しく優しく、笑った…。

24ダブルデートって初めてですが〜5

気にならなかったといえば私は大嘘つきだ。

「…関係ないですよ…数真は…」

のどから声を絞り出す。

名前を口にするだけで胸がドキドキと苦しくなる。

「あいつはかなりヤバい。和音ちゃんもわかってるよね？うん、わかってるはずだよ。だからこうして僕といえるんだから…」

雅也さんの瞳が見られない。柔らかな目線の奥から突き刺さる視線が…

全てを知っているようで。

「ここから先はあくまで仮定の話ね」

ボサノバはまだ流れている。雅也さんの落ち着いた声はゆるやかなギターに乗って紛れることなく響いてくる。

「数真は君にとっていわば捕食者なのかな」

「…捕食者？」

「そう。君は数真の行動に翻弄されてる。それって仮に恋愛だったとしてどうなのかな。楽しい？」

相手に支配されて心のどこかで安らぎを感じるとしたら、それは恋愛とは違うんじゃないかな。

たとえそうだとしても、相手への愛情なんかは沸いてこないんじゃない？

相手の幸せを考えられるのが幸せな恋愛だとしたら。少なくとも健全じゃあない。支配被支配の共依存関係になりかけているのかもしれないね」

恋愛…か。

人を好きになること。

改めて言われると何もわかっていない自分に気づいて茫然とする。

でも相手の幸せを考えるって…実際出来るの？

雅也さんの話だと私と数真はお互いに依存しあっている…ってこと？

お互いにお互いの幸せを考えられない関係？

なんかたまらない気分がしてきた…

「…じゃあ雅也さん？」

「うん」

「心変わりした相手の幸せを祈るようなことって出来るんですか？

その人が他のコと二股かけてたり本命が出来たとかってサヨナラされても、変わらずに優しく出来るんですか？」

私には無理だ。

たぶん佐々木くんはすぐに私から離れていく気がする。だから告白されても気分が高揚しなかったのかもしれない。

「難しいね…まあ男と女は違うし、惚れた弱みといっても程度はあるしね」

「なら…」

数真ならどうなんだろう？

私を支配しようとする数真。その代償として、絶対に裏切らない心変わりしない存在として側にいてくれるのだろうか？

じゃあなんでミヤとデートしてるんだろう…

「じゃあそろそろ出ますか？」

につこり苦笑した雅也さんと目が合った。それから雅也さんと本屋さんに行ったり、ステーションナリーみたり。

街をぶらぶら久しぶりに歩いている間中、私は何も考えられなかった。

雅也さんはどこまで気づいているんだろう、とか。

あの二人は今頃どうしてるんだろう…まあまだ映画なんだろうけど。とかそんなことばかりがぼんやりとした頭の中を、ぐるぐると巡っていた。

「この服、和音ちゃんに似合うんじゃない？」

「え…って、こんなミニのジャンスカいつ着るんですか!？」

サテンのてろんとしたかなりなミニのジャンスカはボーダーカットソーと合わせて、『秋マリン』となる、らしい。そう雑誌の切り抜きが可愛く服の側で張り付けてデコレートしてある。

「こんな足丸出しの格好で電車に乗れません！」

「だから、俺とデートの時に、ね？ならいいでしょ」

何が、『ね？』なの…でしょう、か…？

ああなんでこんな大人のカッコいい男性とデートしてるんだろう…
周りからロコツにチラチラ見られる視線が痛い痛い…

すみませんね…こんながきんちよが側にいて。大学生みたいなお姉さんにやたらじろじろ見られてるよ。

「はあ…もう雅也さんが着たらいいじゃないですか。私よりきつと似合いますよ？」

「ダメダメ。和音ちゃんが恥じらいながら着てるのがいいんじゃないか。だから、さっ試着試着！」

「まったくスルーですね…」

しぶしぶ着てみる。

結構、強引だな雅也さん。たぶん元気づけようとしてくれてるんだろうけど、考えてることが掴みにくい。

「おお」

「あんまり見ないでくださいよ…って、雅也さん!？」

「あ、すみませんこれ着ていきます」

側で営業スマイルの店員さんに話しかけている。

「ではお召し物をお包みいたしますねエ」

「ありがとう」

「あの…雅也さん？」

振り返るその笑顔はにこやかだ。

「ん？そのまま着てればいいよ。帰りはクルマで送ってくからね」

「ありがとうございます…ってなんでそんな悪いです」

足をもじもじさせながら手をブンブン振る。

こんなミニ着て歩くのか？それも雅也さんと。

「やめて下さい…本当にお気遣いなくっ」

恥ずかしすぎる…

「僕からのプレゼントだよ喜んでほしいなあ…お礼ならありがとうのキスがいいんだけど、ね？」

お会計を済ませた雅也さんに、店員さんが私の着ていた服の入った包みを渡している。

後はもう、なし崩し的に…店から連れ出された。

「プレゼントなんてそんな誕生日でもないのに貰えないですよ」

「好きなコにプレゼントするのに理由なんかないよ？」

「う…」

最後の抵抗も、キラめく笑顔に撃沈。
なんてさりとキザなセリフを…

雅也さんあなたホストさんですか…？

「俺、君に付き合ってって申し込んだよね。まさか忘れちゃった？」

そ、そうでした…

忘れてたわけじゃないんです、でも…

「和音ちゃんと一緒に僕は嬉しいけど肝心の本人はなぜか上の空だよね？」

「そ…うですか？」

服屋さんの後はまた数真たちと合流だ。ご飯を食べにイタリア料理

のカジュアルレストランへ行く予定。

「数真のことが気になる？」

「…あ」

またそこへ戻りますか…

数真のことを好きかなんてわからない。
依存してるのはそうかもしれない。

私の頭と身体を支配しつつあるのかもしれない。

外国童話の、赤い靴のお話。

赤い靴を履いて…踊り続けた女の子。

やめたくてもとまらない。呪われた赤い靴。

踊り続けた女の子は偶然出会った木こりに、自分の足を斬ってくれ
と頼んだのだ。

そうして、命だけは助かった――。

…

誰かに必要とされたい欲ばかり。私は勝手な人間だ。

でも誰でもいいのなら。

じゃあもちろん数真じゃなく佐々木くんでもなく、もし雅也さんと

なら？

穏やかな『恋愛』が出来るのかな。

誰かを大切にその幸せを願えるような、そんな『恋愛』が…

出来るのかな…

25 ダブルデートが終わりましたが

映画はかなり面白かったらしい。

昔の映画のリバイバルで、映画館もアートな感じのミニシアター。

ミヤが映画の話をして、数真が相づちをうち、雅也さんがまた話を振るという絶妙なコンビネーションでようやくダブルデートっぽさが出てきた。

家庭的なイタリアンを出す、知る人ぞ知る隠れ家的レストランでの美味なる昼食会。おだやかにおだやかに時は流れる。

にこやかにひたすら頷いていたのは私。

ジャンスカにボーダーTをさんざかミヤに冷やかされた時は恥ずかし過ぎたが。まあ…まあそれ以外は…

ん、無難に会話出来た。

ようやくラストのデザートになり、さっぱりとしたほどよい甘さのジェラードを食べていた。

「今日は楽しかったね」

しみじみと言い、雅也さんは私を見てきた。

「楽しめたかな？和音ちゃんは」

「そうですね…楽しかったです。なんか色々ありがとうございました。」

本当に雅也さんに迷惑かけてしまった。

こんなコドモに付き合わされてうんざりしてないだろうか？

そう心配になるが、そんなことあまりにもうざそうで言えない。

それに…こんなこと思っではいけないんだろうけど、雅也さん…に。観察されているみたいなのその視線にどこか落ち着かない。

「なるほどね」

雅也さんがクスクス笑っている。

見ると、テーブルに肘をついて組んだ手に顎を乗せて…なんだか楽しそうだ。

一部始終観察し終わったとばかりに言ってきた。

「いいのかな？否定しなくて」

その視線は数真に向けられている。

「なんのことですか？」

「へえ。もしかして予定調和の余裕かな？」

私は思わず数真を見た。

二人は何を言ってるんだ？

数真は雅也さんに薄く笑いかけ首をすくめている。
くだらない、と言葉に出すまでもないのだろうか。

「人聞きが悪いですね…なんのことですか？」

かわす数真に絡む雅也さん。珍しい。雅也さんが熱っぽく話してるのはなんのことなんだろう？

「…偶然、ね。今日はなんのためにこんなデートを企画したのか聞くほど野暮じゃないけどさ、和音ちゃんを悲しませるような趣味は持つちゃだめだよ？数真くん」

「意味がわかりませんけど」

え…なんで？微妙に陰悪になってるし。はらはらして二人のやりとりを見守る…というかテニスのラリーを見てるような緊迫感が、びびり伝わってくる…

「優等生でもわからないことはあるんだね」

「あなたこそ。もっと一途なロマンチストだとみくびってました」

「と言うと？」

「和音ちゃんを利用しないでください…自分の想いの昇華のために」

「言っね」

「言いますよ」

う、わ、あ。

なんでこんなコワイ空気になるんだよ…

もうじきお開き、解散だっていうのにケンカしないでください…

なんで二人はケンカしてるんだ？

ミヤがボソツと呟いている。

「モテる女は辛いわね…」

「は？」

「いえいえ」

なんなんだ…。

「和音ちゃん」

「は、はいっ！…！」

なんかいきなり名前を呼ばれて、授業中に当てられたみたいな錯覚だよ。

雅也さんがにつこり私を見つめてくる…

やな予感…

雅也さんは何か楽しそうに微笑んできた。

「この際、二人には言っちゃおうか？約束した件について」

…まさか。

「こそこそするのは嫌なんだよね…」

「雅也さん？あの」

とんでもないことを言いませんように。

数真の目線が痛い。温度がすうつと下がった気がするのは気のせいだよね？

頼むから、気のせいだと言って。

「あの…？雅也さん？」

しかし私の祈りもむなしく雅也さんは爆弾を投下した。

「今度は二人でデートだから、ね？」

あ、あ。

言っちゃった、よ。

大人なのに、なぜ空気を無視しますかね！？

なんでこのタイミングで言っちゃいますか…

「あの…数真…」

と、数真が薄い唇をほころばせ、静かに静かに言ってきた。

「和音ちゃん」

「は、うん!？」

ごくりと喉がなる。

カラカラに渴いている。

数真が見ている。

数真。

数真。

見てくれている。

やっと合わせてくれた、その視線は冷たくもなく乾いてもいない。

ちよっぴり安堵だ。よかった。

——え？

いまなんて思ってた私？

あたふたする私を数真が優しく見つめてくる。

「和音ちゃん」

「…うん」

「帰ろう」

惑いを吹き飛ばす懐かしい笑顔。

その伸ばされた手に頭の奥から温かな感情がじわじわと呼び起こされてゆく。

帰ろう。

鮮やかによみがえる。

染み渡る、数真の言葉。

数真の瞳に捕らえられる。

薄茶の瞳。柔らかな睫毛の陰。

うなずいていた。

気づいたら、身体が勝手に何度もうなずいていた。

「うん」

そうしたら。

また優しい空間に戻れるようなそんな気がしていた。

すでに手遅れなのかもしれない――

なんて。思ってもいなかったんだ。

26 最後まで伝えられませんでした

―この場合の『誰か』とは神様なんだろうか？

そんな馬鹿げた疑問を思い浮かべた自分にまたかと呆れる。

いいかげん、しっかりしろと言いたい…

生温かい掛け布団にくるまりクーラーをガンガンに効かせている。

ここは自分の部屋。

一番安心できるはずの場所。

すっかり冷めきった身体が悲鳴をあげているのを無視し続けて答えを探している。

教えて。

誰か教えて。

私はどうしたらいい？

…

返ってくるはずもない返事を待っている。何かいきなり目の前が拓けて、解る…理解する…そんなことが起こるはずもないのに、愚かな私は待っているのだ。

神様なんていない。
わかってる。

数真を好きになれたらいい。

雅也さんを好きになれたらもつといい。佐々木くんでも。

でも。

誰を好きになっても、変わらないんだ。
私の狡い心根は変わらない。
私は知っている。

私は自分自身が可愛いだけだ。

私は私を必要としてくれる優しい手にすがり付いているだけだ。

数真の執着は甘美な罠だ。
まるで蟻地獄。

ドアを開けて入ってきた眉目秀麗な弟。

優しく微笑する数真に布団を剥ぎ取られ、私は怯えている。

と同時に安堵している。
考えなくていいというのは、官美な誘惑だ。

数真でも雅也さんでもだれでもいい。
強い相手に補食される誘惑。

意思を奪われ、堕ちてゆく快樂。

「和音ちゃん」

「なに？」

「和音ちゃんは雅也さんと付き合うつもり？」

「聞いたんだ」

「なんとなく。カンだよ」

「…そう。でもたぶん、付き合わない…付き合えない、よ」

付き合いたい、という意味。

付き合いたくないという意味。

どちらも私にはない。

数真にはそれがわかっていいのかいないのか。

「そうか」

私の瞳を覗くように、近い。数真の瞳。

やりとりは、行為と裏腹に、どこまでも乾いている。

「雅也さんと」

「え…？」

あまりにも小さな声に聞き返す。

「雅也さんと付き合えばよかったのに」

数真に抱き締められて心が凪いでいる。

いい匂い。うっとりとして身体から力が抜けていく。

「そうすれば俺は諦めたかもしれない…なんてね。ないか、それは」

どうして？

そう尋ねるより早く数真は甘く囁いてきた。

「俺にはお前しかない」

そこから先は言葉はなかった。

絡まった足と足。

強い抱擁。

幾度となく降り注ぐキス。

無言に耐えきれなくなったのは私だった。

「どうして…私なの？あんなら別に私じゃなくても…」

「和音は弱いから」

「弱くて自分だけが大事でいつも他人のせいにしてびくついてる」

数真の言う通りだ。

悔しいけど、そのとおりだ。

「和音も俺を知っている。俺が嫌いだろう？」

穏やかな茶色の瞳で私を射るように捉える。

「俺の本質を知っている女はあんただけだ」

戸惑う。

だから？

「だから、俺はあんたから…離れない」

私に染み込んでくる数真の意志。長い時間をかけて溜められた、想いの深さ。

強い感情。欲情。

なんて、禍々しい。

その深淵を覗いてしまった。

その深さ、あまりの暗さに目眩が、する。

—そう。

ダブルデートからこの家に帰ることを選んだのは私。
雅也さんには送ってもらわなかった。

あんなに優しくしてもらったのに。

心配かけてしまったのに。

差しのべられた手を離して、数真の手を取ったようなものだ。

嫌な女。

それが私だ。

それでも、数真は私でいいのだろうか？

非選択という逃げによつて、こうなる結果を招いたのだから、私は
とことんどMこの上ない。

「和音、泣いてるの？」

数真が私の瞼から溢れる液体を舐める。

身体の芯が官能的な震えに満たされてゆく。

どうしたらいい、なんて愚問だ。あまりにも愚問すぎる。

こうやって抱き締められているだけで、喜んでいる。
それが答えだなんて。
安っぽすぎるよ。

でも認めざるを得ないだろう。

あのデートの時、私は。

数真がミヤと一緒に行ってしまっかと思っただ。

堪らなかった…

そう思うと、例えそれが何かのたくらみだとしても、身体が泣き叫んでいた。

身体が痛い。

心が痛い。

数真と一緒にいたい。

一緒にいたい。

でもそれは愛じゃないんだろうか。

倫理にも反する。

少なくとも幸せになれるような恋愛じゃない。

ダメなのはわかっている。

わかっているのに。

「和音ちゃん、何考えてる？」

「数真は、私とどうしたいの？」

数真が笑っている。

見惚れてしまったよ。

みんながカッコいいって騒ぐのも納得の、魂を奪うような魅力。

「答えを聞きたい？」

屈託のない数真の笑顔を不思議な気持ちで待つように眺める。

もう選べないのだと悟った。

蕩ける光。

私たちを引きずり出し、暴いてしまっただろう光が脳裏に広がってゆく。

私が見たのはそれが最後だ。

私は数真を選んだ。

数真にはそれが伝わっていたのかな。

脳裏に広がってゆく光に身体を任せながら私は思っていた。

私は、数真がいないと、ダメなんだ。

私たちのつながりを成り立たせるものは執着か依存か。 たぶん愛

じゃないのかもしれない。

でも。それでもいい。

数真に側にいて欲しい。

数真がいないと、私はおかしくなってしまう。

憎らしい、逃れたい、その支配。

絡めとられる安息。

光がますます強くなる。

数真。

今度目が覚めたら、あなたに言おう。

私は自分だけがかわいい卑怯な卑屈な人間だけど。

確かなのはこの気持ちだよ。

数真。

私はあなたが側にいて。

幸せだったんだ。

27 あなたに伝えたかったこと（前書き）

ちよつと流れが変わってきます。

一応、前話までが話の前段階で、ここからがメインとなります。

今までの流れと違って嫌だなと思われる方には申し訳ありません…

27 あなたに伝えたかったこと

あなたに伝えたいことがある。

あなたの想いに答えたかった私がいる。

私が、いた。

私は、あなたがそばにいないと狂ってしまっ

狂ってしまっただろう。

あなたに伝えたかった。

それが済まされなければ。

私は前に進めない。

だからこうして今もこだわり続けているのだろう。

：

ふっ、と足が軽くなる。

タラップを降り硬い地面に足を着けるやいなや、背後でパシューと
ドアが閉まった。

軽快に走り去って行ったバス。

見送ると、とんとんと腰を叩き伸びを試みる。

座席のスプリングが古くて変に弾んで座り心地は悪かった。

解放された喜びよりだるさが先にくる…

ん、ともう一つ伸びをして新鮮な空気を肺に送り込む。枯れた草の香りだ。夕暮れを含み始めた冷たさが混ざっている。身体の芯がしやきつとして、ふわふわした揺れの残りを追い払ってくれそうな心地よさだ。

空気がすごくいい。

街もビルも人も車も工場も。

何もない。

何もないな、本当に。広がった空の広さ、自分の周りの空間の広がり。

現実はその甘くはない。そういうことなのだろうか。

私はメモ書きの地図を片手に歩き始めた。

乾いたアスファルトに導かれるように私の足は向かっていく…どこどん辺鄙な方へと進んでいるが、不思議と怖さは感じなかった。

足元の雑草から荒れた休耕田の境目も怪しいまでに、辛うじてアスファルトの上のみが道らしき道。

手をかけずに整備されない道。

世間を避けるように造られた施設の案内役としては、これ以上ない
相応しさだ。

笑ってしまふ。

笑うしかない。

気分はもう荒野をさすらう旅人、だともいえばいいのか。

旅人…確かにね。信憑性に欠ける、怪しいことこの上ない手掛かり
にすぎりついているのだから、今の私は愚かな旅人みたいなものだ。

…

ねえ、数真。

人の思いは何処からやってくるのだろうか。

温かな感情はどうして生まれ、そして…消えてしまふのだろうか。

目が覚めるといなくなっていた、あなたに聞きたいことは山ほどあ
る。

私は数真をいなくなった、と感じるけれど、何も数真の存在がなくなったわけでも何でもない。語弊のある言い方を許してほしい。

数真は、いる。

大学を優秀な成績で卒業し、今は海外赴任中だ。

メールが時々届く。仕事は忙しいらしくほとんど日本には帰って来ない。

あれから10年たった。

正しく伝えると、言葉はむしろ回りくどくその想いを十分に伝えきれない。

もう10年、か。

いや、まだ10年しかたっていないんだ。

あの最後の夜。

明け方が近くなり、数真の囁きが聞こえた時。あのと時からまだ1

0年しかたっていない。

耳を澄ますと今も耳に囁く、甘く切ない声。

数真の声は剣道をしていたせいかな、どちらかと言えば高めだったけど、耳元で囁かれる声はいつもどこか掠れていた。懇願と脅迫を混ぜたようなあまやかさに満ちていた。

『あんたが諦めからでも俺を受け入れてくれて嬉しかった』

諦め？

違う。

無茶苦茶だ。

そんな馬鹿げたことがあるか。

私は伝えてないんだ、まだ。

一言も言えていない。

なのに消えてしまったというのか？

私の中に切ない想いを呼び寄せる、執着としか呼びよつた数真の狂愛が、消えた。

苦しくも甘美な、狂ったその熱は。数真から私に伝染されたそれは…麻薬みたいなものだとも言えいいのだろうか。知らなければ

穏やかに暮らしていった。平和に生きていったのだ。

離れられない。

忘れられない。

脱け殻になったような優しい数真に対しては抱けない、私のこの感情は私自身をじりじりと焙る。

この10年。

私は忘れられなかった。

数真はどこに行ってしまったのだろう。

あの時の、数真はどこに？

いつの間にか握りしめていた手のひらをあけ、シワのよった封筒をなぞり、形を直す。

丹念に封をまたあけると、私はその内容に目を落とした。

遠くの山々に温かな斜光が射し始めていたが、焦る気持ちはなかった。

手掛かりは、ある。

ここにあの禍々しい熱の滴りが遺されているのなら。もう私には怖いものはないのだ。

「すみませーん」

薄暗いな。

それに古いし、人氣が全くない。

受付らしきカウンターはあるにはあるが無人だよ。

施設らしく玄関は広いんだけどどこで靴を脱ぐのかわかりにくい。

「あの…ごめんくださーい…」

ひんやりとした空気に私の声だけが響いた。

灰色の廊下が長く伸びている。カウンターのああるロビーは結構広いけど、ソファアも何もなくて殺風景だ。

まさか誰もいないのだろうか？

キヨロキヨロしているとようやくカウンターの奥のドアが開いて誰かが出てきた。

ああよかった。

「あの…先日電話しました、倉橋ですが」

「ああ」

私と同じくらいの年代だろう、ジャージ姿の男性職員がスリッパを出してくれる。

「あ、すみません」

「いいえ、こちらです」

案内されるままについてゆくとその職員は申し訳なさそうに私を見下ろした。

「わざわざお越しくださって、なんとも…倉橋さんにはご迷惑おかけしました」

「いえ、私が勝手に来たんですから。ええと、マサハルくんでしたっけ？彼を困らせるつもりありませんし、施設の方にご迷惑をかける気もないですから」

「そう言って頂けると正直助かります。マサハルくんは悪いコじゃないんです。ただちょっと…」

いいよどむのはわかる。

入所者の個人情報に対して彼らは守秘義務があるんだろう。ぺらぺらと喋る訳にはいかないのだ、きっと。

私は彼の気持ちを和らげるように控え目に微笑してみせた。

「私は手紙の内容について軽くお話したいだけですから…」

職員は少し困ったように私を見る。

「…本来なら、妄想を追求するのはタブーなんですがね…」。

でもあのコがここまでではつきりと自己主張するのは珍しくてね。あなたに手紙を出してるとは私たちも知りませんでした。

たぶんこの間の同伴外出の時に投函したのでしょうけど。そんな自発的行為は最近はほとんどありませんでしたからね」

感慨深げに呟いている。

えつと…いいんだろうか。

そんなにマサルくんについて他人の私に喋ってしまったも…と思っただけ。

よく考えてみれば。職員さんにしてみれば、そのマサルくんが勝手に出した手紙を読んで、信じてかどうかわからないがとにかく私が来てしまった以上、事を荒立てずに穏便に済みたいのだろう。

そう考えると、このぐらいの『お喋り』はむしろ、『だからさつさと納得してもう早いとこ帰って下さいね』って含みなんだと思う。たぶんね。

当然ながらあまり歓迎はされていないのだろう。

まあ、こうした施設に入所している人に、身内でもない人間が面会できるなんて本来ならあり得ないのを何故か許可が出たのだ。今さら細かいことを気にしても仕方ないのだろうね。

ぺたぺたと借り物のスリッパが、リノリウムの床にくつつく音。

歩きにくいなあ…何処までいくんだ？

途中、エレベーターに乗って、今度は最上階に…と言っても三階だけど…に行く。

昼間なら明るい光が降り注ぎそうな、天井近くがガラス張りのエン

トランスを抜けると、また施錠されたドアを抜ける。

どこの秘密の国の王子様なんだ。って、ツツコミをいれたく成る程オートロックだらけだよ。古いのは玄関のある一階だけで、中は意外とキレイだ。三階なんて最新の設計なんじゃないのか？

明るいいし、キレイだし、木調の素材が無機質な空間に温かみを醸し出している。

「こちらです」

いろいろと考えているうちにどうやら目的地についたらしい。

三階の一角にあるドア脇のオートロックを解除しながら職員は言ってきた。

そういえば名前聞いていないけど…と今さらながら胸元に目をやる。田中と刺繍が入っていた。

田中さん、ね。

振り返ると田中さんは、念を押すように確認してきた。

「マサハルくんは、あなたと二人で話したがると思いますが、それは出来ませんのでご了承ください」

「はい」

「それと、彼がもし強い興奮状態を示した場合、速やかに部屋から退出して頂きますが、よろしいですね？」

「わかりました」

「いずれにせよ、そういった不測の事態には、私の指示に従ってく

ださい。よろしくお願いいたします。では、入りますよ?」

「はい」

この扉の向こうに。

数真のあの熱情の手掛かりがある。

28 マサル君

思ったより、広い。

それが素直な感想だ。

20代も後半、というか30近くにもなると大抵のことは経験済みで新鮮な感慨にふけることすら難しくなってきたらただけ。

空間を贅沢に使った、まるでホテルのスイートみたいな雰囲気の一部屋がドアをあけるといきなり現れる。廊下からは想像出来ない。内部はさらに豪奢だったんだな。

「こちらです」

「あ、はい」

寝室は別になっているらしくここにはベッドが見当たらない。

まずはソファークセットが置かれたこの部屋を通り抜けた。
10畳くらいは余裕であると思われる。

ここは、その、ただ座るだけの用途で設けられたのだろうか。
うーん…無駄に広い空間のせいで生活感が薄い薄い。ラグジュアリーな印象を与えるよ。っていうか威圧されます。こんなとこに暮らしてるなんて彼は何者なんだ。

場違いなスリッパのぺたぺた音を響かせながら案内されるままに進んでいく。中はフローリングなんですね。

…アレかな。

例えばマサハルくんってどこぞの御曹司とか、はたまた大株主とか。貧弱な私のお金持ち像からはぴんとくるイメージは見つかからない。

なんと言ってもあんな手紙を書くくらいだよ？

某大統領夫人に助言していた某占い師とかFBIに捜査協力もしていた霊能者とか。そっち系のお方なのか？

うーん…わからない。

まあ…うん。あれだ。よくわからないからとりあえずスルーしておこうか。

いちいち動揺しても何にもならないしね。動揺したところで、事態は変わりはないし、むしろ状況把握が遅れてどんどん自分が不利になるだけだ。

仕事するようになって平常心の大切さは常に身を持って知っている…つもりだ。

慌てても仕方ないのだ。たいていのことは、私ごとがどう足掻いたところでなるようにしかならないものだから。

この10年でトシくったぶん性格が落ち着いたというかなんか冷静に…ふてぶてしくなりました。

可愛くない？

別にいい。

もうそんな価値観からは離れて生きていくんだよ。

でもね。

そのぶん…昔のあの暗い情熱に今も惹かれてしまっ自分がいるのも認める。

…若い時の勢いはもうない。

その喪失感に振り回されてここまで来てしまった。

「初めまして」

声に引き戻され私は立ち上がった。

ずいぶん待たされていたのだ。

私が案内されていたソファは、普段お茶なんかをちょこつと飲むスペースらしく、部屋の壁一面にはダークな色目の木調の作り付けの本棚や、パソコンデスクがあったりとアカデミックな重厚感がある。

現れたのは意外なことに私の予想を上回る年代の男性だった。

「マサハルです」

「初めまして…倉橋和音です」

若くは見えるが、落ち着いた雰囲気から言って、30代くらいの男性だ。

細身でメガネの似合うインテリ…職業は…あちこち掛け持ちで教えていて忙しい大学講師です、と言えばそのラフで知的な感じにぴったりくるだろう。

私はマサハル…くんを複雑な想いを隠して見つめた。

マサルさんと言い直すべきか。この人が、私と数真のことをなんで知っているのかやはり不思議だ。
奇妙な感じた。

想像していたようなスピリチュアル系な青年でもなければ、エスパー的少年でもない。

整った顔立ちだけど世俗的な疲れが表情に滲み出ている。普通のサラリーマンでも通りそうな、くたびれたシャツの臭いがしそうな生活感があるたたずまい。

それが妙な親近感を抱かせる。生真面目に生きてきた人って感じた。
彼は、にこつと笑った。

まるで、私が観察し終わるのを待っていたかのようなタイミングに内心ドキリとした。

「来てくれて、嬉しいです」

「あ、いえ…そのすみませんいきなり押し掛けまして」

「いえ、どうしてもお会いしたかったので、あんな手紙を書きました。失礼は承知ですがやはりお会いしたかったです。その気持ちが残っていました。だから、謝らせてください。ごめんなさい」

ペコリと頭を45度下げている。

私はその素直さに20%驚き50%感動し、30%退いた。

だってね、謝るのって大人になると難しいんだよ？ 仕事とかで立场上謝るのは別として、些細なことで謝るのって…しかも初対面の

人に謝るのってかなり難易度が高いんじゃないか？

人間関係をこれから築くって時にいきなり謝るなんて立ち位置を不利にする行為、普通オトナはしない。

「いえ…あの気にしないで下さい」

「許してくれますか？」

ぱつと表情に明るさが走る。

「もちろん。手紙はその、びっくりはしましたが不快ではなかったです」

「ありがとうございます」

彼はまた、にこつとした。

…なんだか調子が狂う。

見た目のインテリっぽさと反する反応に。

どう返すべきか迷う間もなくさらに彼は。懐かしそうに目を細めた。

「側にいるよ」

「え？」

「彼はあなたを知らない。でもあなたのすぐ側にいる。あなたは会いにいける」

私は固まった。

…何を言ってるんだ？

マサルくんは私をみてまた口角を緩やかに上げた。

紅茶の入ったカップソーサーを爪先で弾きながら、呟いている。

「戻れないかもしれない。でも、あなたが決めることだ」

私はいったいどんな顔をしていただろう。

29 マサル君 2

私は靈感もないし不思議体験も経験ない。だから、イタコとか霊媒とかそういうのって信じられないのだ。

まあ数真は死んではいないんだけど。

「倉橋さん…私のことヘンなヤツだと思いませんか？」

あえて触れたくないところをダイレクトに突きましたね？

数真が側にいるとかいないとかって、なんてコメントすべきなんだ。

平静を装いながら、心中は脂汗でダラダラものだった。

このシチュで黙るのは彼の発言を肯定するほかならないんじゃないのか、と思う。

それは…それはよくない気がする。

だいたい、まだろくに彼と話もしていないし、もし仮に彼が知っているのなら、数真の記憶が無くなった理由を教えて欲しいのだからでも、マサルくんの言い方だと、なんだか数真がもうひとりいるような、そんな感じにも取れる。

—数真が、もうひとり、いる…？

いやいやいや待て。

それはない。ドッペルゲンガー？ありません。ないです。存在しない。

現代人として、いや社会人として大切なものを失ってはいけない。なんでも安易に超状態現象に原因を求めてはだめだね。

物事には原因があり結果がある。タネのない手品はないのだから。

たまたま、何かの拍子で数真と私のことを知り…それ不思議だが…マサルくんはまあ…触発されて妄想した、のだろうか。

もしそれが事実ならちよつとガツカリ…いやだいぶガツカリだ。

28にもなつてなにやつてるんだか…こんなところにまで私は何をしに来たのだろう？何を確かめたかったのか。

―『そんなに弟がヨカッタ訳？』

忘れたい過去までよみがえってくる。

無言に陥った私に柔らかな声かけられた。

「会いたくなったら、いつでも言うてくださいね」

「え…あ、はい」

…会いたくなるって誰に？

すごく聞きたかったがそれを口にとするとまたいろいろと失ってしまいそう…主に精神力を…私は口を曖昧に閉じた。

どこか私を労るような表情。裏のなさそうな柔らかな微笑。

疲れた顔付きなのに、やつれた感じなのに、端正で知的なお顔が優しげに映るから得な人だ。

気を張っていたぶん、なんだかいつぺんに疲れが押し寄せてきた。私はにこやかなマサルくんをただ黙って見詰めることしか出来ない。

思っていた以上に、動揺している。自分で考えているほどクールでもなく顔に出やすい質なのだろうか。

マサルくんはそんな私の気持ちには関係ないかのごとくあくまでやっぱり笑顔だった。

過去にこだわってしか生きていない後ろ向きな自分が嫌なんだ。

わかっている。

数真はもう以前の数真じゃないんだから、私も忘れてしまえばいい。首筋までお風呂に浸かる。ゆらゆらと熱いお湯が身体の澱を抜くような、染み渡る感覚。口からホッとため息が出た。気持ちいいなあ。

このあたりにはホテルもなくて、私は来客用の部屋に泊めてもらえることになったのだ。

狙っていたわけじゃなかったけど、タクシーも夜は来てくれないつてのは想定外だったから助かった。

私が押し黙ったことで会話は続行不能とみなされ、職員の田中さんにより、本日のところはお開きと相成った。

私はどうしてこんなに数真に拘るんだろう。

そうだよ、いつまでも終わった恋にしがみついているなんて、見苦しい。

恋…か。そもそもアレが恋愛といえるのかどうかも怪しいな。

自分でもわかってる。未練がましい、不毛な感情だ。

「バカだよ…」

あれほど強く求められたことはなかったのだ。

あの時までも、あれからも。私という存在をあれほど強く求められたことはなかった。

熱いお湯に浸る。肩口までのたっぷりのお湯に満たされた湯船は足を伸ばしてもまだ余裕があるほどだ。

「数真…」

会いたい。

心が勝手に探してしまう。

どろどろな執着を勘違いしてしまった私は。苦しいくらいの数真の偏執を忘れられないのだ。

心が震えるほどに求められ、満たされた記憶は消せない。

赤い靴。

一度履くと二度と脱げず、嫌でも死ぬまで踊らずにはいられない、美しい魔性の靴を手に入れた少女の話。

あの話の少女は木こりに足を斬ってもらい、足と引き換えに自由を得たのだ。

でもそのあとはどうしたんだろうか？

かつて美しく踊れた悦びを思い出すことはなかったのだろうか？

もしかしたら。

せつかく命拾いしたのに、あのまま踊り続けていたら…と願いにも

似た妄想に耽る瞬間も、あつたかもしれない。

二度と踊れなくなってわかってしまったかもしれない。

彼女は、美しく踊り、恍惚とした悦びに包まれながら一生を終える選択をしなかった自分を…どう思っていたのだろうか？

それから明くる日にまた私はマサルくんに面会した。もちろん引き続き田中さんの付き添い付きだ。当たり前障りのない話題の会話が進んでいったが、マサルくんはまた唐突に、昨日の件を持ち出して聞いてきた。

「どうですか？また彼に会いたいという決心は出来ましたか？」

…決心？

いったい何の事だと私は眉根をよせかけたが、取り繕うように慌ただしく口を開いた。

「どうしてあなたが私のことを知ってるのか、教えてもらえませんか？彼に会えるって、それはどういう意味なんです？」

「…私はあなたの意志を確認する役目です。説明責任は残念ながらありませんので」

相変わらずはぐらかされる。さっきから何度も会話に挟み込み聞いているのだが教えてくれない。

なぜだろうか。

私の反応を楽しむように彼はにこやかな態度を崩さない。それも気に障った。

まさにいい加減、苛つきが声に出てしまいそうな時のマサルくんの発言だったのだ。

「会いたいんでしょう？例え全てを失ってでも」

マサルくんはわかっているのだ、と言いたげに含み笑い…微笑している。

なんなんだ。

「あなたの大切な人に、ですよ？会いたいんでしょう？」

私はカッとなった。

「でなければこんなところまでお邪魔してませんよ？」

眼鏡の奥の瞳を見返す。

「確認します。あなたは会いたいですか？」

昨日は確かいつでも言えと余裕だったのに、今日の彼の態度はしつこく感じる。

「私は…」

「倉橋さん、大丈夫ですか？」

田中さんが心配そうに口を挟んでくる。

邪魔されたくない、と思ってしまった。

30 目眩それとも何処かへ落ちてゆく

私はそれほど酷い形相なのだろうか。自分ではわからないが、田中さんは私を厳しい表情で見据えると、首を静かに振った。

もう、でも… かまわない。

取り繕う気持ちが嘘のように消えてゆく。

残るのは、たった一つの想いだ。

「これ以上話しても仕方ありませんよ？退出しましょう倉橋さん」

田中さんが促してくる。

それは…出ていけ、ということなのだろう。

「嫌です、ご免なさい」

「倉橋さん？」

私は田中さんに必死で訴えた。

「私は…数真に会ったためにここに来たんです」

ちっばけな、つまり、後ろ向きな私の想い。

「私は…」

たった一つの、願い。

馬鹿げてるとしか言い様のないこの気持ち。

真っ直ぐに見上げると、マサルくんの瞳に吸い込まれそうになった。

なぜだろう。

私はこの人を知っている。

「あなたは…誰に会いたいのですか？」

それとも、私はこの人を知って『いた』のだろうか？

わからない。

「私は…」

田中さんが何かを言っている。

聞こえない。

頭がガンガンする。

どうしたんだろう？

目の前にいるはずの二人がよくみえない。

緑色の引き幕が無理矢理下ろされたかのように不鮮明に、周囲のト

ーンが暗く染まる。

私、どうしたんだろう？

めまいが、する。

貧血なのだろうか？

すごく気分が悪い。

胸がむかむかする。頭が痛い。気持ち悪い。

足元が沈んでゆく感覚。立ってられない。ああ、これは倒れる……気分が悪いくせにやけに冷静に思った。頭を打たないように倒れないと危ない。

誰に会いたいのかって？

まだ聞いてくる声がした。

会いたい――

『数真』に会いたい。

ほんの僅かな時間だったのだろう。

「……わかりました」

マサハルくんの声だ。

「確かに、確認しました。あなたの『意志』を」

うれしそうに呟く彼の笑顔まで見えそうな、朗らかな声が、脳裏に響いてくる。

私は意識を手放し、辺りは全てが暗転した。

澄んだ空気の香り。枯れ草が夜露に混じった匂い。

ひんやりとした、土の匂い。

秋の匂い。

音は、何も聞こえない。

不気味なほどに無音静寂。

月のない闇夜では何も見えない。

押し潰されそうな闇の中。目を凝らしてみても、何もわからない。

今着ている薄手のトレンチでは間違いなく風邪をひいてしまっただろう。

幸い、デニムとショートブーツは季節を無視した冬物だからそれなりに暖かい。

羽織るものをもっと持ってきたらよかったかな。

…いや待つて。

なんで私、外に居るんだろうか。ブーツまで履いてるし。確か、施設の個室に居たんじゃなかったか？

どこかの道の真ん中に立っているみたいだった。

道と言ってもアスファルトで舗装された道路じゃない。土を固めただけの代物だ。

触ったらしつとりとした冷たい土の感触だった。

さっきまで室内にいたはずなのになんで？

なんでいきなりこんなところにいるんだろう。

さっぱりわからない。

とりあえず迷った時は動かないのが鉄則だけど、そもそも迷う以前にここにいる経緯の、記憶がない。もしかしたら長い白昼夢を、あのバスを降りた時から観ていたとか？

そんなことを考えているうちに私は大切なことを思い出した。

確かポケットに携帯があつたはずだ。

充電は…まだある。

「えっ」

喜んだのもつかの間。表示された文字に絶句する。

『圏外』

使えない…ってここはいつたいどこなんだ……？
さっきまでは…あの施設では使えたはず。

私は目を閉じた。

状況が良くないのはわかった。なぜこうなったのか経緯はやはりわからないが、これはヤバい事態だ。

再び目を開ける。

見たところ…ようやく暗闇に目が慣れたけど辺りは何もない暗闇。
星明かりではよくわからないがおそらく、道に、草原、林…森？

黒ずんだ視界は人工の建物がいつさいないらしきことを予想させた。

少なくとも電気はない。

これは本格的に遭難だろうか？何処だかわからない場所で、遭難…

あり得ない非常識な事態だけれど。

「うつ…」

また、だ。

頭を殴られたような衝撃。それに続く脳の揺れに、思わず息をつめる。

気持ち悪い…

例えばエレベーターに乗った時に目を閉じて逆立ちしたらこんな感じなんだろうか？目眩にしてはかなりの振動。これ以上揺れが続くと吐きそうだと思ったら、しだいに収まった。

代わり映えのしない暗闇。ひんやりとし始めてきた青臭い雑草と枯れ草が醸し出す香り。夜露の匂い。それらを感じようと、見ようとした。自分の姿勢もよくわからない。貧血で倒れた時みたいだ。倒れる前に意識を失って、気付いたらあらビックリなんで私寝てるのみたいな。

…え？

目を開けた私は思い切り口も大きく開けていた。

また場所が変わっている？

なぜかいきなり目の前で、横転してゆく箱馬車。

まるでスローモーションの落としコマのごとくゆっくりと、しかし確実に馬車は沈んだ。

遅れて、地響きのような辺りを揺るがす轟音が、全てを支配する。

追走してきた馬上の男が自分の馬の手綱を引き、叫んだ。

「エリアン……!!」

馬車を遠巻きに眺めつつ、口々に何事かを叫んでいる町の人たち。飛び出してきた体格の良さそうな男たちが、こちらへ走ってきた。

「事故かつ!!」

「中は大丈夫かつ!？」

「手を貸してくれっ」

「わかった!!」

車中の人物の名を叫びながら、屈強そうな数人の男たちと扉を探して無理やりこじ開けた先ほどの男は、手に触れた感触に顔を歪ませ、叫んでいる。

「エリアン!!」

生温かいぬらりとした液体。

それがいまだ滴り続ける血だという事実に恐らく、慄然と顔を強張らせている。

引きずりだされた男性は、血まみれだった。かなりの出血だ。助からない可能性も強い。

「あの女がいきなり現れて馬が驚いて馬車がひっくり返ったんだ！」

一斉に皆が私を見る。誰かがヒステリックに叫んでいる。

「え？」

「いきなり現れたんだよ!？」

認識するのに、どのくらいの時間を要したか。

皆が言っているのは私のことなのか？

町の人：なのだろうか。変わった服装の人たちが私を何か恐ろしいものを見るように遠巻きにヒソヒソと話している。ざわざわと耳障りな声たち。祈りを捧げる声。罵る声。怯える声。

声。声。声。

「光ったんだ。白い光りが眩しくて目を閉じて次に開けたらあの女がいた」

私は倒れていた。
でも誰かに支えられている。

彼が彼女かわからないが外人だ。端正というか端麗過ぎて表情が見えない。

その人に自分が抱き起こされる体勢だなんて、信じられないと私の脳が理解を拒絶していた。

「…」

しかも。目の前に息が詰まりそうなほどの美形が何人が並んでいる。

いつのまに？

町の人たちとは違う雰囲気。ざっと三人はいる。

私の周りを囲んでこちらを…見下ろしている。髪の色も容姿もそれぞれに違いがあるが今はそれどころじゃない。

だいたい、さっきいたのは草原みたいな場所だったのに今度はなんだ？中世の田舎町みたいな、舗装されていない大通り。真っ暗じゃない。

太陽の光りもなく薄暗いが、顔の輪郭だけでなく瞳や顔立ち、髪色までしっかりわかる。道の何処かに常夜灯が点在しているのだろう。月も…出ている。

地面に倒れた私を抱き抱えたその外人と目が合う。やんわりと微笑してきた。

知らない外人に抱き起こされそのうえ囲まれて…いる。

私を抱き抱えている麗しき金髪の外人とあと三人。

なんなんだこれは。

いったいどういふことなのか？さっきまで誰もいなかったのに、ど

うしてこうなるんだ？

私は深呼吸して、金髪美形を見上げた。

ホントに外人だ。

見とれている場合じゃない。が、綺麗な女ならよく見るけど、男で、しかも北欧系の端麗甘口な優美な感じの美形なんて、初めて見た。こちらが見ているからか、相手もじっと見つめてくる。凄い睫毛長いし肌もキレイ。

…でも。近いです、よ？

私は20センチ先の御尊顔から視線をさ迷わせながら、口を開いた。

「あの…ここは…日本、ですよね？」

金髪美形は無表情のままだった。

——遭難よりも事態はマシになったのだろうか…？

30 目眩それとも何処かへ落ちてゆく（後書き）

ありがちな展開ですみません。 次回は早めにアップできるかと思っています。

ラブラブな逆ハーにはおそろくなりません…たぶん。

3 1 目眩それとも何処かへ落ちてゆくゝ2

私はいつの間にか気を失ってしまったようだった。

金髪美形と話をしようとした途端、急に意識が途切れたのだ…なんだか寝ぼけていただけのような気がする。

長い、意味不明な夢をみていただけなのだろうか…

でも。

辺りは静かだった。外国の貴族の館の一室みたいな豪華な内装は、薄い壁紙を張ったビジネスホテルのそれとは明らかに異なる。壁のあちこちに施されたレリーフ。

極上な肌触りのシーツに毛布、リネンの寝心地は最高だが、もしホテルだとしたらこんな田舎にこれほどの設備を持つ高級ホテルはないだろう。

少なくとも聞いたことはない…

だだっ広いベッドルームに降り注ぐ青い闇の光に魅入る。

外から入る月の光は淡い光で闇を照らし、纏められたままのカーテンや毛足の長い絨毯に幻想的な影を落としている。

ひどく、静かだ。

誰もいないかのような無音に背中がぴりぴりとする。ここはどこなんだろう…私はそっとベッドから降りた。

シャラツと微かにきぬ擦れの音がして、ふんわりとした絨毯の感触が素足を包んだ。

嫌な予感がする。

もしかして…

私はとんでもないところにいるのかも…しれない。

ブーツとコートこそ着けていないけれど服装は家を出た時のままだし、鏡にうつる自分の姿も変わりはない。

不安げな顔でコンソールの上にある大きな鏡を見ると、鏡の私の後ろにふいに美形が現れた。

長い金髪に碧眼、目の覚める美しさ。

あの金髪美形だ。

「お目覚めのようですね」

振り向いた私に微笑を送ると手慣れた様子でソファのある間へと誘う。

ベッドルームの隣へ移動すると、向かい合わせの4人掛けのソファの片方へ金髪美形が座るので、仕方なく真向かいに座る。

「あまり驚かれないのですね」

金髪美形の微笑にはどこからかいが含まれていた。サシで美形と相対するのは緊張する。

「何かからお話すればよろしいですか？」

そう柔らかに尋ねてくる。

こういうのって、困る。

こちらの出方で態度を変えるつもりなのだろうか。だとしたらへたなことは聞けないし。

ここはどこですかと聞いたなら思い切り引かれそうだな。そういえば、たしか気を失う前に、日本ですかとこの人に聞いたのに。まだ返事がないんだった。

いや、その前に。

あのままあの場所にいたら、町の人たちに魔女扱いされて危なかったかもしれない。群衆心理…集団心理がどう暴発してもおかしくない状況だった。

誰かが何かを言えば、事態はどう転んでも不思議はなかったのだ。

私はお礼を言うべきなのだろう。たぶん。

「その。危ないところを有り難うございました」

助けてもらったのか記憶もなくよくわからないため、曖昧な言い方になる。日本語ってこんな表現でも話せるから便利だな…

そういえば、さっきの町の人といい、叫んでいた馬上の男といい、みなさん外人なのに日本語が上手だ。

もしかしたら、映画村か何かに迷い込んだのだろうか？日光江戸村、ハリウッド版みたいな。

最近のニュースをあまり見ない私が知らないだけで、ここはそういう娯楽施設なのかも。

自己紹介をしてさりげなく相手の情報を引き出してから何をどう聞くべきか考えようか。

…。

「私は…」

あれ？

なんだっけ。

「私の名前…」

焦る。だってなんで自分の名前が解らないの？

金髪美形の目線が愁いを滲ませているのに気付く…こちらが泣きたいくらいだ。

「やはりあなたが理を曲げてしまわれたんですね」

「…コトワリ？」

「いえ。あなたは軽い記憶喪失に陥っているようです。無理に思いだそうとなさらないように。私はミカエルと申します」

金髪美形はミカエルさんという名前なのか。

「名前がわからないのは不安でしょう…ましてや貴方は異界渡りでこちらへ来られたばかりです。少しずつ状況をご説明いたします」

異界？

「あの…」

「なんででしょう？」

「異界…って言われましたよね？」

ミカエルさんの清らかな笑顔に一瞬詰まった。
嫌な予感に後押しされて言葉は勝手に…こぼれてきた。

「ここはなんというところですか」

期待していたのかもしれない。

聞いたことのある地名、知らないうちに新しく出来たオープン前の
高級ホテル、リゾート施設…。

そんな答えを期待していた私は、金髪美形の端的な答えに無言にな
ったのだった。

「ここは、ユラドーマ大陸の聖なる神殿宮に続く…いわゆる白の館
です」

言葉を失った私をしばらくそっとしておいてくれたミカエルさんは。
やがて、こちらへ皿を近づけると呟くように促した。

「…ありがとうございます…」

「どうぞ温かいうちに」

勧められるまま口に含んだスコーンみたいなお菓子はサクサクした
香ばしい口当たり。なのに全然味がわからなかった。

ミカエルさんの言うとおり自分でも落ち着いていると思っていた。
でも…異世界って。

あまりにも安易じゃないか？

私は、…探しに来たんだ。

カズマ。

私の弟。

とても大切な人。

よかった。どうやら記憶がないのは一部みたいだ。今までの生育歴、仕事、友人、交友関係に抜けはない。数真とのあれこれも。

しばらくもそもそと美味しいはずのスコーンを食べていた私は、思い当たって質問した。

「異世界…っていうことは、ミカエルさんは私のいたところをご存知なんですね」

そうだ。

ここがユラドーマとかいうところなら、その住人であるミカエルさんはなぜ異なる世界があるって言い切れるのか…？

それは、つまり…

私の言いたいことを理解したミカエルさんがにこりと頷く。

「ええ。貴方のいた世界…チキユウからは何人もユラドーマへ渡って来られています」

チキユウ、って。

チキユウ…地球？

「あの」

どういうことなんだろう。地球なんて言い方、まるでここが全く別の世界みたいだ。

「足、冷えませんか？」

「…え？」

「どうぞこちらをお使いください」

差し出されたのは、ふわふわの毛皮のルームシューズ。そつと足元に跪き、ミカエルさんは私の足に触れないように、シューズを足下へ優雅な仕草で滑らせてくる。

ミカエルさんの優しい声が響いている。

「サイズは合いそうですね。よかった」

「はあ。ありがとうございます」

なんなんだこの人は。紳士というか執事というかまるでお姫さまに仕える騎士みたいな完璧な所作じゃないか。

なんなんだ…こういう人、日本にいるだろうか？

「名前がないと不便でしょう」

ミカエルさんはまた正面に座ると話し始めた。

32 新しき日々の始まり…？

この世界について、政治経済など知らないと困る情報もあるのだろう。

でももう、オーバーヒートだ。

ミカエルさんが私を少なくとも当分の間は保護してくれそうだと見極めると、勝手ながらもう生活にまつわる色々は明日にしてくれと体が訴える。

とにかく、ゆつくりと体を休めたかった。

気を遣ってくれたミカエルさんが部屋から出てゆくと私は本当に独りになった。

身じろぎするたびに沈み込むふかふかのベッドからはいずり出て、何も履かずに素足のままで床へつま先を伸ばした。

…やっぱり届かないとはね。さつきも思い切り足を伸ばしたが、今回もベッドからずるずると滑り落ちる感じで、床に降り立つ。ベッドまで、日本規格外とは嫌になるな。

その感覚は変わらなかった。柔らかい絨毯の肌触り。でも…拒絶するような冷たさ。

——夢じゃないなんて。

それとも…まだ目が覚めていないだけなのだろうか。

一縷のはかない希望をまた思い浮かべて自嘲する。

ため息だけが夜の闇に溶けてゆく。

眠れない。体は泥のように疲れていて睡眠を欲しているのに。

月明かりが余計に心細さを煽ってゆく。

誰にも頼れない、という心細さ。

―悪い夢だったらよかったのに。

暗い室内に、天蓋付きの豪華なベッド…

なんて場違い。

知り合いがいないというそれだけでなく、このファンタジーな世界そのものが異質。

異質…？そうじゃない。

…私、が。

この世界には異質な存在だ。

施設からこの異世界に来たほんの数時間かで目まぐるしく起こった出来事。

それらを受け入れることができないでいるのだから。

自分がこの世界にとっての異分子であり、いつ排除されてもかまわない存在だという事実は一――

私を余計に眠れなくさせたのだった。

自分の名前が『わからない』…何処のアニメ映画なんだろう。

もっともこの舞台は、ちょっと小綺麗な中世だけど。ちゃんとトイレも水洗式だし水道もある。

「おはようございます。昨夜はゆっくりお休みになれましたか？」
本日のミカエルさんの服装はシンプルな形のゆったりした長袖の白いブラウスシャツにベルト代わりの腰布、カーキ色のサルエルタイプのズボンにブーツだ。背中に長く垂らした金髪は緩やかなウェーブで、朝の柔らかな日射しに優雅に輝いている。

「ここでは遠慮はなさらないで、なんでも仰ってください。ああ、私の唯一の使用人の侍女です。名前をキャサリアといいます。

わからないことや困ったことがあれば、私かこの侍女になんなりとお申し付けください」

そのまま侍女だという若い女の子に着替えを半ば強制的にさせられ、朝食をミカエルさんと摂った。誰にも何も言われず、もとい、ミカエルさんと侍女の二人しか屋敷にはいない。

どうやらここは、ミカエルさんの屋敷みただけど、なんとかっていう城か王宮…神殿だったかの離宮の1つだとか。だから、正しくはミカエルさんが独占使用許可を王様からもらっている物件なんだろうか。それにしてもかなりの邸宅。部屋数いくつなんだろう。気にはなつたが勿論、調べる気力なんてない。

心の中はじわじわとした不安で一杯だった。

精神的な病気になったのかと疑ったほどだ。

いまひとつ、現実感がない…これは私の妄想か夢の中で。現実の私は精神的な病気に罹患したまま、何処の病院にいますか。

私はカズマ…数真を『探し』に来たのだった。

なのになんでこんな『異世界』にいく必要があつたんだろう？それともこんな中世もどきの世界に数真が『いる』と？有り得ない。

そもそも、数真がいるとかいないとか考えていた段階で私はヤバかつたのかも。

数真がもしここに来ているとして、じゃあ、アッチの数真はなんなんだ、とか。

わからないことばかり考えても仕方ないんだけど。

ここの住民がミカエルさんみたいに紳士ばかりでは無いと思う。私を気味悪く感じている人間もいるだろう。そう…昨夜の馬車の事故の時にいた町の人みたいに。あの雰囲気は進んで何度でも味わいたいものではない。

『あの女が現れて馬車が倒れたんだ』

さざ波のように広がる怒りと恐怖の声を思い返す。

あの人たちの言う通りならば。

昨日の事故は私のせいなんだろう…

あれだけの数の人が目撃したからこそあんな糾弾騒ぎになったのだ…やっぱりあの人が大怪我をしたのは私のせいなんだろう。その事

実は私の胸に、鉛のように重くのし掛かろうとする。

あの人、どうなったんだろう？たしか名前は…

「お茶のおかわりはいかがですか？」

侍女のキャサリアにいれてもらったお茶は、わたしの好みの、熱すぎる一歩手前の温度だった。初めて飲んだ時よりも深い味わいなのは、二回目に飲む紅茶だからなのだろうか。心は動揺していても味覚はクリアだなんて。

私はどうなるんだろう。

「私がお相手できない時はキャサリアをお側に付けます。わからないことは何でも申し付けくださいね」

不安はあっても日は過ぎてゆく。

最初はショックで部屋に籠っていたけど今はそれなりに慣れて毎日することもなく居候させてもらっている。無愛想な若い侍女に三食世話されてほぼ一週間過ぎていた。

食事にはミカエルさんが顔を出して相手をしてくれるがそれぞれ30分ほどだ。話し相手もなく暇で仕方ない…なんて言っちゃいけないけど、ミカエルさんが来てくれるのは申し訳ないながらも有り難かった。

じつとしていると不安が溢れてくる。余計にあれこれ考えてしまい
気も紛れない。

何もすることもない私は、部屋のある屋敷の棟の周りを散歩したり
ぶらぶらして過ごしていた。

何もせずに置いてもらうのも心苦しいので何か手伝いをと申し出た
のだがやんわりとミカエルさんに断られてしまった。

まあ、そうだよな。

名前も覚えていない『異界人』にさせられる仕事なんてそんなすぐ
に思いつかないだろうし。人手が足りずに掃除が行き届かない――
そんな様子もないし。見るからに瀟洒な別邸らしきこの棟は遠くに
見える壮麗な宮殿からは隔絶されているらしく、メイドさんや庭師
さんの姿もほとんど見かけない。
なのに、邸内もその周囲を囲む芝庭やガーデンも全く綺麗に保たれ
ているのは不思議なことだった。

「聖紋の効果ですよ」

ある昼食時にミカエルさんは不思議がる私にそう教えてくれた。

聖紋についてミカエルさんは

「エネルギーを使用者の望む形に発動させ、物質を生み出したり作
用を及ぼす印のことですよ」

と説明してくれたけれど…

「実際にお見せしないとわかりませんよね」

そのうち見せますからと微笑していた。なんでも普段の生活でも聖

紋は使われてはいるが、掃除なんかに使われている聖紋は効果が長いため毎回は発動させないのだとか。

ミカエルさんは親切だけど忙しそうだったからあえて深く突っ込まなかった。

なんていうか…聖紋に興味津々という訳ではなく、この個人的違和感はどうしようもないのはわかってはいる。聖紋か…

本当に別世界なんだな…

こうしてぶらぶら庭を散歩していると、イギリスとかの貴族の屋敷に泊まっている錯覚を覚える。

そういうお屋敷をホテルにしていると海外旅行に来てるとか。

でも。そうじゃない。ここは『ユラドーマ』。神官王ユシグが治める神官達の都市。都市の名はユマ。

なんていうか…

なんで28にもなってトリップしてるんだろう。

まあトリップに年齢は関係ないだろうけど…トリップって一方からみたら昔の『神隠し』だから子供がなるものじゃないの？

私の場合、『失踪』とか『行方不明』とか…むこうでは言われてるんだろうか。

迷惑と心配かけてるんだろうなあ…

なぜ私がここに来たのかミカエルさんもわからないとのことだ。

『守護者』が地球から異界渡りでユマに現れたことと何か関係あるのかもしれないですね、とミカエルさんは教えてくれた。

私はその重要人物のトリップに巻き込まれたのかもしれないってこ

とだろうか。

さらにいたたまれない気持ちになる。忙しいのに毎日様子を見に来てくれているミカエルさんに申し訳ない…

ちらつと聞いた話では、世界が待ち焦がれていた『守護者』が最近現れて、ユマの街はそのお披露目の式典準備で活気づいているんだとか。私の世話をしてくれているミカエルさんは神官王の親衛隊にいた『騎士』で、今は別の仕事をしているけれど準備に借り出されているので忙しいみたいだ。

「元、親衛隊士ですね。身分は今も変わらず騎士なんですが剣を握る機会はほとんどないですよ」

そうまた微笑するミカエルさんは後光が射して見えた。

はあ…まさか本物の騎士に会えるなんて、ねえ…

学生時代、夢中になったのが『三國志』だった自分としては、ミカエルさんはこの世界のマイヒーロー。

生活感がまるでなく完璧な超絶美形。所作も完璧な紳士。優しく親切。

女好きな感じでもない。

まだ20代だと言っていた彼は仕事も出来そうな大人の男性。

ほとんどの女性は気付いたら惚れてしまっているタイプだ。

たぶん20代前半女子までならね…うん。

確かに私もミカエルさんを好ましく思うけど、恋愛感情ではないのが自分でわかってしまう。

こういうタイプの人は見た目よりずっと奥が深いから、恋愛対象と

は見られない。なんていうか、次元が違うお方だ。

むしろ、王族や貴族のご令嬢との身分違いの恋が似合いそうだ。そう思えると接しやすい。ミカエルさんがやんわりと作り出す節度という壁によって、安心して話も出来る。

いきなり殺される、とか、命の危険に晒されることは多分ないだろう。

30近くなると、男性の顔立ちだけでときめくことは若い時よりさらに少ない。しかもこの状況下。今は、ただ命の危険がない方向に自分が向かっているのかだけが私の関心事だ。美形だからといちいちドキドキしているほど、のんきではないつもりだ。

数真を探しにいくと決めた意気込みはどこへいったんだろう。

こんなに保身的な人間だったかと自分にうんざりだが、世界が違なのだ。私の知る倫理観も法律も何も私を守ってはくれないのだからミカエルさんの個人的な倫理観にすぎるほかない。本当に、この世界に数真がいれば…

私は彼を見つけることができるんだろうか――

33 もう森になんか行かない

本日もミカエルさんとの昼食会が終わり玄関フロアまで見送った後、そのまま陽射しの中に出ることにした。

室内へ引き返してゆく侍女のキャサリアは相変わらず声をかけてもガン無視だ。ミカエルさんの前ではニコニコしているのに二人きりになると無言になるんだよね…。

たぶん、ミカエルさんのファンなんだろう。

キャサリアはまだ10代か20代そこそこみたいだし、異界人の私に不信感もある上に、ミカエルさんがらみで余りいい印象を与えていないんだろうと思う。

彼女のミカエルさんを見る瞳と私を見る瞳の温度差つたらない。

いちいち他人に敬遠されたくらいで傷つくほど繊細には出来ていないしそんな歳ではないけど。彼女は私の面倒をみるという仕事は嫌々ながらもきちつとこなしてくれているし。何も愛想までふるう必要はない。ただね…

私に警戒心を持つ必要はないだろうに…それともミカエルさんと話す相手には全てあんな感じなんだろうか？

ミカエルさんは宮殿や街でも広く仕事しているらしいからキリがないと思うんだけどね…。

まあいいか。それこそ私には関係のない話だ。

外国のインテリア雑誌にでてくるような硝子のはめ込まれた扉のむこうをぼんやりと見やると、並木道の緑の頂きが誘うようにさわさわと靡いている。

大理石で作られた静謐なエントランスを抜け、足元が見えるかどうかの長さのあるロングスカートの裾を踏まないように、ゆっくりと歩いてゆく。貰った服はどれも裾が長いワンピースドレスで、ふんわりとしたシルエツトが上品な着心地のよいものばかりだ。

足捌きがね、違うんだよね。本物の上質シルクに麻かレーヨンみたいな何かが混ぜてあって、サラサラツルツルなのに肌に冷たくない素材感で、凄く病みつきになる気持ちよさ。ロング丈でも足の動きは快適だ。

いつも姿勢正しく歩けば、裾を踏んづけることはない。あ、階段の時はスカートを少し摘まむことを忘れないようにしなければ。これは慣れてないと忘れがちだ。

ミカエルさんいわく、彼の好みに合わせたとのこと。ぱつと見シンブルながらも地味じゃない高級な品だというのがよくわかる。

高かっただろうこれは。

騎士って、中世も現代も貴族階級になるんだろうか。

ほら、アーティストとかがイギリス女王から賜ってるのをニュースでみた記憶がある。この世界でもそうなんだろうか？騎士イコール下級貴族みたいな？それにこの暮らしぶり。神官王に下賜された離宮での優雅な生活。頼んでもいないのに贅沢な生地を使った服を何枚も用意してくれる。迷いこんだ利用価値もない異界人に。

ミカエルさんってお金もちなんだろうか？お金も地位も顔も性格も基準値オーバーってどんだけ超人なんだ。

今はそのおこぼれというか余波というか、親切心にありがたくすがらせて貰います。

お世話になりっぱなしで何かお礼が出来たらと思うけど…行く末不明な迷い人にそんな機会がくるのかどうか…。

私は木陰を歩いていく。

爽やかな風が暖か過ぎる陽射しに心地いい。

こんな日がたつぷりあるなんていいところだ。

これが地球でただの旅行だったら最高なのに。

ユラドーマも地球と同じで日本みたいに四季がある所とそうでない所があつて、ユマは春と秋が長くて冬でも雪は滅多に降らない程暖かいとか。

夏は少しは気温は高いが湿度は低い為意外と過ごしやすいとのこと。いまの季節は、日本でいうと晩春から初夏といったところか。

玄関付近は馬が通るので土を固めてあるのだけど、道から外れると芝が広がっていて清々しい。

屋敷の周りには庭が作られていて花や植え込みがある。

見ているだけで飽きないけど庭のむこうは森なんだよね。

…行ってみようかな。ミカエルさんに止められている訳でもないし。宮殿に近付かなければ大丈夫なんじゃないかな。私は庭の一角からそつと森へ入って行った。

…後から考えるとそれが大きな間違いだったのだけれど。

汗ばむ手前ぐらいの陽気。鳥の羽ばたきや緑がそよぐ音が風に溶けて流れてゆく。

自分の髪も肩下までの長さながら風に靡いて涼しくて気持ちいい。

風は緑を含んだ澄んだ匂いがした。

歩いてゆくとちょうどよい木立の群生をみつける。

少し低めのサクラみたいな樹木が並んでいる。

下草もふわふわでいい感触だ。

今日はここを通ったら引き返そう。

そう決めた私は一步、樹木に近付いた——その時グツ、と何かに肩を捕まれる感触がした。

「待て」

またいきなり掴んできた。今度は手首だ。

心臓が冷えた。

ミカエルさんの声じゃない。第一、彼ならこんな振る舞いは主義に反するだろう。

「——ふ……うつ……」

どう反応すべきかわからずヘンな息を吐いて振り返ると相手はまじまじと見返してきた。

「それが異界流の挨拶なのか？」

見覚えがある……逆立てた部分と流された部分が狼みたいな印象の肩までの紅い髪。

細められた猫みtainな金の瞳は珍しい獲物でも見つけたかのように、揺らめいている。

男は黙って手を私の腰に廻すと掴んだ右手をぐいぐい引つ張って駆り立てていく。

「ちよっ…」

「さっさと行くぞ。ヤツらのテリトリーに入るな」

あつというまにサクラもどきの木立から離れて拓けた場所にいた。

「ここまでくればいいだろう」

「あの…確かお会いしたことありますよね」

「そうだが？」

煩そうに見てくるのは、あのトリップ時に出くわしたミカエルさんの関係者。美形軍団の一人だ。あれ以来誰にも会ってないけどまさかこんな所で再会？するとは。

私が掴まれていたままの右手を丁寧を外すと、彼はじつとまた見つめてくる…いや睨まれているんだろうか…？

端正ながらもまるでスポーツ選手のように厳しい顔付きをしているこの人も、ミカエルさんとは別の意味で表情が読めない。

とりあえず腰に廻した手というか腕を離して欲しい…。

密着状態のまま固まって、何とか切り出そうと口を開きかけたその時。

「…何もわかってないようだな」

「は？」

眉根をしかめた彼は私のマヌケな返事にさらに眉を寄せた。

「あいつらのテリトリーに入って何をするつもりだったか知らんがそんな軽装では無謀だろうな」

「…テリトリー？」

彼の答えは簡潔だった。

「耳を澄ませろ」

言われた通りにしてみる…

「まあこれだけ離れたらもう聞こえないか。少し戻るか」

「ちよっ…」

ぐいぐいまた右手を掴まれて木立の近くまでやって来た。

「聞こえないか？」

「…」

あ。

確かに。何かブーンというような超音波的な微かな低周波が聞こえる。

「ミナガバチというミツバチを捕食する獰猛なハチだ。ああいう腐りかけの木のウロに巣を作る。今の時期は特にエサ集めと巣作りに気がたっている。そんな格好で近付けば一発だ。」

刺されたいのなら別だがな」

淡々と説明しながら、ふ、と微かに…かなり微かに笑ったようだった。

怜悯な顔立ちの、ふいの揺らぎに私は意味もなくなたじろいだ。意外にこの人は見かけより若いのもかもしれない。

「……ありがとうございます……」

ハチの巣に向かってたところを助けられた訳ですか。つくづく、私ってこの人たちからみたら迷惑かける存在……申し訳ないです…。

「いや…礼には及ばない」

いたたまれなさに俯く私はまた、ぐいと腕を掴まれた。

「え？」

そういえば腰に廻された手はそのままだった。いったん距離が離れていたのにいつの間にかまた密着状態になっている。

戸惑う私にかまわず、鍛えられた筋肉の硬い感触が覆いかぶさるように伝わってきた。

…え？

「…ちよっ」

…抱きしめられてる！？

「いい気持ちだ…」

私の腰から背中へと彼の大きな両手が這うように上がり、彼は場違いにもうつとりと呟きを漏らしている。

オーデコロンとは違う香りに鼻腔を掻き乱されて私は混乱していた。自分とは違う暖かい体熱に、被さってくる彼の荒い息が顔に当たって。

…荒い息？

って、興奮というか欲情してるんですか？

どういうこと？

どういう状況だこれ。

顔が見えない彼は、真面目な口調で言ってきた。

「…キスしたくなっただな」

は！？いきなり何ですか！？

片手が後頭部にあてがわれ持ち上げられ腰を密着させられ…何も言えないままに。

「ん…んんっ！！？」

わからない。

これが挨拶？このファンタジーな世界流の。

ほとんど、いや完璧にセクハラだから。

いきなり唇を貪られて舌を絡めるわ吸い付く唾液を流し込むわ…

思いつきベロチューされた。

「んんんっ！！？」

しかもこの男、めちゃくちやキスが上手い。腰が砕けそうだ。

いくらイケメンだからってこれ…セクハラというか痴漢…迷惑行為じゃないのか…？

慌てふためいて現れたキャサリアのおかげで、それ以上の行為には及ぶことは免れた。

「ミカエルにひとつ貸しを作っておくのも悪くない」

と…意味不明なことを言ってきた。しかも自分の唇を名残惜しそうに拭いながら。

「おい、女」

「…な、何ですか」

「美味かった」

「は？」

「だからなかなか良かったと言っている」

ニヤリと不敵な微笑。

…やっぱり見かけ通りの狼男に違いない。
なんてヤツだ。

「勝手に出歩かれては困ります」

私を見るキャサリアの冷やややかな視線が痛い。

「すみません」

居候の身で異性問題なんて叩き出されても仕方ない行為にひたすら
小さくなる。

名をセラフィムというらしいこの要注意人物。

あの時…この世界へのトリップ？時のメンバーには、まだ一人にしか
会っていないという事実を…この時の私は後から考えると、あま
りにも軽く受け止めていた。

34 案内人

…なんてこった。

トリップして自分より若い男にキスされるなんてベタな展開。

まだこの世界にも馴れていないというか、状況が掴めていないというのに。

トリップなんて認めたくないのに。

ベタ過ぎる。 いったいこれは現実なのか？

「自分で蒔いた種でしょうが」

自分で自分にツツコミをいれる。

誰もいない『私の部屋』…洗練された調度品にファブリック、衣装の品々。

何一つとして自分のものがない。すべてミカエルさんから貸されたり頂いたモノばかり。そこに私の意志はない。 もちろん思い出も、何も。

…昔、囚人には私物を持つことを禁じられていたと聞いたことがある。確かテレビか何か映画でのワンシーン。

それはモノを持つことがその人の拠り所となるから。 刑罰として拠り所を奪った、と。 たった一本のペンや一枚のカレンダー、それらは自分という存在が時間の中で確かに進んでいることを教えてくれるから。

だから行動を制約され私物を持つ自由を奪われた人の時間は、止まる。

生きていても、死んでいるのと同じ。幽霊みたいなものだ。

…むなしい。

今の私はたいして囚人と変わらないじゃないか。

数真を探しに来た？のに、なんでこうなったんだろう。

「…で、こんなところで引きこもりしてればそれで済むんですかね？」

「！？」

「ひさしぶり…」

どこか疲れたような眼鏡男子。
見覚えがある。

というか…

さつと顔色を変えた私の瞬間的動作により、彼は捕獲される。
忘れもしない、この笑顔。

「苦しいですねえ…」

「な・ん・で・ここにいるの！？」

「えっと、ノックしましたけど返事がなかったのだから」

「そうじゃない。なぜあんたがコッチの世界にいるのか聞いているの！」

マサハル。

忘れもしないあの時…トリップしたのはこの男のせいだ。

「首元を離してもらわないと話しても出来ないですよ…？」

よくみたらコッチの衣装らしきグレーのゆったりしたシャツに、黒の皮っぽいパンツに膝丈の編み上げブーツ。粗末ではないが貴族っぽくもない出で立ち。

「…説明してもらいますからね」

「呼び捨てとはただ事ではないですね…言っときますが」

虚をつかれた私をニヤリと嫌みたらしくねめつけ、わざとらしく襟元を直しながら言ってきた。

「心を読んだわけじゃないですよ。あなた、わかりやすいですから、なんとなくそうかなって」

クスクスとイヤな微笑にイラついた。

ここに来てからずっと抑えていた感情が、忌々しいとはいえ懐かしい世界の住人を見てしまったことでセーブがきかなくなってしまうたのかもしれない。

もっと首を絞めてやればよかったか…と物騒なことを本気で考える。

「怖い怖い。喧嘩しにきたものではありませんよ。」

ただあなたが思わぬ苦戦をしているので、案内人としてアドバイスに参ったわけです。ありがたいでしょ？」

どこか得意ながらもあくまで気だるげな口振りは神経にピリピリときたが…

はあ？

…案内人？

得たり、とまたクスクスと笑った。

嫌味な感じ。

しかし、その印象にはちよつと違和感を覚える。

マサハル…くんはこんな笑い方をするような人じゃなかったような

…

「当たり前。彼はあくまで橋渡しの存在だから、あなたの意志を確認して、門を開いただけ。ここから先は、ボクの役割だね」

「よくみたら、あんたはマサハルくんじゃあない…？」

「今ごろ気づくわけ？ニブイねー『姉さん』は」

35 案内人ゝ2

「あら、凍っちゃった？あ、勝手に寛がせてもらうからどうぞお
かまいなく」

固まった私の目前をすいと通りすぎ、壁際のソファに座ると男は話を再開する。

「姉さん？」

「私のはあなたの姉さんじゃない…止めて。その呼び方」

「ずいぶんと強気だな。昔のあなたとは思えない。でもまあこの状況だし、ね」

この喋り方。

男はわざとらしく真似ている。

こんなことをするのは確かに、マサハルくんじゃない。

「あんまり時間もないからね、要点だけ」

酷薄そうな薄い唇がにい、と歪む。

「あなたの探すべきなのは、『想い』だよ。

弟くんのあなたへの『想い』はこの世界の高貴なお方に憑依した。
中途転生…とでも言うかな」

数真の…想い？

「うん。愛を探すなんてロマンチックだね…まあ見つけなければあなたは帰れないからそんな浮かれてもいられないけど」

愛を探す？

いや、この男は今大事なことを言った。

「帰れるの！？」

思わず駆け寄ろうとする私に片手を上げて静止を求める。

「待つて。まあ、今の段階ではヒントはこれだけ。取り敢えずは見つけてごらんよ。そうだね…まずはこの国の神官王に会つといいね。次のヒントはそれから。ああ、あとね」

男は立ち上がると、眼鏡に手を掛けた。

「あなたは守護者ではないけど、似た性質を持つてるから充分気をつけてね。じゃ」

「待つ…！？」

消えた。

「どづいつ…」

忽然と消えた男の姿は夢じゃないかと不安にさせるが、私はソファの座面に手を当てて確信した。

温かい。ほんのりと。

確かに、いた。マサハルもどきの男が。

「案内人…」

声に出すと不安よりも戸惑いが強くなる。

元の世界の私を知っている口振りだった。

「なんなの…」

はたから見たらバカみたいなほど私は落ち着きなくうろつろと部屋を歩き回った。

色んな感情が渦巻く。

数真の記憶が…いや記憶ではなく想いといったっけ、それが、『憑依』『中途転生』…？

それとなんといったっけ？

「神官王…に会うこと」

胡散臭げなマサハルもどきに与えられたヒントが、どこまで真実かはわからない。私を踊らせて楽しむだけで言った言葉かもしれないという可能性も、捨てきれない。

でも。

数真。

この世界に来てからも忘れたことはない。むしろ、以前よりもさら

に私は数真に会いたくて堪らなかった。

『姉さん』

懐かしい笑顔。

夏の日射しに映える、嬉しそうな笑顔。
数真に受け入れられ、求められている喜び…こうして思い出すだけで胸がじんわり温かくなる。こんな状況なのに。

「…」

会っしかないだろう。

神官王に。結果はどうなるかわからないけれど、今のところ、それが数真に会うための唯一の手掛かりなのだから。私は大きく溜め息をつく、キャサリアを捜すために部屋を後にした。

36 神官王

どこまでも続く螺旋階段。

壁に所々ある灯りが全体を月明かり程度には照らしている。

黄色い淡い光りは聖紋効果か揺らぎもしない。無機質な灯りは、安らぎを与えるどころかこの状態が終わりのないような気さえしてくる。

…落ち着かない気分だ。

空気はひんやりと肌寒いが、こうして動いているので身震いするほどでもない。

確か神殿の中庭に馬車で送ってもらってそれから、かれこれ小一時間歩いている。

ここはどういう構造をしているんだろう…鉾山の坑道みたいな回廊からさらに、螺旋階段状に地下へと続いてきたことから察するに、白い岩山をくり貫いて造ったんだろうけど。

神殿は岩の内部を地中深くに向かって造られているのだろう。遠くからだと、ただの白っぽい建物に見えたのは岩を彫刻して作った外壁だった。内部も凝った装飾だ。

レリーフやら唐草風の模様やらで壁や天井は華麗に飾られていて、近くで見るとその細やかさ緻密さは美しい…が、異様な雰囲気。

聖なる神殿は全て人の手でつくられたという。

あの、聖紋とかいう魔法の仕掛けは使わずに彫ったとか。

木彫りの熊とかならみたことがあるし、中国の石仏とかで、岩山が何かを彫ったものもテレビでみたことはあるけど…

こんな深くまで掘り込んでも崩れない、つまり固そうな岩石を彫るのはどれだけの労力なんだろう。

巨大な岩石にこれほどの細工をするってどれだけ人件費かけてるんだ？

現代の先進国では人権もあって、人の命は地球より重いつか建前上言われてるけれど。

ここでは、命が高くないから人件費も安い…ということなのか？有り体にいっちゃえば命にも値段の差があると…身分制度が厳格な階級社会。

それがこの華麗すぎる手間暇のかけっぷりの根拠であるなら、気が重い話だ。

あの、馬車の事故が頭を掠めて行く…。

ともかく、こんな巨大な岩山を神殿にわざわざ仕立てなければならぬ理由って何だろう。

…考えもつかないな。

段々と暗く足下が見えにくくなってきた。

「聞いてもいいですか？」「はい？」

「急に王との対面を仰るその心の準備はどうして出来たのでしょうか？」

ミカエルさんが私を、澄んだ瞳で見ってくる気配がした。

数歩分下の階段に立っているミカエルさんとは身長バランスがちよ

うどいい。

「何か、ありましたか？」

やっぱりミカエルさんが言ってくる。

…それ、いまここで聞くんですか…。

神官王に会いたって軽くお伺いたててみたらアッサリOKだったですよ、ね…

ミカエルさん、大事なことは後で確認するタイプなんだろうか？

この間の、マサハルもどきの一件。これはミカエルさんは知らない。どうやらあの男は離宮の防犯セキュリティをやすやすと突破して侵入し、その存在を気どらせることなく脱出もしていったらしい。

ミカエルさんはもちろん、キャサリアも知らない様子だった。

忽然と消えたマサハルもどき。いったい彼はどういう存在なのだろうか…確か『案内人』とか自分で名乗っていたが。

…案内人って？ この世界の？

よくわからない。

数真の口真似なんてして、なんとも悪趣味なヤツだった。あまりいい感情を彼にもてそうもない。

唯一の手掛かり…この世界から脱出するための…だから嫌ってはダ

メなんだけど、彼と冷静に対峙するのは難しそうだ。

こんなコトありましたよ…なんてミカエルさんに言えない出来事…いや事件だ。

その前の、赤髪の男との思い出したくもない事件は、キャサリアから連絡を受けているだろうから、詳しく追及されていないとはいえばっちりバれている。

最悪だとは言えない。

最初の馬車の事故については、ミカエルさんは何も教えてくれないし、私もあえて深く聞いていない。

怖すぎるのだ。自分のせいで誰かがもしかしたら…死んだかもしれないなんて、この世界でどう償えばいいのだろう。

あまりにも問題が深すぎてあえて考えないようにしていた自分は大人として最低だ。

「いえ、私は名前もありませんし、この世界ではみなさん神官さまに名付けて頂いてるんですね。だからあの、図々しいんですがどうせなら王様に名付けて頂きたいなと」

ホントどこまで図々しいんだよ…と思いながらも白々しく考えておいた言い訳を口にする。

もといた世界でならともかく、この世界の常識を知らない私は何かやれば必ず他人に迷惑をかけている。いまのところは。

だから神官王に会うのも、どうなのかという気がかなりするが、元の世界に帰るため…そして数真に会うためと自分に言い聞かせてや

ってきた。

もし、トリップが10代の頃だったら。

離宮でしばらく過ごしてあの赤髪狼男と嫌々お近づきになって神殿の外側の街にいたり、自分が出現した町に出掛けたり、とまどるっこしい手順を踏んだだろう。情報を固めて、数真を探しながらこの世界で生きていく算段をしたのかもしれない。

強かに、遅しく、気が弱いくせに頑固なあの頃の私なら。自分の弱さに酔って溺れていられた…

…このゲームみたいな世界に。

ゲーム？そうか、これはゲームなんだ。

数真の、私へのあの狂おしい執着を取り戻せるか、どうかをかけた。

それならいいじゃないか？

ヒントは出てるんだし、怖いけど、もういきなりラスボスにアタックしてみよう。

どうなるか予測はつかない。もうこれ以上考えてもどうしようもない。30間近だといまさら新しい世界に馴染む気持ちなどさらさらず、だからこんな思いきつた行動力が出てしまう。

ミカエルさんは美形、お世話になっているけどそれだけ。赤髪の狼みたいな印象のあの男…名前は忘れかけたが、確かセラフイムとか言ったか、アレは最低だ。あの時ビビってしまった自分を殴りたい。後から腹立てたって遅いのに自分のはつきりしない性格がうっとうしい。

私は、数真に会いたいだけだ。

あの頃の数真に。

「よい名前を頂けますよ」

ミカエルさんはいつのまにか歩きはじめていて私も後を追ってゆく。
私の返事などはじめから大して興味なかったかのごとくあっさりしている。

この人もよくわからない人だ。

「…さあ、着きましたよ」

37 神官王²

扉が開く。

…側に厳めしい武装した門番も地獄の獄卒みたいな兵士もいなかった。

拍子抜けした気分で、重そうな石造りの扉をミカエルさんに続いて広間の中へ足を踏み入れた。

石造りのドアなんて初めてだ。

ミカエルさんが扉の模様の一部に掌をあわせると、青い光りがそこから発光しゆつくりと周囲に広がった。私とミカエルさんを青い光りが包み、光りはキラキラとまわりついたかと思うと唐突に消えた。

まるで打ち上げ花火の残光かというようなあえやかな輝きだった。

「さあ、入りましょう」

…

息をのむ。

凄い。

これは…なんだ。

圧倒される。

「広いでしょう？」

ええ。まさか地下にこんな天井が高い広々とした広間があるとは。かなり度肝を抜かれた…

市民体育館位の広さはある… ちょっとしたアイドルのコンサートくらい開けそうだ。

この世界にアイドルがいるのか知らないけれど、ここは神殿だからミサ？ 祈祷？ 降臨の儀式？

…とにかく神にまつわるなんらかの会合というか集会でも開く場所なんだろうか？

全校集会… なんて高校以来の懐かしい響きの風景を思い出す。まあ、通路が狭いから、そんな人数は危険で集められないだろうけど。

「こちらですよ、レディ」

「す、すみません」

レディ、は… スペイン語ならセニョリータ。日本語ならお嬢さん。未婚女性の一般呼称だ。

恥ずかしいね… でもミカエルさんは騎士だから。

文句なんて言えません…

衣食住の元になる御方に逆らえるわけじゃないか。今の私は単なる穀潰し。立場はわきまえてる。

今更ながらここの世界の言葉は日本語として脳内変換されて理解出来るから便利。

でも文字はかなり気合いをいれないとさっぱりわからない。ついでにミカエルさんの離宮にあった書斎の本は読んでもいいと言われたが神語とか古代文字が混ざり過ぎててまったくわからなかった。

よってこの世界の基本的知識はミカエルさん頼み。忙しい彼に無理も言えず、トリップしてきて2ヶ月近くたつのにたいして知識は増えていない。

…もといた世界の仕事…については考えないようにしている。たぶんクビになっている…ね、うん。

舞台のように少し高くなっている場所を目指して歩くミカエルさんを追う。

舞台の脇にある一見普通のドアも、さっきと同じように聖紋の認証にて解除し通り抜ける。

聖紋ってこの場合、最新鋭のロックシステムみたいだ。静脈確認とか…顔認識とか…

「着きましたよ」

細い通路の先にあるドアを今度は普通にノックし、待つ。

やがて、ドアは開き招き入れられる。

…

「レディ？」

世界が、白くなる。

その瞬間、息を忘れた。

「…」

自分が、息をのんだきり動けなくなるのはとても不思議な現象だと思う。しかもそれを知覚しながらも全く動けない…

懐かしい人がいた。

「来たな…ミカエル」

振り向いた、その人は。

「はい。陛下。こちらがお話ししたご婦人です」

「異界からの稀れ人か…どうした？」

声も…

「レディ？」

ミカエルさんが何か声をかけてくれている。

「…ど…して…？」

その人から視線を外せられない。

胸が痛い。熱い。

身体中が、軋むように熱い。

唇が勝手に震えて声は私の意志を無視する。

こんなに、似ているなんて。

「か…ずま」

その人は訝しげに眉をひそめる。

「なんだ？ 具合が悪いならまたの機会にしてもいいが」

「レディ？」

似ている。

声も顔も。 体格も雰囲気も。

不遜で傲岸な、でも繊細な…その強い輝きに煌めく茶色の妖しげな
静かな瞳。

数真だ…

私の目の前、2メートル先にいた姿は。

まさにかつての数真そのものだった。

38 神官王₃ (前書き)

少し暴力表現あります。

38 神官王と3

神官王。

ユラドーマ大陸における最高神をまつる神殿を統べる神官長であり…
かつ神殿のあるユマの街を支配する王でもある。

ユラドーマのほとんどの地域は都市国家の単位であるが、辺境では
村単位で自治制度が採られている。

ユマの街自体はそれほど大きくはない。しかしユマには神殿があり、
神官学校や各種商会の活動も盛ん、大都市との中継都市として栄え
ており活気に溢れている…と、乏しい知識を思い浮かべてみる。

「面白い顔をしている」

その神官王、ユシグ。

数真…ではない。

端正な線の細い繊細な容貌。だが男性的な色気に溢れた伸びやかな
肢体は、神官長一族の民族的特徴なのだろうか。

ヨーロッパ系のミカエルさんやキャサリアとは違う、アジア系。初
めて見る。この世界で。

「そなたの顔…我が一族に通じる特徴がある…似ているな」

威圧感にじりじりと圧される。

数真にそっくり…なのに。

安心出来るはず…なのに…

…

自分の顔が強張ってゆくのはなぜだろう。

「…これほどとは、な…ミカエル、お前も人が悪い。この俺をたばかるつもりだったのか？」

「いいえ、滅相もございません。私も初めは驚きましたよ。陛下」

「ふん…まあいい。そういうことにしておいてやる」

私を映す茶色の瞳に吸い寄せられる。

剥き出しの拒絶の色。胸がギリギリと締め上げられるように緩やかにその感情に絡めとられていく。

思い返せる記憶の中の、数真の表情が勝手に脳内検索されてゆく…

この男は、違う。

数真のこんな顔は見たことが、ない。正視するに耐え難い…なのになぜだか吸い寄せられていく。

「何も知らないとは気楽なものだな」

ひとつ、つまらない話に付き合ってもらおう、と男は爽やかな微笑をゆるり、と浮かべた。

「我が母も守護者であり異界人。この大陸の者なら知らぬ者はいない。

そして期せずして守護者として…私の伴侶となる者が、お前と同じ国からやって来た。ただし、お前より遥かに若く、美しいがな」

そしてまた一步、こちらへ進んだ。
王者はもう目の前にいる。

「…では聞く。」

お前は何用でこの世界へ来たのか」

剣呑に光る瞳。

…違う。

違う違う違う。

数真じゃ、ない。

「異界人にはなんらかの役割があり、その訪れ時には必ずや意味がある…そう信じられている。実際にそうであったしな、間違いはない。」

手が、伸びてくる。

「災厄を招く者よ」

数真の…いや、ユシグの指に引き摺られるように乱暴に顎を引かれた。

「…!!」

「忌々しい…その貌かおその声も、何もかも、だ。なぜ今頃現れた!？」

「…ッ!？」

思いきりひきすえられ、アップになった数真の…いや、ユシグの顔は信じられないほどの憎しみにたぎっている。

…ザンッ…

「あ…う」

石床に叩きつけるように払い落とされ、私はしこたま胸を打ち付けた。

…かなり痛い。本当に息が止まった。

暴力を振るわれるとは思わなかったから、ショックだった。身体が震えてくる。ユシグはそんな私へ、忌々しげに顔を歪めた。どこか苦しみでもある。

痛いのはよほど私のほうだが、何故か泣き出しそうに一瞬見えた気がして、私は彼を見上げていた。

…

荒い呼吸音。

私と、ユシグの。

這いつくばって見上げると、王者はフイと目をそらした。

「チッ…ッ」

「陛下? 如何しました?」

「何でもない。何だ？」

「この者の処遇ですが、いかがいたしますか？」

「…そうだな、この顔を知る者は今はそう多くはないが…」

考えるそぶりはすぐに止まり、取り戻した冷酷で冷ややかな気を私へと向け、低く言った。

「この女を幽閉せよ」

数真にそっくりな、怖いくらいに端正な繊細な顔。

その美しい顔に灯るのは憎悪の炎。

拒絶の意志。

「また離宮に…でしょうか？」

「それは生温い。ミカエル」

「は」

「お前はこの女を俺に見せる以上、その処遇について重々承知で参ったのだろうか。たわけたことをほざくな」

「では…」

「この神殿の…処刑塔」

「もう使われておりませぬ。警備の者も誰もおりませぬが如何しますか」

「警備など要らぬ。私の聖紋をつければ何人もあの塔には近づけない？この顔に用があるのは俺だけだ」

足音。王者が来る。

這いつくばったままの私の前で立ち止まった。

「知っているか？処刑塔に入った者は二度と城下には出られない。出る方法は2つだけだ。

死体袋に入っでるか、刑場へ向かうためか、のな」

彼を見上げている私に向けられるのは、誰もがうつとりするような魅惑的な微笑み。

数真そのものにしか見えない衝撃に、私はビクリと震えた。

「幸運だな」

しゃがむ。伸ばされたその手はまた私に。私の頬を撫でてくる。

撫でられて、背筋に震えが走る…こわいのか、何か、わからない…目を動かすことすら出来ず、でもこの男の瞳から反らすことも出来ない。なぜか優しい声色も、似ていないと思いたいのに、震える心は見つけたと叫び続けてとまらない。

数真…？数真…なのだろうか。

「お前は幸運だ。俺が飽きるまでは長らえられる。」

…その顔に生まれたことをせいぜい後悔するといい」

―…顔…？

王者がさつきから繰り返している言葉に私は思い当たる節はなく、
いつそう困惑が深くなる。

「覚えておられるだろうか」

…何を？

思わず聞き返しそうになった。

ああ、でも。王者は私を見てはいない。正確に言うと、その潤んだ
…憂いに満ちた瞳には、私を通して別の誰かが映っている。

ユシグはその誰かに向かって語りかけているのか、独り言を言っ
ているのか。

「俺たちは何処までも一緒に…おのが命が尽きるまでともにあると
約束したな」

「忘れたとは言わさぬ」

たぶん質問するのは私ではなく。決めるのも私ではない。

「神は忘れてはいなかった。逃げるだけ無駄だった…」

甘やかな、脳髓に染みる掠れ声。ひと度聞くだけで、私の足下が暗く抜ける…絞首刑の仕掛けを連想する。それはただの錯覚なのか予知なのか、まるで見当もつかない。

「…顔をみせろ」

震えるユシグの睫毛。輝きに揺らめく瞳。

「…憎いお前の顔を見るだけで、なぜこんなに俺の心は動揺する？
…見事なまでに瓜二つだな」

彼の囁く甘い声は、やはり数真そのもの。
切なくも狂おしい響き。

「この感触…」

抱き締められ、私の中を通り過ぎる甘い甘い、囁き。

「逃がしはしない」

数真の匂い。
懐かしい数真の匂い。

「俺は…絶対に許しはしない。二度と俺を裏切らないようにしなければ、な」

ユシグに抱き締められ甘やかに捕えられてゆく。
懐かしいこの感触の名前を私は探し当てていた。

— …… おかえりなさい ……

「—— …… 姉上」

それは、狂おしいまでの執着という名の愛。

39 神官王 4

— …『姉さん…』

「姉上…あねうえ…」

ユシグの重みに息が出来ない。抱き締めてくる彼から逃げるように後退る…

ドン、と背中に当たる壁の感触に心臓がまた鼓動を早める。

「…ちよっ…」

「黙っている。声を出すな。姉上はそんな粗忽な声はあげぬ」

ユシグに指摘され私は固まった。

「…同じ匂いがするな」

ユシグに壁に押し付けられている私とミカエルさんの視線が偶然ぶつかった。

こちらを見下ろしているのは…一点の曇りもない微笑を唇に刻んで佇む麗人。

…——王に会いたいと言われたご自分を責めてくださいね。

私は貴女を自分から王に差し出したりはしませんでしたしね…

と言っているかのような微笑を浮かべるミカエルさん。目の前で、

この展開になつてゐるのにその微笑……騎士さまも、とんだ腹黒二重人格者だつたつてことだと私は理解した。

しかし、今はそんなこと考へてゐる場合じゃない。

「ミカエル。いつまで不粹をするつもりだ？」

「いえいえ、今から消えるところですよ？しかし其の一人はお付けしますから」

「ふん…キャサリアか」

勝手に話し合う二人。

ユシグは私を馬鹿にしたようにジロジロ見ながら、ハッ、と息を吐いた。

「姉上に似てゐるのは入れ物だけだな。色気もない、品位も姉上には当然遠く及ばぬ」

…

「その言い種はなんだ！！失礼な！！このドS野郎！！」

…と、口に出れたらさぞかしスツとするに違いない。

「…」

でも私は唇をきつく結んだだけだ。

勝手なことばかり言つて、なんなのこの王様！と非常に悔しく思つし、罵倒したい。本当は。

でも…反論、したら駄目だ。

感情的になってている相手にそんな台詞は、火にさらに油をぶっかけるような行為。

この陰険王は、私に腹をたてている。

自分を裏切った姉上…に似ている私を。似ているだけで別人でしかないという事実を。

そんな、どうにもならないことに腹をたてている、子どもだ。

「どうした？何か言いたそうだな？」

「…」

「つまらん女だ」

また私は唇を咬んで耐えた。

この…途方もない疲労感…数真に似てるのは顔だけだな、この王様。

数真は確かにネチネチしたところもある。腹黒いし二重人格。けど、こんなストレートに暴言を吐くタイプじゃなかった。

やはり、彼は数真じゃないのだとあらためて思う。

「入れ物だけでもまだよしとしてやる。

どうせ、中身は本物ではないのは分かりきったことだ。お前は姉上であって姉上ではない。俺に隷属出来るだけ光栄と思え」

耳元で囁かれた。

黙ったままの私を一瞥して、反論がないことに満足げに微笑すると、

また家臣へと命令を再開した。

「ミカエル」

「は」

「この女は処刑塔にいれる…が誰にも覚らせるな」

「恐れながら陛下…守護者にはじきに分かってしまつかと思います
が」

「…」

ジロリとユシグが睨むやいなや、騎士の柔らかな笑顔に一瞬緊張が
走った。私は目を見開いた。

「だから？」

…機嫌の悪さを前面に押し出した声。

ミカエルさんが返事をするまでに少し間があったのは、気のせいじ
ゃないと思う。

「…いえ。わかりました…善処いたします」

「この件はお前の管轄にする。わかったらさっさと出ていけ。邪魔
だ」

この王様のことが苦手なのか、肩を竦める仕種こそないが、そんな雰囲気溜め息を微かについて、ミカエルさんはさっさと出ていった。

「…さて」

「ッ!？」

冷静に観察している場合じゃない。ユシグの体が覆い被さる体勢で私は壁に押し付けられたままだ。

「おかしな声をたてるなと言っているだろうが」

ぐい、と顎を掴まれる。

「……やけに挑戦的な瞳だな」

「気の、せいですよ」

「へえ……」

…この横暴な王様は私をどうするつもりなんだ。

姉上とやらの変わりに幽閉して、いたぶるつもりなんだろうか？

かなりその人に対して歪んだ愛情を持っているらしい。

私にそっくりだというユシグの姉。

数真にそっくりなユシグ。これは偶然、なのだろうか？

「お前は どうして欲しい？」

「…え」

「寝台があるのに床で睦みあうこともないだろう。さっさと来い」

「ッ…」

数真と同じ顔、同じ身体、同じ声に何故か身体が勝手に反応してしまっ…多分、顔が真っ赤だ…いい大人がこれくらいでたじろいどうする。

腕をつかむやいなや、ユシグは体の向きを変えて、後ろから抱き締めてきた。

「…な…!」

「首が弱いのか。姉上と同じだな」

「勝手に…首…舐めなっ…離して、下さい…」

「ああ、そうだな」

ベッドヘドサリと投げ出される。荷物みたいに乱暴に、ユシグは私の身体を放した。

「何…」

「そんな欲情した顔で言っても逆効果だろう。解らないとは、浅はかな女だ」

感情の高ぶりなど微塵もない恬淡とした口調と冷めた顔。

「……」

「喋らなければ分からないとも思っただのか？」

雰囲気も何もあったものじゃない。

この既視感……確か少し前にも離宮で似たようなことがあった。
赤髪の狼みたいな男……

この世界の男はみんなこんな奴ばかりなんだろうか……
いや。この男はもっとおかしい。

ついさつきまで、自分の姉への泥々した思い入れの延長線上に、私を見ていたのが。

今の……ユシグの目は、私を見ている、ように感じる。愛しい人にみ
てくれだけが似た存在、でしかない私として。

冷ややかに、計算深く。

「自分の立場を忘れてはいけないな……」

「立場……」

「……察しが悪いな、本当に」

思わず素でオウム返しをしてしまった私を睨むと、やがて、見てい

るこちらが蕩けてしまいそんな笑顔を浮かべるユシグ。男女ともに魅了される笑顔だ。ただし、喋ると台無しだが。

「まあ…いい。俺は自分から女は抱かない。姉上以外は屑でしかないからだ。意味は解るか？」

「私に…どうしろと？」

「俺に気に入られなければお前の安全の保証はない。さて、お前はどうすべきかな？」

ベッドのスプリングが響く音もなくふんわりとユシグは私のすぐ側に座ってきた。とてつもなく卑怯なほどに艶やかな甘い笑顔を淫秘に薫らせて。

「ねえ、『姉上』？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2273u/>

ミニマムビターハート

2011年11月14日12時14分発行